

# ROAD

Annual Report  
2024



2025年3月 第**13**号

国立大学法人 愛知教育大学  
国立大学法人 静岡大学



2024年度報告書



学位論文最終試験（9月修了）

2024年7月14日（日）

於：静岡大学 教育学部G棟 G202室

Annual Report 2024



室伏 春樹



小柳津 和博



岡村 明夢

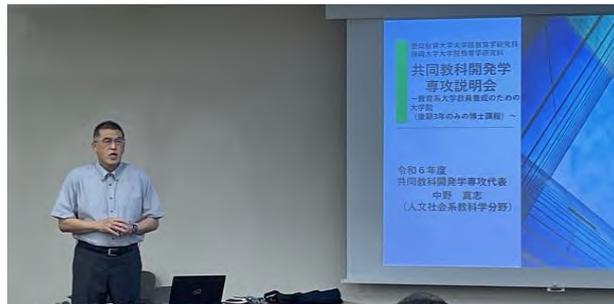


愛知教育大学大学院説明会

2024年7月21日（日）

於：愛知教育大学 本部棟 第五会議室

Annual Report 2024



## 第15回教科開発学研究会

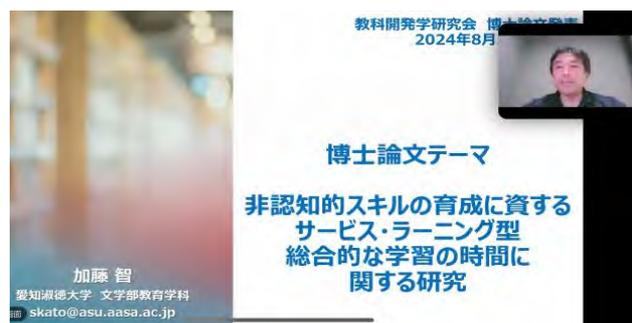
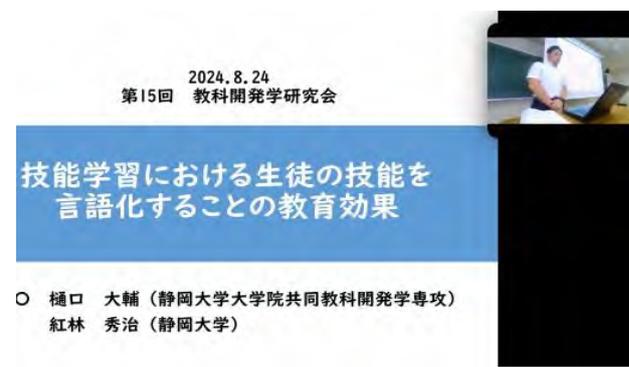
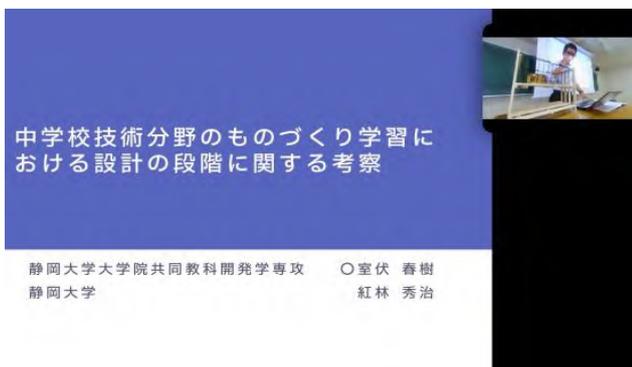
Annual Report 2024

2024年8月24日（土）

ハイフレックスで開催

於：静岡大学 教育学部G棟 G202室、G201室  
オンライン（Zoom）

### 連絡協議会議長挨拶



## 教科開発学セミナーⅢ

Annual Report 2024

2024年8月25日（日）

ハイフレックスで開催

於：静岡大学 教育学部G棟 G202室  
オンライン（Zoom）

2025年1月11日（土）

於：愛知教育大学 教育未来館3階 多目的ホール、講義室3C

杉山 元洋



西野 雄一郎



山内 慎也



室 雅子



田中 滉至



## 教科開発学セミナーⅡ

2025年2月15日（土）

ハイフレックスで開催

於：静岡大学 教育学部G棟 G104室、G204室

オンライン（Zoom）

Annual Report 2024

### 連絡協議会副議長挨拶



### 連絡協議会議長講評



## 教科開発学セミナーⅠ

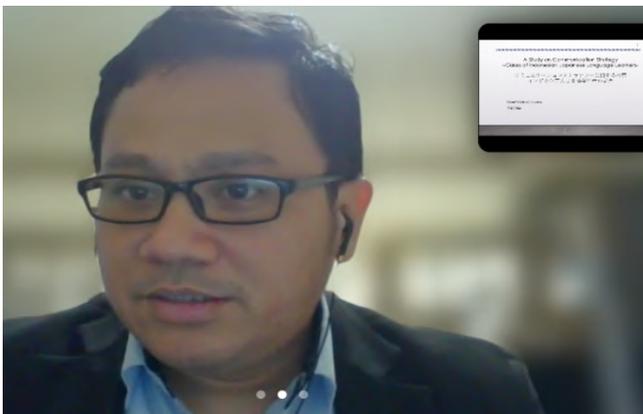
2025年2月16日（日）

ハイフレックスで開催

於：静岡大学 教育学部G棟 G104室

オンライン（Zoom）

Annual Report 2024



## CONTENTS

---

### 目次



巻頭言	
I. 共同教科開発学専攻の概要	1
II. 共同教科開発学専攻連絡協議会議長年次報告	25
III. 学生の研究題目と指導体制	39
IV. 学生の研究計画と研究活動	47
V. 修了生一覧と令和6年度修了生論文要旨	75
VI. 教科開発学研究会	101
VII. 教員の教育・研究活動	105
VIII. 諸資料	141



## 巻 頭 言



研究することに自由を感じているか。

共同教科開発学専攻

副議長 紅林秀治

大学生に OB や OG の人たちが、よくこう話します。「自由でいられるのは、今だけだぞ。就職して仕事を持つと、自由なんてないぞ。」とか「勤めに行くために出かけるのも、職場で働くのも、食っていくためにやむをえずそうしているんだ。仕事をしている間は自由なんてないぞ。」などと。つまり、仕事に行かず、行きたいところに行き、寝たいときに寝て、起きたいときに起きる・・・これが OB や OG たちが大学生に伝えたい自由ということでしょうか。自由という言葉はどう定義するかによって、その捉え方は違うと思いますが、勝手気ままに生きることが自由でしょうか。いや、一所懸命努力する中にも自由はあります。

90 年くらい前の日本が戦時下にあった時代、国のやり方に反対するビラを配ったり、資本家のやり方に反対してストライキを先導したりする指導者は、特高警察から厳しく取り締まりを受けました。そのような中でも、彼らはビラを印刷したり、集会を行ったりするなどの活動を続けていました。誰かに強制されたり、頼まれたりするわけでもありません。その活動を通じて自分自身に大変な危害が加わることがわかっているにもかかわらず、なぜ、当時の指導者たちは、そのような活動を続けられたのでしょうか。高橋庄治氏は、彼らがそこに自由を感じているからだとして述べていました。(ものの見方考え方 文理書院 (1975)) つまり、自分が正しいと思ったことや自分がこうしたいと感じていることを、思いのままに精一杯やることに、誰からも支配されない心の開放感を感じたのだと思います。そこに充実感とか達成感といった感情が生まれたのだと思います。人はそこに自由 (心の自由とか精神的な自由とか言い方は様々ある) を感じるのだと思います。自由を感じることは、人間の喜びかもしれません。だから、苦しい環境の下でも一途になって続けることができるのだと思います。

みなさんが取り組んでいる研究ではどうでしょうか？誰かに言われて仕方無くやっている、または付度をして取り組んでいるというようでは、自由を感じることはないでしょう。しかし、自分の意思で「ここを明らかにしたい」「ここをもう一度練り直したい」と思いながら取り組んでいるならば、自由を感じているのではないのでしょうか。この自由は、努力して、がんばった人にしかわからないことだと思います。その意味では、勝手気ままに生きる自由とは違うと思います。

研究を続けることは、思い通りにいかず、苦勞することも多いと思います。そんな中でも時が経つのを忘れて、ご飯を食べるのも忘れてするくらい夢中になることができたな

ら、それは、自由を感じながら取り組んでいることかもしれません。是非、研究することに自由を感じてください。

# I . 共同教科開発学専攻の概要

## 1. 専攻の趣旨・目的

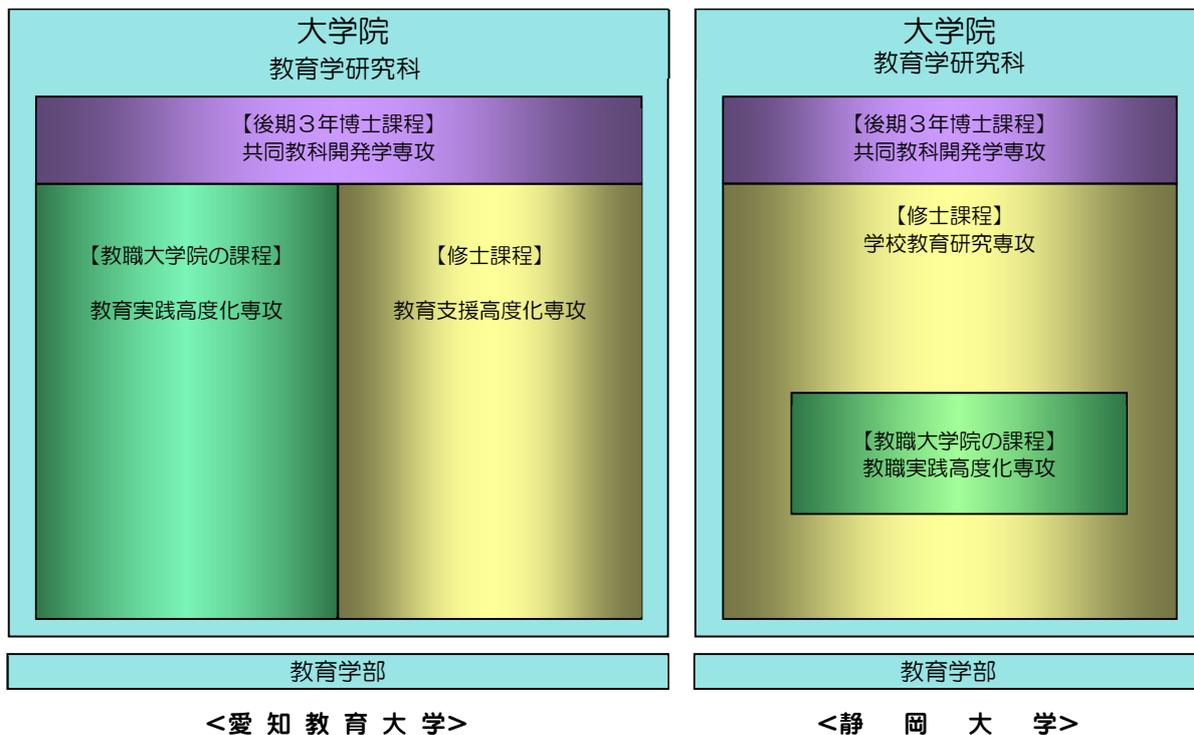
共同教科開発学専攻（以下「本共同専攻」という。）は、共同教育課程制度を活用し、愛知教育大学と静岡大学の教育学研究科に設置された、後期3年のみの博士課程です。

本共同専攻の設置は、教育を取り巻く社会状況や学校教育が抱える課題が複雑化し、学校教育現場の教員に高い資質能力が求められていく一方で、教員養成カリキュラムの目的性や科目の体系的な欠如等の課題が浮き彫りになってきていること、それに加え、中央教育審議会においても、教員の資質能力の向上のための教員養成システムにおける修士レベル化が検討されることとなり、これらに対応するための体系的な教員養成カリキュラムの編成及び専門科目の体系化、また、それを可能とする大学教員の養成が喫緊の課題となっていること、などが背景となっています。これらの課題に応えるため、愛知教育大学及び静岡大学教育学部は、国立の教員養成系大学学部としてこれまで取り組んできた実績を活かし、大学教員養成のための博士課程を設置しました。

専攻名称ともなっている「教科開発学」は、教科専門・教科教育・教職専門の枠を越えて、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行していくため、教科専門と教科教育を融合・発展させた「教科学」と、教職専門を発展させた「教育環境学」とをあわせて体系化することを目指す新たな学問領域です。

本共同専攻は、「教科開発学」の究明を通じて、教科内容の構成原理等を明らかにしながら「教科学」と「教育環境学」の融合・体系化に熱意を持って取り組む大学教員を養成していくこと、また、「教科開発学」を専門とする大学教員を養成し、その教員が「教科開発学」に関する教育研究に基づいた教員養成カリキュラムを編成して学部、あるいは修士課程等で指導を行うことによって、優れた学校教育現場の教員を輩出するという教員養成系大学・学部ならではのサイクルを確立することを目指しています。

### 共同教科開発学専攻が置かれる環境



## 2. 専攻の内容・特色

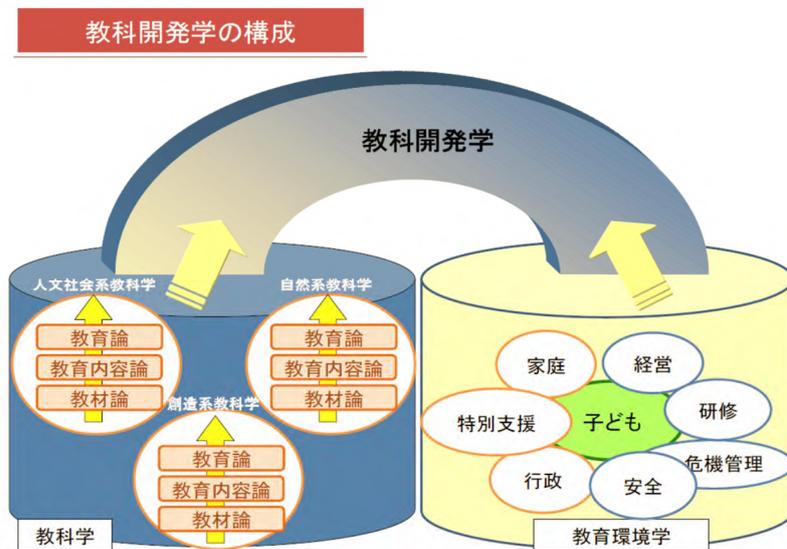
「教科開発学」は、教科専門・教科教育・教職専門の専門性の枠を越えて、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行していくものです。「教科開発学」は、主に、教育環境に適した教育内容構成の研究（教科学）、教科内容として構成されたものを実践するための教育環境の研究（教育環境学）から構成されます。教科専門と教科教育を融合・発展させた「教科学」と、教職専門を発展させた「教育環境学」が「教科開発学」を構成します。そして、本共同専攻は、「教科学」あるいは「教育環境学」のいずれかを基軸としつつ、もう一方の学問分野の研究を進めていくというところに特色があります。

専攻の分野として「教育環境学」、「教科学」（人文社会系教科学、自然系教科学、創造系教科学）という4つの分野を設置しています。

教科学研究のアプローチとして、教育論・教育内容論・教材論という3つの基本軸からのアプローチを行うことも本共同専攻のもう一つの特徴です。「教育論」は、児童生徒の発達のために、どのような教育目標のもとに、どのような内容をどのように教え（教師）・どのように学ぶか（学習者）を論じるもので、従来の「教科教育科目」で検討してきた目標論、指導論、学習過程論をも含みます。「教育内容論」は、それぞれの学術（学問・芸術）分野を基盤として持ちながら、その全体像から個々の学問分野の必須部分を抽出し、個々の専門分野がどのように関連しながら「教科」の内容がいかなるものから構成されているかを追究するものです。「教材論」は、教科が、それぞれの学術（学問・芸術）分野を基盤としながら構成されている教材の在り方を論究し、教材の開発をすることにより教科内容の構成あるいは教材配列等を実践的に考察・検証するものです。これらの3つのアプローチにより、3つの系を超えて教育論・教育内容論・教材論を集約し、教科内容構成を追究していきます。

教育関係等の仕事に従事しながら、入学して修学することができるよう、授業は、原則的に土曜日及び日曜日に実施し、夏季や冬季における集中講義も導入するなどして、時間割や学修プログラムを作成している点も本共同専攻の特色です。

(専攻名)		(分野)
共同教科開発学専攻	—	教育環境学 人文社会系教科学 自然系教科学 創造系教科学



### 教育環境学分野

子どもたちが主体的に働きかけ、働きかけられる自然・社会・文化・日常生活等のあらゆる過程を子どもの発達の視座から教育環境を捉える学問。確かな学力・豊かな心・健やかな体の調和を重視して「生きる力」を育む場合、家庭、学校、地域、社会といった学校を取り巻く環境との関連を常に視野に入れておくことが重要です。「教育環境学」においては、従来の教職専門領域で扱ってきた内容を発展させ、子ども、学校、地域、社会を含めた幅広い学校教育を取り巻く多様な環境領域を体系的に研究し、教科の土台や基盤を追究します。

### 教科学分野

従来の教員養成カリキュラムでは、「教科」の学問的内容を「教科専門」、「教科」の指導法を「教科教育」として編成されていますが、両者の体系化はまだ進んでいません。そのため、教員養成における「教科」の研究を本格的に確立するために「教科学」を創設します。「教科学」は、従来の教科専門と教科教育を融合し、教科がどのような構成原理で成り立っているのか等を中心に教科内容の構成原理を探求するものです。教科を「人文社会系」、「自然系」、「創造系」という3つの分野に分類し、教科における学習内容の構成がいかなる原理からなっているか、その編成の仕方はどうあるべきか等を探究します。以下、3つの分野について紹介します。

#### ① 人文社会系教科学分野

地域社会における言語、文学、歴史、文化、自然にかかわる人文社会的な課題に対して、自らが実際にかかわることにより主体的に考察を進め、地域に密着した教育方法や教材を作り上げていく必要があります。この分野では、誰かが集めた史資料（二次史資料）や既存の結論で考察を進めるのではなく、史資料読解やフィールドワーク（参加、体験、観察、インタビュー、収集など）により自らが積極的に対象にかかわることによって得られた一次史資料や知見によって地域研究を進め、その研究成果をもとにした教科開発をめざします。具体的には、言語学、歴史学、地理学、民俗学の立場からアプローチして、それらの研究領域から得られた高度な地域研究の成果をふまえた教育論、教育内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。

#### ② 自然系教科学分野

社会が複雑化し、自然環境が変化し、従来の価値観が変わる中で、科学的リテラシー、数学的リテラシー（科学的、数学的に思考するための基本となる能力）の育成が求められています。観察、仮説の立案（モデルの構築）、検証（論理的説明、実証）などの活動を通して自然系教科における教育論、教科内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。具体的には、（ア）地球環境という視点からみた新たな理数教育カリキュラムや日常生活及び先端科学技術とリンクした理数教育カリキュラムの構築、（イ）最先端の研究成果から様々なトピックの提案を「教科学」の立場から行い、情報教育・情報科学の知識を活用して、教材化及び必要なデジタルコンテンツ化を図る、（ウ）電子黒板やPDA端末などのICT環境が整備された教室における教育内容・教育方法のあり方、あるいは学習集団の特性・行動パターンを反映しうる動的な教材を開発します。

#### ③ 創造系教科学分野

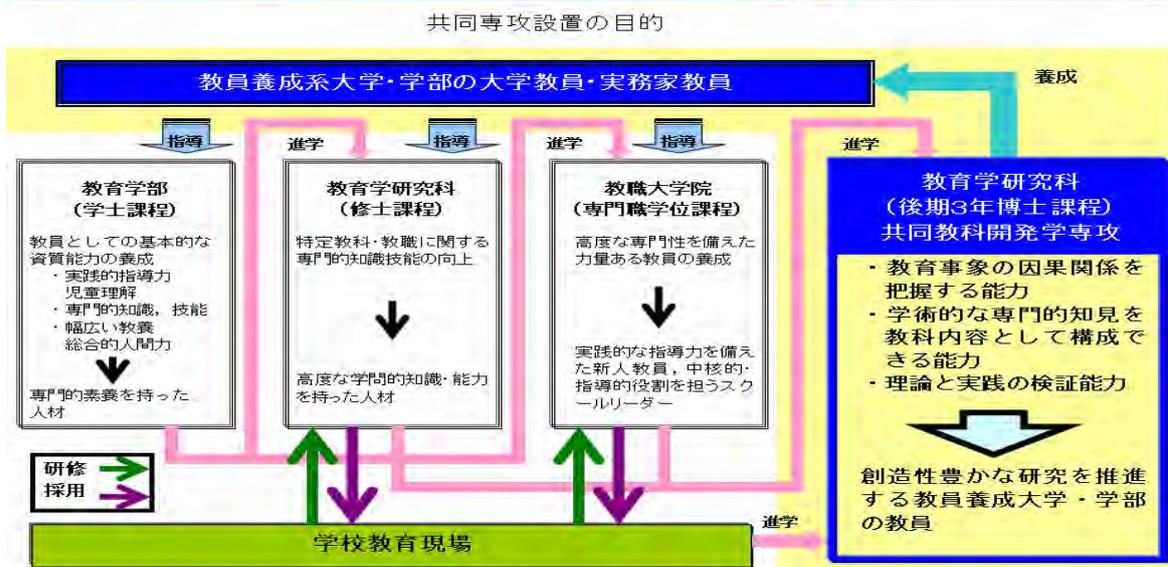
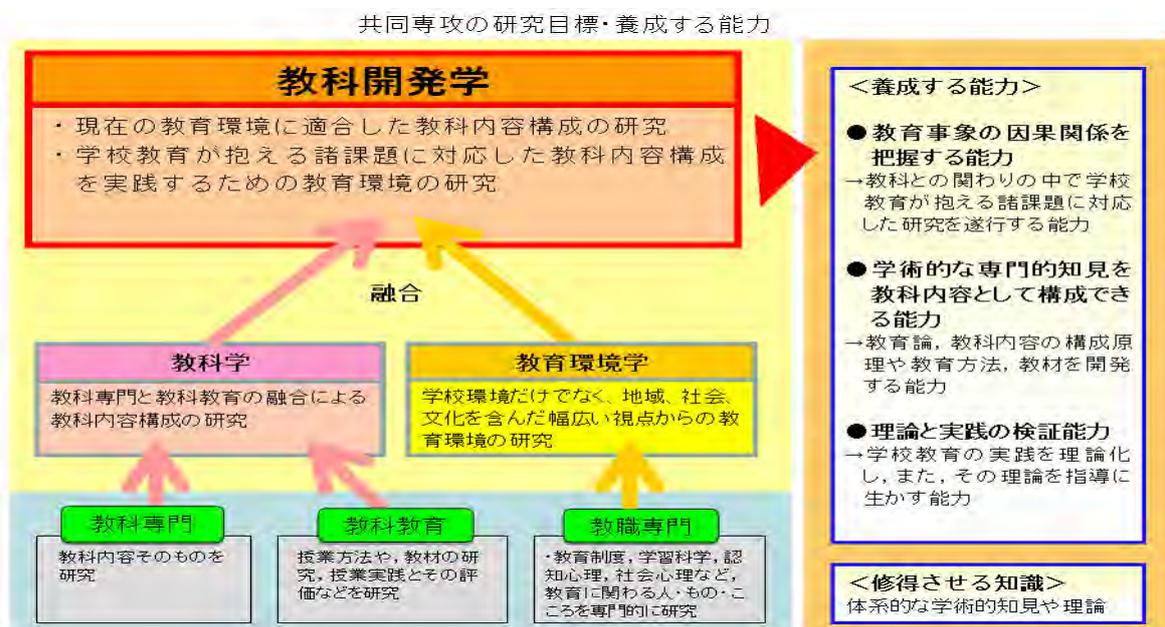
音楽科・美術科・体育科・家庭科・技術科等では、子どもたちの潜在的能力や感性を引き出し、これらを育てる活動を支援する方法を組織的・系統的に開発していく必要があります。この分野において「生きていく上で基礎となる幅広い生活力や、健康あるいは体力を備え、豊かな表現力を発揮できる人間の育成」を目指し、「生活力」、「身体力」、「表現力」を中心とした教育論、教科内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。具体的には「生活力」の周辺領域として、異世代との共感力、自らの生活課題の発見、生活課題を解決する知識・技術、ものづくり教材開発、ものづくり教材の授業実践等があります。「身体力」の周辺領域として、保健情報の収集と分析、体育教師教育論、運動学習、運動に対する動機づけ等があります。「表現力」の周辺領域として、観賞とリテラシー、思考プロセスと表現技法、音楽と身体の動き、発想支援等があります。

### 3. 養成する人材像

本共同専攻は、「教科開発学」による教育研究を通して、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行する能力（「教育事象の因果関係を把握する能力」）や、教育論、教科内容の構成原理や教育方法の研究、教材を開発する能力（「学術的な専門的知見を教科内容として構成できる能力」）といった学術的な専門的知見を教科内容として構成できる力を養成します。

本共同専攻の入学者は、修士課程修了者、教職大学院修了者、教育現場を熟知した現職教員などを想定していますが、これらの多様な経験を持つ学生が交流することにより、学校教育の実践を理論化し、また、その理論を指導に活かす能力（「理論と実践の検証能力」）を身につけることもねらいとしています。

このような能力を身につけることによって、今日の学校教育が抱える諸課題に対応可能な現場教員を育てる教員養成系大学・学部<sup>1</sup>の教員として、広く教育界に貢献する大学教員を養成します。



#### 4. 修了要件・学位

##### < 修了の要件 >

標準修業年限は3年ですが、特に優れた研究業績をあげた者にあつては修了年限の短縮も可能です。修了に必要な取得単位数は20単位以上とし、基礎科目は6単位以上、分野科目は10単位以上、応用科目は4単位以上です。なお、分野科目は選択科目から10単位以上を取得する必要がありますが、「教育環境学」の分野科目のうちから2単位及び教育環境学分野以外の3分野の選択科目のうちから2単位の計4単位は必ず履修します。

本共同専攻は、必要な研究指導を受けた上に、学位論文の審査及び論文の内容や専門分野に関する口述ないし筆記試験等に合格することを修了要件として課します。なお、学位論文の提出要件は、本共同専攻内の申し合わせに基づくものとします。

単位履修表

科目 専攻	基礎科目		分野科目				応用 科目	合計
			教育環境学 分 野	人文社会系 教科学分野	自 然 系 教科学分野	創 造 系 教科学分野		
	必修	選択	選択	選択	選択	選択	必修	
共同教科 開発学専攻	3	3	10				4	20
合計	6		10				4	20

##### < 学位論文と学位の授与 >

学位論文は、本共同専攻の目標とするところに従い、「教科開発学」を主領域として「教育環境学」及び「教科学」にかかわる実証的な内容とするものとなります。

本共同専攻の課程を修了した者に対しては、愛知教育大学及び静岡大学から博士の学位を授与します。学位記には愛知教育大学及び静岡大学の大学名が記載されます。

博士の学位を授与するにあたって付記する専攻分野の名称は、「博士（教育学）」とします。

なお、学位を授与された方が、学位の名称を用いるときは、両大学名を付記するものとします。

「博士（教育学、愛知教育大学及び静岡大学）」

#### 5. 研究指導体制

本共同専攻における教育は、授業科目の履修と学位論文の作成に関する指導によって行います。学生の希望等を踏まえて決定した本籍を置く大学の研究指導教員を主指導教員とし、主指導教員は学位論文の指導のみならず、履修指導も行います。本共同専攻では、主指導教員の他に、両方の大学から少なくとも1名以上の副指導教員を配置し、3名以上の教員で指導します。このように共同大学院の特色を活かした指導体制を整え、様々な研究分野を包含する指導体制の充実を図ります。

本共同専攻の学生は、主指導教員の指導の下に科目の履修方針を決めます。講義は、履修登録に沿って履修します。

講義や研究指導に関して、遠隔教育システムを取り入れて、教員及び学生の大学間の移動に配慮しています。

セミナー方式で開催する演習等においては、両大学で毎年交互に行います。

## 6. カリキュラム

本共同専攻の教育課程は、博士後期課程が担う科目群として「教科開発学」に関する「基礎科目」、各分野の専門的な「分野科目」、各分野の総合的な「応用科目」の3つの科目で構成されています。

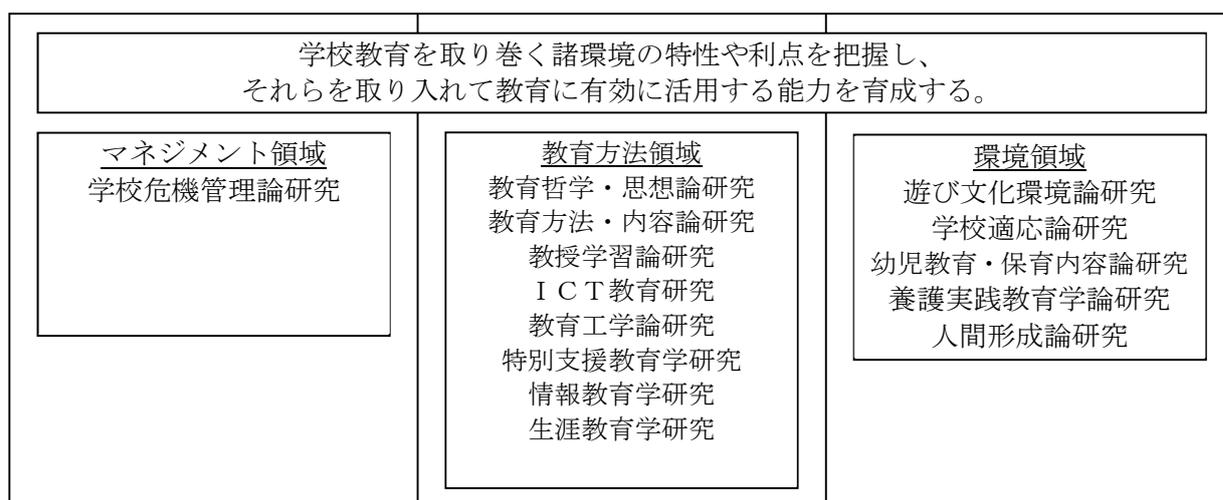
### 【基礎科目】

基礎科目の「教科開発学原論（2単位）」では、「教科開発学」の原理的諸課題や「教科開発学」の研究方法论を習得し、「教科開発学実践論（1単位）」では、大学教員としての教育実践力、教員FD等、実践的諸課題を探究します。これら2科目は、必修です。その他も含めて基礎科目群からは、必修科目の2科目3単位のほかに、選択科目のうちから3単位、計6単位以上を選定して履修します。

### 【分野科目】

分野科目は、「教育環境学」と「教科学」の先進的かつ多様な知見を習得するとともに各教員の研究活動に基づく最先端の科目を「教科開発学」の分野科目として開講します。

教育環境学分野ではマネジメント領域、教育方法領域、環境領域から科目を構成し、学校を取り巻く諸環境や利点を把握し、これらの知見を教科の開発研究に活用することを追究します。



教育環境学分野における分野科目

「教科学」は、「人文社会系」、「自然系」、「創造系」という三つの分野に分類し、「教育論」、「教育内容論」、「教材論」の三つの基本軸から科目を構成します。「教科学」では、教科内容を構成する学問の構築をめざし、教科のあり方・枠組そのものを検討し、人文社会系教科学、自然系教科学、創造系教科学の各分野の先端的な知識を修得します。

人文社会系教科学分野では、言語・多文化領域、歴史領域、風土領域から科目を構成し、教育方法・教材開発を行います。

言語に関する「教科学」の開発 地理学・民俗学・歴史学における教育方法・教材開発		
<u>言語・多文化領域</u> 第二言語教育論研究 国語科教育教材論研究 生活科教育内容論研究 国語教育論研究 文学教材論研究	<u>歴史領域</u> (令和6年度開設なし)	<u>風土領域</u> 社会科教育論研究 地理学教材論研究

人文社会系教科学分野における分野科目

自然系教科学では、先端科学と教科内容領域、教材開発と学習支援領域、教育方法の開発領域から科目を構成し、先端科学技術と関連した自然系教科のカリキュラムを構築し、教育の情報化に対応した教育方法・教材開発を行います。

先端科学技術とリンクした理科教育カリキュラムの構築 教育の情報化に対応した教育方法・教材開発		
<u>先端科学と教育内容領域</u> 物理教育内容論研究 生物教育内容論研究	<u>教材開発と学習支援領域</u> 数学教材論研究 物理教材論研究 理科教材開発論研究	<u>教育方法の開発領域</u> 数学教育内容論研究 理科教育論研究

自然系教科学分野における分野科目

創造系教科学分野では、生活力領域、身体力領域、表現力領域から科目を構成し、基礎的な生活力や健康・体力を備え、豊かな表現力を発揮できるような教育方法・教材開発を行います。

基本的な生活力や健康・体力を備え、豊かな表現力を発揮できる 人間の育成をめざす教科学を構想できる力量の形成		
<u>生活力領域</u> 技術教育内容論研究 家庭科教材論研究 技術教育教材論研究	<u>身体力領域</u> 保健科教育論研究 保健体育内容論研究 体育教材開発論研究 球技教材開発論研究 体育・課外活動教材論研究	<u>表現力領域</u> 日本伝統音楽実践研究

創造系教科学分野における分野科目

なお、分野科目は選択科目から10単位以上を取得する必要があるが、「教育環境学」の分野科目のうちから2単位及び教育環境学分野以外の3分野の選択科目のうちから2単位の計4単位は必ず履修します。

## 【応用科目】

応用科目では、全教員と全学生が一堂に会し、(1) 教員がそれぞれの研究課題を提示し、学生と討議し、(2) 学生自身が、「教科開発学とは何か」、「その研究方法論と課題」について問いながら自己の研究課題を追究し、その成果をまとめて発表します。「教科開発学セミナーⅠ（2単位）」と「教科開発学セミナーⅡ（2単位）」は、必修です。応用科目群では、必修科目の2科目4単位以上を選定して履修します。

開設授業科目・担当教員及び講義開講場所等（2024年度）

科目区分		授業科目	単位数	担当教員	愛知教育大学 キャンパス (刈谷市)	静岡大学 キャンパス (静岡市)
専攻基礎科目	必修科目	教科開発学原論	2	野平 慎二 梅田 恭子 石川 恭 田口 達也 香野 毅 丹沢 哲郎 中村 ともえ 小林 敬一	○	○
		教科開発学実践論	1	寺本 圭輔 野崎 浩成 竹川 慎哉 縄田 亮太 杉山 康司 紅林 秀治 鎌塚 優子 村上 陽子 松永 泰弘 大瀧 綾乃	○	○
	選択科目	文化資源活用論	1	丹藤 博文 近藤 裕幸	○	
		科学技術活用論	1	飯島 康之 小谷 健司 大鹿 聖公 宮川 貴彦	○	
		教育評価実証方法論	1	石田 靖彦 鈴木 裕子 山田 浩平	○	
		教育プログラム開発論	1	塩田 真吾 中村 美智太郎		○
		表現・鑑賞論	1	長谷川 慎 坂口 京子		○
		教育フィールド調査論	1	村越 真 郡司 賀透		○
		教育プレゼンテーション論	1	白畑 知彦 小南 陽亮 (渋江かさね)		○

専攻分野科目	教育環境学分野	遊び文化環境論研究	2	石川 恭	○	
		学校適応論研究	2	石田 靖彦	○	
		教育哲学・思想論研究	2	野平 慎二	○	
		教育方法・内容論研究	2	竹川 慎哉	○	
		教授学習論研究	2	野崎 浩成	○	
		幼児教育・保育内容論研究	2	鈴木 裕子	○	
		I C T教育研究	2	梅田 恭子	○	
		学校危機管理論研究	2	村越 真		○
		教育工学論研究	2	村山 功		○
		養護実践教育学論研究	2	鎌塚 優子		○
		特別支援教育学研究	2	香野 毅		○
		情報教育学研究	2	塩田 真吾		○
		人間形成論研究	2	中村 美智太郎		○
		生涯教育学研究	2	渋谷 かさね		○
	人文社会系教科学分野	第二言語教育論研究	2	田口 達也	○	
		社会科教育論研究	2	近藤 裕幸	○	
		地理学教材論研究	2	伊藤 貴啓	開講なし	
		国語科教育教材論研究	2	丹藤 博文	○	
		生活科教育内容論研究	2	中野 真志	○	
		国語教育論研究	2	坂口 京子		○
		文学教材論研究	2	中村 ともえ		○
	自然系教科学分野	数学教材論研究	2	飯島 康之	○	
		物理教材論研究	2	岩山 勉	○	
		数学教育内容論研究	2	小谷 健司	○	
		理科教材開発論研究	2	大鹿 聖公	○	
		物理教育内容論研究	2	宮川 貴彦	○	
		生物教育内容論研究	2	小南 陽亮		○
		理科教育論研究	2	郡司 賀透		○
	創造系教科学分野	保健科教育論研究	2	山田 浩平	○	
		保健体育内容論研究	2	寺本 圭輔	○	
		体育教材開発論研究	2	鈴木 英樹	○	
		球技教材開発論研究	2	縄田 亮太	○	
		技術教育内容論研究	2	松永 泰弘		○
		技術教育教材論研究	2	紅林 秀治		○
		体育・課外活動教材論研究	2	杉山 康司		○
		家庭科教材論研究	2	村上 陽子		○
日本伝統音楽実践研究		2	長谷川 慎		○	

専攻応用科目	必修	教科開発学セミナーⅠ	2	全教員	○	○
		教科開発学セミナーⅡ	2	全教員	○	○
	選択	教科開発学セミナーⅢ	2	全教員	○	○

## 7. 教員一覧

( 愛知教育大学 )

分野	氏名	職名・学位	現在の主たる研究テーマ
教育環境学	石川 恭	教授 博士 (教育学)	遊び文化論 余暇教育論 遊び環境論 子どもと遊び論
	野平 慎二	教授 博士 (教育学)	教育哲学 教育思想史 物語論的人間形成論
	石田 靖彦	教授 博士 (心理学)	教育・社会心理学 学校・学級への適応過程 関係の親密化 自己評価維持機制
	竹川 慎哉	准教授 博士 (教育学)	教育方法学 教育課程論 批判的リテラシー教育 授業研究
	鈴木 裕子	特別教授 博士 (学校教育学)	身体教育学 子ども学
	野崎 浩成	教授 博士 (工学)	情報教育 日本語教育 認知科学
	梅田 恭子	教授 博士 (学術)	情報教育 教育工学 I C T活用

人文社会系教科学	伊藤 貴啓	理事 博士（理学）	地理学教材論 農業地理論 経済地理論 地誌論 教師の力量形成と地域教材開発 農業地域の自立的発展とその条件 ヨーロッパ 国境地帯の空間動態 ヨーロッパ におけるルーラルリズムと農村の持続的発展
	中野 真志	特別教授 博士（文学）	生活科教育論 総合的な学習の理論と実践 社会科教育論 カリキュラム論 教育方法論 ジョン・デューイの教育論
	丹藤 博文	特別教授 博士（教育学）	言語教育方法論 文芸批評理論 文学教育論 文学教材研究論 国語科授業方法論 物語理論研究
	田口 達也	教授 PhD in English	第二言語教育論研究 応用言語学 言語教育心理学
	近藤 裕幸	教授 博士（学術）	社会科教育論研究 社会科教育 地理教育

自然系教科学	岩山 勉	理事 博士（理学）	理科教材開発論 理科（物理）教育論 理科におけるものづくり教育 先端科学技術の活用と還元 自然エネルギー利用技術 半導体光物性 ビーム（イオン、レーザー）物性
	飯島 康之	特別教授 教育学修士	数学教育論 教材開発論 学習環境開発論 コンテンツ開発論 授業研究 図形指導 数学的問題解決
	小谷 健司	教授 博士（理学）	数学教育内容論研究 数学教材開発
	大鹿 聖公	教授 博士（学術）	理科教材開発論研究 理科教材開発 環境教育・ESD/SDGs 理科カリキュラム
	宮川 貴彦	教授 博士（理学）	物理教育内容論研究 原子・分子・量子エレクトロニクス 物理教育
創造系教科学	寺本 圭輔	教授 博士（人間環境学）	運動生理学 身体組成 発育発達 水泳
	山田 浩平	准教授 博士（スポーツ健康科学）	保健科教育論研究 健康教育学 学校保健学 学校安全
	鈴木 英樹	特別教授 博士（スポーツ科学）	体育教材開発論研究 身体科学 体育科内容学
	縄田 亮太	准教授 博士（体育学）	球技教材開発論研究 スポーツバイオメカニクス コーチング学 バレーボール

( 静岡大学 )

分野	氏名	職名・学位	現在の主たる研究テーマ
教育環境学	村越 真	教授 博士 (心理学)	学校の危機管理 空間認知と地図理解の認知過程 自然体験活動のリスクマネジメント リスク認知 安全教育
	村山 功	教授 教育学修士	認知心理学 理科教育 情報教育 I C T 校内研修 授業研究
	鎌塚 優子	教授 博士 (教育学)	養護教諭の実践に関わる教育 健康相談論 学校保健学 特別な教育的支援を要する子どもの健康教育 養護教諭養成教育
	香野 毅	教授 博士 (心理学)	特別支援教育 からだを窓口とした援助 障害領域における心理支援 動作法 子育て支援
	小林 敬一	教授 博士 (教育心理)	教育心理学 (教授学習) 社会心理学 授業分析 談話・会話分析
	塩田 真吾	准教授 博士 (学術)	情報教育 I C T キャリア教育遠隔教育
	中村 美智太郎	准教授 博士 (学術)	教育哲学 教育思想 道徳教育 情報倫理 キャリア教育
	渋江 かさね	准教授 博士 (学術)	成人教育 社会教育 生涯学習 教師教育

人文社会系教科学	坂口 京子	教授 博士（教育学）	国語・国語科（言語教育）カリキュラム論 国語科目的・目標論 国語科授業研究 国語科教材開発論 国語科教師教育 戦後国語教育史
	中村 ともえ	准教授 博士（文学）	日本近現代文学 小説と演劇・映画、美術の関係 古典文学の翻訳・翻案 文学教材の開発
	大瀧 綾乃	講師 博士（教育学）	英語教育学 第二言語習得
自然系教科学	丹沢 哲郎	教授 博士（教育学）	理科教育課程論 アメリカ理科教育史 理科指導論 科学的リテラシー論 STS教育 理科目的論・目標論 高校生物教育論 理科教師教育
	小南 陽亮	教授 理学博士	生物多様性教育のための教材開発 生態系教育内容論 生態系における生物種間相互作用 里山における生物多様性の保全 生物の共存メカニズム 生物群集の動態 絶滅危惧種の保全 植物の繁殖戦略
	郡司 賀透	准教授 博士（教育学）	理科カリキュラム論 理科カリキュラム史研究 理科教材論 理科教育内容選択論 理科授業研究

創造系 教科学	松永 泰弘	教授 博士 (工学)	熱弾性論 材料強度学 機能性材料応用開発 ものづくり教材開発 ものづくり教材の授業実践 動くおもちゃのデザインとメカニズム 地域におけるものづくり交流 ものづくり教室の評価基準
	紅林 秀治	教授 博士 (学校教育学)	技術教育論 技術教育教材開発 設計を主体とした技術教育 システム概念の形成過程
	杉山 康司	教授 博士 (スポーツ健康科学)	身体運動学 体力科学 体育・スポーツ科学 発育発達の科学 加齢と健康科学 スポーツ指導論
	村上 陽子	教授 博士 (学術)	食文化 食品・料理色彩学 食品物性学 調理学 家庭科におけるものづくり教育 教科連携
	長谷川 慎	教授 修士 (音楽)	音楽教育学 日本音楽 地歌箏曲演奏

## 8. 教育方法

### 1 教育・研究指導

大学院の教育は、専攻に応じて教育上必要なものとして開設する授業科目の履修及び博士論文の作成等に対する指導によって行われます。

#### (1) 主指導教員

学位論文及び修学その他学生生活上の指導・助言を行うため、専攻に属する専任教員（大学院設置基準第9条に定める教員）のうちから主指導教員を定めます。主指導教員は、入学試験の出願に際して出された第1希望又は第2希望の教員であり、合格発表の際に通知された教員です。

#### (2) 副指導教員等の届

主指導教員とは別に、専攻に属する専任教員の中から、2名以上の副指導教員と、研究上の必要性に応じて指導補佐教員を定め、研究指導を受けます。副指導教員については、各大学から1名以上を選ぶものとします。学生は、原則として、授業開始日（合同ガイダンス実施日）から10日以内に、主指導教員の助言を得て副指導教員及び指導補佐教員を選び、所定の様式による「副指導教員等申請書」により、研究科長あてに提出しなければなりません。

#### (3) 副指導教員等の決定

研究科長は、学生から提出のあった副指導教員等申請書に基づき、共同専攻連絡協議会の議を経て、それぞれの副指導教員及び指導補佐教員を決定します。

### 2 単 位

各授業科目の単位数は、授業内及び授業外を合わせて、45時間の学修をもって1単位とします。多くの授業が、1時限（1コマ）を2時間（実際は90分）として、15回（試験日を含めて16回）で2単位としているのは、1時限の教室内の授業に対して、2時限分の教室外での事前学習及び事後学習を行って2単位という意味です（8回では1単位となります）。

### 3 授 業

#### (1) 学 期（授業期間）

学期を前期（4月1日～9月30日）、後期（10月1日～翌年3月31日）の2学期に区分し、さらに、開講する授業の日程によって、前期をおおよそA期間（4月から5月）、B期間（6月から7月）、C期間（7月から8月）、後期をD期間（10月）、E期間（11月から1月）、F期間（1月から2月）に分けて授業を実施します。

●詳細については、「時間割」及び「授業カレンダー」を参照してください。

#### (2) 授業方法

授業の方法は、講義、演習のいずれかにより行います。

(3) 授業時間

授業は、原則として土曜日と日曜日の各5時限（計10時限）で実施します。

◎ 授業時間（土曜日及び日曜日）

時 限	授業開始 ・ 終了時刻
1 時 限	9 : 0 0 ~ 1 0 : 3 0
2 時 限	1 0 : 4 0 ~ 1 2 : 1 0
3 時 限	1 3 : 0 0 ~ 1 4 : 3 0
4 時 限	1 4 : 4 0 ~ 1 6 : 1 0
5 時 限	1 6 : 2 0 ~ 1 7 : 5 0

(4) 履修方法

学生は、原則として土曜日と日曜日に愛知教育大学・静岡大学の両キャンパスで開講される授業及び夏季・冬季等の長期休業期間に集中講義で開講される授業を履修します。また、これらの他に浜松等で開講される授業もあります。

#### 4 履修登録

(1) 履修手続き

学生は、主指導教員と相談の上、授業開始日（合同ガイダンス実施日）から10日以内に、その年度に履修しようとする全ての授業科目を愛知教育大学では教務企画課、静岡大学では教育学部学務係に提出します。その際、前期の履修科目については4月中に開講される科目を除き、4月末までに各事務に届け出れば変更は可能です。後期の履修科目については、9月末までに各事務に変更を届け出てください。それぞれの届け出期限以降の変更は、原則として認められません。なお、いずれの変更も主指導教員と相談の上、その許可を得て届け出をしてください。

(2) 講義室

各授業科目の講義室は、合同ガイダンスやシラバス、担当教員から履修登録者への個別連絡により指示します。

#### 5 成績及び単位について

(1) 成績の評価は、筆記試験、口頭試問、報告書等により行います。

(2) 成績評価のための条件

成績の評価には、その授業時間の3分の2以上の出席を必要とします。

### (3) 成績評価の基準

成績の評価は、その授業の構成単位をS秀・A優・B良・C可又はD不可の評語にて判定し、C可以上を合格、D不可は不合格とし、合格した単位は取り消すことができません。

#### ◎ 成績評価の基準

評語		評点	判定
S	秀	90点以上	合格
A	優	80点～89点	
B	良	70点～79点	
C	可	60点～69点	
D	不可	0～59点	不合格

ただし、以下の授業科目の単位は認定しません。

- ① 合格した授業科目を再度受講した授業科目
- ② その他、定められた履修方法以外の方法により受講した授業科目

### (4) 単位の授与

履修登録した授業科目の授業を履修し、試験その他の方法により学修の成果を評価して合格となった学生に対し、所定の単位を授与します。

### (5) 再・追試験

- 再試験は行いません。
- 追試験は、病気・災害等の特別の事情がある場合、愛知教育大学では教務企画課、静岡大学では教育学部学務係に願い出ることによって許可されることがあります。

### (6) 不正行為

- 授業及び試験等で不正と認められる行為があったときは、当該科目を不合格とします。
- 不正行為の内容によっては、所属大学の規定により、さらに厳重な措置をとります。

## 6 学位論文の提出

学位論文及び学位授与は、指導教員の指導を受けて作成し、大学院研究科の審査を受けなければなりません。その詳細については、別途、お知らせします。

## 7 長期履修学生制度について

この制度は、原則として、職業を有している方や、育児・介護等の事由により通常期間での修学が困難であると認められる方の、大学院での進学環境を改善するためのものです。現在のところ、両大学での取り扱いが異なるため、その詳細は、別途お知らせします。

## 8 修学上の注意事項

- 休学や退学の手続き等は、必要に応じて、各大学で指導を受けてください。
- 気象警報発令時・交通機関運休時・南海トラフ地震臨時情報発令時等における休講の取扱いについては、両大学で異なるので、別途お知らせします。
- 両大学で利用できる情報ネットサービスの内容については、大学ごとに、別途お知らせします。

# 愛知教育大学と静岡大学の共同教科開発学専攻連絡協議会規程

2011年12月14日  
規程第142号

(目的)

第1条 この規程は、愛知教育大学学則（2004年学則第1号）第25条第3項及び静岡大学大学院規則（昭和39年4月27日）第5条に定める共同教科開発学専攻（以下「共同専攻」という。）に係る教育，研究等に関する重要な事項を協議し，円滑な管理運営を行うため設置する共同教科開発学専攻連絡協議会（以下「連絡協議会」という。）の組織及び運営に関し，必要な事項を定める。

(連絡協議会)

第2条 連絡協議会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

- (1) 愛知教育大学及び静岡大学（以下「構成大学」という。）の共同専攻の専任教員
- (2) 構成大学の研究科長が特に必要と認めた者若干名
- 2 連絡協議会に議長を置き，連絡協議会の業務を掌理する。
- 3 議長は，連絡協議会を招集し，その議長となる。
- 4 議長の任期は，1年とし，委員の互選により選出し，構成大学間で隔年交代とする。
- 5 連絡協議会に副議長を置き，副議長は，議長を補佐し，議長に事故があるときは，その職務を代行する。
- 6 副議長の任期は，1年とし，議長が所属する大学と異なる大学の委員のうちから委員の互選により選出する。

(協議事項)

第3条 連絡協議会は，共同専攻に係る次の各号に掲げる事項を協議する。

- (1) 構成大学において開設する授業科目及びこれに係る教員の配置などカリキュラムの編成及び実施に関する基本的事項
- (2) 研究指導教員の選定に関する事項
- (3) 入学者選抜の方針及び実施計画に関する事項
- (4) 学生の身分取扱及び厚生補導に関する事項
- (5) 成績評価の方針に関する事項
- (6) 学位審査委員会の設置に関する事項
- (7) 学位の授与及び課程修了の認定に関する事項
- (8) 教育研究活動等の状況の評価に関する事項
- (9) 予算に関する事項
- (10) 広報に関する事項
- (11) 自己点検・評価に関する事項
- (12) FD推進に関する事項
- (13) 共同専攻の設置に関する協定書の改正及び廃止並びに運用に関する事項
- (14) その他構成大学が必要と認めた事項

- 2 協議内容は、構成大学の教授会若しくは研究科委員会又は教育研究評議会（以下「会議等」という。）に報告し、必要に応じて承認を得るものとする。
- 3 前項の承認を得るものについては、同項の会議等の議を経て、連絡協議会が別に定める。  
（専門委員会）

第4条 連絡協議会の円滑な運営を図るため、連絡協議会の下に次の各号に掲げる専門委員会を置く。

- (1) 運営委員会
  - (2) 学務委員会
  - (3) 入試委員会
  - (4) 学位審査委員会
  - (5) 教員人事選考委員会
  - (6) 紀要編集委員会
  - (7) その他連絡協議会が必要と認めた委員会
- 2 専門委員会に関する事項は、別に定める。

（議事及び運営）

第5条 連絡協議会は、構成委員の3分の2以上の出席をもって成立する。ただし、次の各号に掲げる者は、構成委員の総数に算入しない。

- (1) 休職又は停職中の者
  - (2) 育児休業中の者
  - (3) 30日以上にわたる連続した休暇を取得中の者
- 2 連絡協議会の議事は、出席委員の過半数の賛成をもって決し、可否同数の場合は議長が決する。ただし、連絡協議会が特に重要と認めた事項については、出席委員の3分の2以上の賛成により決する。
  - 3 連絡協議会が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。
  - 4 この規程に定めるもののほか、連絡協議会の議事及び運営について必要な事項は、連絡協議会が定める。

（事務局）

第6条 この規程に定める事務を取り扱うために事務局を置く。

- 2 事務局は、愛知教育大学事務局及び静岡大学教育学部事務部が担当する。

附 則

この規程は、2012年4月1日から施行する。

附 則（2014年規程第39号）

この規程は、2014年12月17日から施行する。

附 則（2015年規程第58号）

この規程は、2015年6月3日から施行する。



## Ⅱ. 共同教科開発学専攻連絡協議会 議長年次報告

## 教科開発学連絡協議会 議長年次報告

### 1 入学試験及び入学者について

2025年度入学試験は、2024年11月2日（土）に愛知教育大学を会場に実施されました。合格発表は11月13日（水）に行い、9名（愛教大籍5名、静大籍4名）の合格者をだすことができました。

なお、2026年度入学試験は2025年11月8日（土）、合格発表は11月17日（月）を予定しています。詳しくは、共同教科開発学専攻のウェブページをご参照下さい。

### 2 2024年度ガイダンスについて

本年度は、2024年4月7日（日）に新入生ガイダンスを開催しました。愛教大籍の新入生は愛知教育大学教育未来館講義室2A、静大籍の新入生は静岡大学教育学部G棟202室に集合し、13時から実施しました。また、14時から全学年を対象に、対面及びZoomを用いたハイブリッド方式で合同ガイダンスを実施しました。

### 3 2024年度教科開発学研究会および教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲについて

教科開発学研究会は、2024年8月24日（土）にZoomを用いて開催されました。研究発表5件、学位取得者による博士論文発表が3件行われました。

教科開発学セミナーⅠは2025年2月16日（日）に、教科開発学セミナーⅡは2025年2月15（土）に、それぞれ対面及びオンラインのハイブリッド方式で開催されました。セミナーⅠは1年生、セミナーⅡは2年生を対象とし、それぞれに各学生が研究してきた成果を報告します。1、2年生及び全教員が参加し、各報告に対して活発な議論が展開されました。

セミナーⅢは、2024年8月25日（日）に対面及びオンラインのハイブリッド方式で開催されました。これは、博士論文の概要の準備ができ、提出が目前の3年生を対象で、その報告をもとに、全教員が参加し議論や助言を行い、博士論文提出に向けた最終準備を行う場でもあります。今後、博士論文の提出を予定している学生の聴講も多数ありました。

### 4 共同教科開発学専攻連絡協議会について

基本的に、毎月1回、全教員が集まり専攻連絡協議会が開催されます。この会議は愛教大と静大の全教員による会議のため、テレビ会議システム又はZoomを使用して実施しています。この会議のために、各大学では事前に専攻会議を開催し、連絡協議会で審議する議題について、それぞれの大学の意見を集約します。

### 5 共同教科開発学専攻の指導体制について

それぞれの大学に在籍する学生に対し、主指導教員1名の他に、複数名の副指導教員、指導補佐教員が指導にあたります。そして、副指導教員の中には、必ず他方の大学の教員が少なくとも1名加わることになっています。多様な研究領域を専門とする教員が指導に加わることで、院生が近視眼的思考に陥らないように努めています。このような指導体制は本専攻の特色の一つでもあります。

### 6 2024年度学位論文最終試験について

論文審査会（最終試験）は2024年7月14日（日）と2025年1月11日（土）に、対面及びオンラインのハイブリッド方式で開催されました。計8名が臨み、発表及び口頭試問については公開で実施され、博士論文に対する忌憚のない質問に対し、明確な回答が行われました。その結果、2024年度は8名の合格が連絡協議会で認められました。その内容に関しては、「V 修了生一覧と論文要旨」に博士論文執筆談とともに掲載されていますので、ご参照下さい。

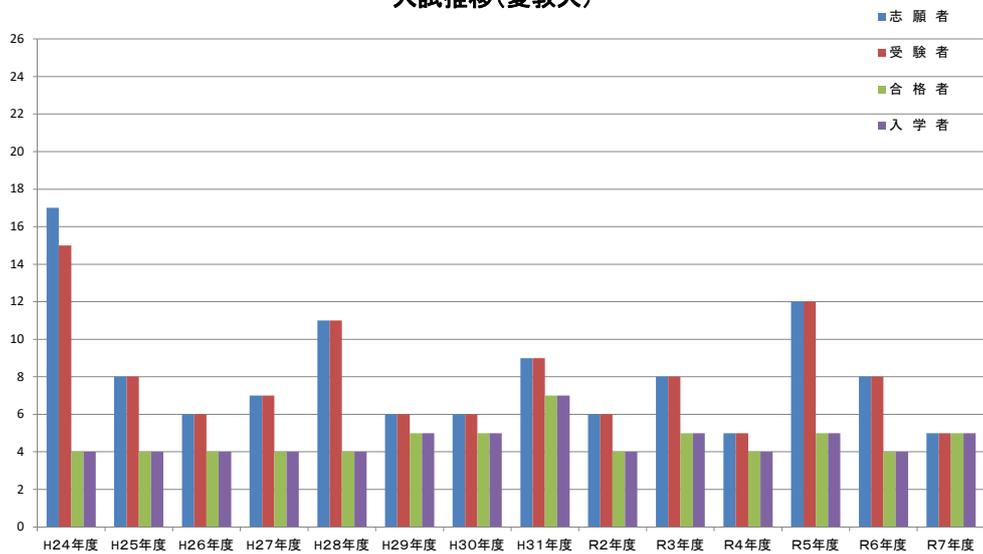
愛知教育大学大学院・静岡大学大学院 教育学研究科共同教科開発学専攻(後期3年のみの博士課程)  
入学試験実施状況

愛知教育大学															
年度	区分	定員	志願者			受験者			合格者			入学者			合格率
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
H24年度		4	8	9	17	7	8	15	1	3	4	1	3	4	26.67%
H25年度		4	4	4	8	4	4	8	1	3	4	1	3	4	50.00%
H26年度		4	3	3	6	3	3	6	3	1	4	3	1	4	66.67%
H27年度		4	3	4	7	3	4	7	1	3	4	1	3	4	57.14%
H28年度		4	5	6	11	5	6	11	3	1	4	3	1	4	36.36%
H29年度		4	3	3	6	3	3	6	3	2	5	3	2	5	83.33%
H30年度		4	5	1	6	5	1	6	5	0	5	5	0	5	83.33%
H31年度		4	5	4	9	5	4	9	4	3	7	4	3	7	77.78%
R2年度		4	6	0	6	6	0	6	4	0	4	4	0	4	66.67%
R3年度		4	4	4	8	4	4	8	2	3	5	2	3	5	62.50%
R4年度		4	2	3	5	2	3	5	2	2	4	2	2	4	80.00%
R5年度		4	8	4	12	8	4	12	3	2	5	3	2	5	41.67%
R6年度		4	5	3	8	5	3	8	3	1	4	3	1	4	50.00%
R7年度		4	2	3	5	2	3	5	2	3	5	2	3	5	100.00%

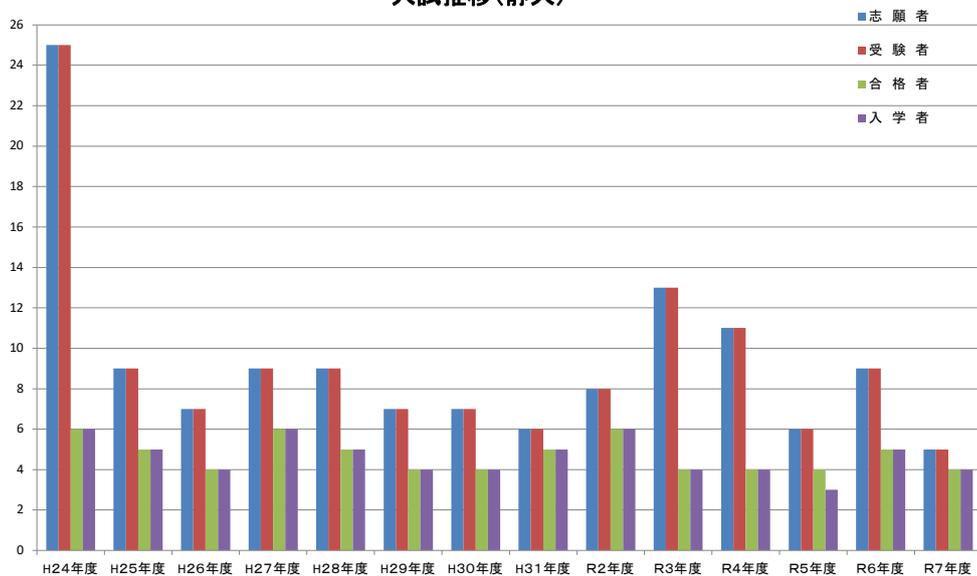
静岡大学															
年度	区分	定員	志願者			受験者			合格者			入学者			合格率
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
H24年度		4	21	4	25	21	4	25	5	1	6	5	1	6	24.00%
H25年度		4	8	1	9	8	1	9	4	1	5	4	1	5	55.56%
H26年度		4	5	2	7	5	2	7	3	1	4	3	1	4	57.14%
H27年度		4	5	4	9	5	4	9	4	2	6	4	2	6	66.67%
H28年度		4	5	4	9	5	4	9	2	3	5	2	3	5	55.56%
H29年度		4	4	3	7	4	3	7	3	1	4	3	1	4	57.14%
H30年度		4	4	3	7	4	3	7	3	1	4	3	1	4	57.14%
H31年度		4	5	1	6	5	1	6	4	1	5	4	1	5	83.33%
R2年度		4	5	3	8	5	3	8	3	3	6	3	3	6	75.00%
R3年度		4	12	1	13	12	1	13	4	0	4	4	0	4	30.77%
R4年度		4	10	1	11	10	1	11	4	0	4	4	0	4	36.36%
R5年度		4	6	0	6	6	0	6	4	0	4	3	0	3	66.67%
R6年度		4	6	3	9	6	3	9	3	2	5	3	2	5	55.56%
R7年度		4	5	0	5	5	0	5	4	0	4	4	0	4	80.00%

合計															
年度	区分	定員	志願者			受験者			合格者			入学者			合格率
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
H24年度		8	29	13	42	28	12	40	6	4	10	6	4	10	25.00%
H25年度		8	12	5	17	12	5	17	5	4	9	5	4	9	52.94%
H26年度		8	8	5	13	8	5	13	6	2	8	6	2	8	61.54%
H27年度		8	8	8	16	8	8	16	5	5	10	5	5	10	62.50%
H28年度		8	10	10	20	10	10	20	5	4	9	5	4	9	45.00%
H29年度		8	7	6	13	7	6	13	6	3	9	6	3	9	69.23%
H30年度		8	9	4	13	9	4	13	8	1	9	8	1	9	69.23%
H31年度		8	10	5	15	10	5	15	8	4	12	8	4	12	80.00%
R2年度		8	11	3	14	11	3	14	7	3	10	7	3	10	71.43%
R3年度		8	16	5	21	16	5	21	6	3	9	6	3	9	42.86%
R4年度		8	12	4	16	12	4	16	6	2	8	6	2	8	50.00%
R5年度		8	14	4	18	14	4	18	7	2	9	6	2	8	50.00%
R6年度		8	11	6	17	11	6	17	6	3	9	6	3	9	52.94%
R7年度		8	7	3	10	7	3	10	6	3	9	6	3	9	90.00%

入試推移(愛教大)



入試推移(静大)



## 教育学研究科 共同教科開発学専攻 令和6年度ガイダンス スケジュール

日時 令和6年4月7日（日）13：00～15：30

会場 〈愛知教育大学〉教育未来館2階 講義室2A

〈静岡大学〉教育学部G棟202室

〈zoom〉ミーティングID 890 7300 0831

パスコード 743909

URL <https://us06web.zoom.us/j/89073000831?pwd=37MkQul4QyKN7tsPA4UxcK9I6WruAc.1>

※両大学とも、新入生は所属大学の対面会場に集合してください。

### 第1部 新入生向けガイダンス

対象者 令和6年度新入生、教職員

時間 内容

12:30 ～ 受付開始

【配布資料】2024年度学生便覧、学生名簿、教員一覧、時間割・授業カレンダー、履修登録票  
副指導教員等申請書、愛知教育大学情報システム使用許諾書(白い封筒に入った書類一式)  
2024年度 教科開発学原論 1-8回目について、授業シラバス (PDF)  
その他各大学からの配布資料

司会 愛知教育大学 野崎 浩成

13:00 1 挨拶

2 専攻概要説明など

13:10 3 出席者自己紹介（院生、教職員）

13:20 4 履修登録、各大学での手続き等について

13:40 終了

### 第2部 合同ガイダンス

対象者 令和6年度新入生、D2年、D3年、教職員

時間 内容

13:45 ～ 受付開始

【配布資料】①学生名簿 ②教員一覧 ③時間割・授業カレンダー ④履修登録票  
⑤メーリングリストに関する案内 ⑥学位論文提出までのスケジュール  
⑦教科開発学セミナーⅠⅡⅢ及び教科開発学研究会の日程・内容について  
⑧研究計画と学位取得について ⑨2024年度 教科開発学原論 1-8回目について  
⑩ハラスメント防止、研究活動における不正行為防止について ⑪授業シラバス (PDF)

司会 愛知教育大学 野崎 浩成

14:00 1 挨拶

14:05 2 出席者院生 自己紹介

14:20 3 教員紹介および授業紹介

【説明資料】①②⑨

14:40 4 年間スケジュールについて

【説明資料】⑥⑦

14:45 5 研究計画と学位取得について

【説明資料】⑧

14:50 6 紀要（教科開発学論集）について

14:55 7 ハラスメント等防止啓発について

【説明資料】⑩

15:00 8 履修登録、各大学での手続き等

【説明資料】③④⑤

15:30 終了

令和6年度 教科開発学セミナーⅢ プログラム

1. 日 時：令和6（2024）年8月25日（日）8：50～12：00
2. 開催方法：対面及びオンラインによるハイフレックス型
3. 会 場：【静岡大学】教育学部G棟202  
           【愛知教育大学】オンライン（zoom）  
           ミーティング ID: 819 7182 9909  
           パスコード: 399811
4. 発表申込：研究発表者は、令和6年7月19日（金）17時までに、次のサイトで事前申込を行う。  
           （4月に履修登録した者も事前申込を行う。）  
           【申込サイト】 <https://forms.office.com/r/deKecvw5S5>
5. 発表時間：1人50分（発表25分、質疑25分）
6. 発表原稿：A4版6ページ以内  
           【提出先】静岡大学教育学部学務係 担当者：小澤  
           メールアドレス ozawa.masumi@shizuoka.ac.jp  
           【提出期限】令和6年8月9日（金）17：00
7. スケジュール  
       全体進行：愛知教育大学 教授 野崎 浩成

○座長（司会）

時間	題目・発表者氏名等	主指導教員	副指導教員
8：50～	開催挨拶 静岡大学 教授 紅林 秀治		
9：00～9：50	発表者1 愛知教育大学3年 大矢 知佳	寺本 圭輔	伊藤 貴啓 ○杉山 康司
10：00～10：50	発表者2 静岡大学3年 美那川 雄一	村山 功	村越 真 ○中野 真志
11：00～11：50	発表者3 静岡大学3年 室 雅子	村山 功	村越 真 ○石川 恭
11：50～	講評、終了挨拶 愛知教育大学 教授 中野 真志		

## 令和6年度 教科開発学セミナー I・II 実施要領

### 1. 教科開発学セミナー（I、II、III）の概要

本教科開発学セミナーは、院生が教科開発学とは何かを問いながら、それまでに研究してきた成果を、他の院生及び全教員の前で口頭発表する場である。他分野の教員も加わり、異なる専門性の観点から研究成果について論評する授業形態は、本専攻の特色の1つである。このセミナーでの研究発表の積み重ねが、博士論文となって実を結ぶことが期待される。

なお、セミナーIは博士論文の構想発表会、セミナーIIは博士論文の中間発表会と位置付けられている。

### 2. 日時・場所 ※対面及びオンラインによるハイブリッド型

セミナーII 令和7年2月15日（土）9時30分～16時頃（予定）

2会場に分かれて実施

会場A 愛教大：オンライン（Zoom）、静岡大：G202

会場B 愛教大：オンライン（Zoom）、静岡大：G201

セミナーI 令和7年2月16日（日）9時30分～16時頃（予定）

愛教大：オンライン（Zoom）、静岡大：G202

### 3. 発表者

セミナーI 9名（愛教大4名、静岡大5名）

セミナーII 12名（愛教大7名、静岡大5名）

※各発表の司会は、学生が籍を置かない側の大学の副指導教員が担当

### 4. 発表時間

セミナーI 30分（発表15分、質疑応答15分）

セミナーII 40分（発表20分、質疑応答20分）

### 5. 申込・発表要旨

①発表申込締切 令和7年1月10日（金）17時 ※仮タイトルをWEB申込

②発表要旨提出締切 令和7年1月31日（金）17時

提出先：愛知教育大学 教務企画課大学院係（support\_ml@m.auecc.aichi-edu.ac.jp）

書式等：A4判で4枚程度、PDFファイルで提出

## 2025年2月15日（土） 教科開発学セミナーⅡ 進行要領

〈発表人数〉 10名（愛教大籍5名、静大籍5名）  
〈発表時間〉 1人につき40分（発表20分、質疑応答20分）

### 会場 A

〈会場〉 ・愛知教育大学 オンライン（Zoom）  
・静岡大学 教育G棟104

#### ■Zoom

ミーティングID：853 8177      パスコード：830566

<https://us06web.zoom.us/j/85381775901?pwd=q6wu45mtvM8CdI5xleS6j8BaLGaj9j.1>

〈タイムテーブル〉

9:00 から入室可能

9:30 開会挨拶      連絡協議会副議長 紅林 秀治  
（「会場B」の方は、移動）

進行：石田 靖彦

9:35-10:15	発表者： <small>コウ レイジエ</small> 孔 令杰      （人文社会系教科学）      指導教員： 中野 真志 題目：日本語教育におけるChatGPTを活用した作文トレーニング 司会：紅林 秀治
10:20-11:00	発表者： <small>ナカノ ヒロユキ</small> 中野 弘幸      （創造系教科学）      指導教員： 寺本 圭輔 題目：子どもの走能力向上のためのスキップドリルの開発 司会：杉山 康司
11:05-11:45	発表者： <small>ゴトウ ユミ</small> 後藤 由美      （教育環境学）      指導教員： 野平 慎二 題目：保育施設における保育室の物的環境が1歳児に及ぼす影響に関する研究 司会：香野 毅
11:45-13:00	昼休憩
13:00-13:40	発表者： <small>ワタナベ チカ</small> 渡邊 千佳      （教育環境学）      指導教員： 村山 功 題目：校内研修におけるファシリテーターの役割 司会：鈴木 裕子
13:45-14:25	発表者： <small>インザキ ユウゾウ</small> 磯崎 雄三      （教育環境学）      指導教員： 村越 真 題目：主題図を使った地理的思考力の育成～中学校でのGISの活用～ 司会：伊藤 貴啓

14:30 講評      連絡協議会議長 中野 真志

## 会場 B

〈会場〉 ・愛知教育大学 オンライン (Zoom)  
・静岡大学 教育G棟 204

### ■Zoom

ミーティング ID : 891 2403      パスコード : 557784

<https://us06web.zoom.us/j/89124034890?pwd=Hf0Ae7RnO6UM6rW7mJEM2iLAeT3cVY.1>

〈タイムテーブル〉

※開会挨拶の際は全員「会場A」に入室

※挨拶終了後は、「会場B」へ移動

進行：郡司 賀透

9:35-10:15	発表者： <small>スズキ カズナリ</small> 鈴木 一成 (教育環境学) 指導教員： 石川 恭 題目： 「二人称的アプローチ」による体ほぐしの運動遊びの教材開発と効果に関する研究 司会： 鎌塚 優子
10:20-11:00	発表者： <small>カチ ホダカ</small> 可知 穂高 (教育環境学) 指導教員： 村山 功 題目： 進路多様校における「余暇」に着目したライフキャリア探求学習プログラムの開発と評価 司会： 石川 恭
11:05-11:45	発表者： <small>ヤマウチ シンヤ</small> 山内 慎也 (自然系教科学) 指導教員： 郡司 賀透 題目： 中学校理科の考察における科学的な表現の育成を目指す実践的研究 一相互評価活動と考察記述の定型化指導を用いた学習活動を通して— 司会： 大鹿 聖公
11:45-13:00	昼休憩
13:00-13:40	発表者： <small>イム ラニー</small> IM RANY (自然系教科学) 指導教員： 岩山 勉 題目： Advancing Chemistry Education in Cambodia: A video-based Experiment with Agar Gel 司会： 大鹿 聖公
13:45-14:25	発表者： <small>タカミヤ ケイスケ</small> 高宮 佳祐 (創造系教科学) 指導教員： 杉山 康司 題目： ウォーキングとサッカーの良さを融合した授業に関する研究 司会： 石川 恭

※終了後は「会場A」へ移動

## 2025年2月16日（日） 教科開発学セミナーⅠ 進行要領

〈発表人数〉 9名（愛教大籍4名、静大籍5名）

〈発表時間〉 1人につき30分（発表15分、質疑応答15分）

〈会場〉 ・愛知教育大学 オンライン（Zoom）

・静岡大学 教育G棟104

■Zoom

ミーティングID：817 5928 5369 パスコード：906144

<https://us06web.zoom.us/j/81759285369?pwd=foYJ1uGbHjBzOzxnivv494aXjUN9jY.1>

〈タイムテーブル〉

9:00 から入室可能

9:30 開会挨拶 野平 慎二

進行：野崎 浩成

1	9:35-10:05	発表者： カン スイ 韓 帥（人文社会系教科学）	指導教員： 中野 真志
		題 目： 中国の高校における日本語発音練習方法の比較研究	
		司 会： 郡司 賀透	
2	10:10-10:40	発表者： マエル マシルヴァ レイノックス MAEL MASILVA RAYNOX（人文社会系教科学）	指導教員： 伊藤 貴啓
		題 目： A Study on Communication Strategy -Cases of Indonesian Japanese Language Learners- コミュニケーションストラテジーに関する考察 -インドネシア人日本語学習者の場合-	
		司 会： 紅林 秀治	
3	10:45-11:15	発表者： カワムラ トシフミ 河村 敏文（創造系教科学）	指導教員： 紅林 秀治
		題 目： 技術科における材料の厚みを認識する過程に着目した思考分析	
		司 会： 飯島 康之	
4	11:20-11:50	発表者： コバヤシ 小林 みどり（教育環境学）	指導教員： 野平 慎二
		題 目： 保育者の状況的で瞬時的な判断と支援 －保育者が「モノを動かす」行為に着目して－	
		司 会： 香野 毅	
11:50-13:00 昼休憩			

5	13:00-13:30	発表者： ヤマシタ ジュンペイ 山下 純平（教育環境学）	指導教員： 石川 恭
		題 目： ハンドボールの「教材化」による現代的な教育課題を解決する小学校体育科のゴール型の学習プログラムの開発とその試行	
		司 会： 鎌塚 優子	
6	13:35-14:05	発表者： カケモト ケンタ 掛本 健太（教育環境学）	指導教員： 中村 美智太郎
		題 目： 高等学校における道徳教育の拡充に向けた公民科の授業設計に関する研究	
		司 会： 野平 慎二	
7	14:10-14:40	発表者： サカイ クニコ 酒井 都仁子（教育環境学）	指導教員： 鎌塚 優子
		題 目： 養護教諭の倫理的感性育成プログラムの開発	
		司 会： 野平 慎二	
8	14:45-15:15	発表者： ナカハラ サトル 中原 悟（教育環境学）	指導教員： 村越 真
		題 目： リスク認知能力を育む防災教育の開発と実践	
		司 会： 竹川 慎哉	
9	15:20-15:50	発表者： モチヅキ トモコ 望月 朋子（自然系教科学）	指導教員： 丹沢 哲郎
		題 目： Food Literacyの育成をめざした中学校家庭科における食生活カリキュラムの開発	
		司 会： 竹川 慎哉	

15:50 講評 連絡協議会副議長 紅林 秀治

2024年度 共同教科開発学専攻 連絡協議会等 開催日

	専攻会議（静大） 【研究科教授会後～】	専攻会議（愛教大） 【16：45～】	合同連絡会議 【16：45～】
4月	4/11(木)	4/22(月)	4/2(火)～4/4(木) 臨時メール審議 4/25(木)
5月	5/9(木)	5/23(木)	5/23(木)
6月	6/13(木)	6/27(木)	6/27(木)
7月	7/11(木)	7/22(月)	7/25(木)
8月			
9月	9/12(木)	9/24(火)	9/26(木)
10月	10/10(木)	10/24(木)	10/1(火)～10/3(木) 臨時メール審議 10/24(木)
11月	11/14(木)	11/25(月)	11/2(土) 入試日
			11/28(木)
12月	12/12(木)	12/23(月)	12/6(金)～12/9(月) 臨時メール審議 12/26(木)
1月	1/16(木)	1/23(木)	1/23(木)
2月	2/13(木)	2/20(木)	2/20(木)
3月	3/3(月)	3/19(水)	3/19(水)

2024年度愛知教育大学・静岡大学共同教科開発学専攻 各委員会委員名簿

委員会・部会名	静岡大学			愛知教育大学		
	分野	R 6	氏名	分野	R 6	氏名
運営委員会・部会	創造系教科学	○	紅林 秀治	人文社会系教科学	◎	中野 真志
	教育環境学		村山 功	教育環境学		野平 慎二
	教育環境学		村越 真	人文社会系教科学		伊藤 貴啓
	教育環境学		香野 毅	自然系教科学		岩山 勉
	自然系教科学		小南 陽亮	教育環境学		野崎 浩成
	教育環境学		鎌塚 優子	自然系教科学		小谷 健司
	自然系教科学		郡司 賀透	創造系教科学		寺本 圭輔
	創造系教科学		松永 泰弘	教育環境学		鈴木 裕子
	創造系教科学		村上 陽子	教育環境学		石川 恭
学務委員会・部会	自然系教科学	○	郡司 賀透	教育環境学	◎	野崎 浩成
	教育環境学		村越 真	自然系教科学		大鹿 聖公
	教育環境学		村山 功	教育環境学		石田 靖彦
	教育環境学		香野 毅			
	人文社会系教科学		坂口 京子			
	人文社会系教科学		中村 ともえ			
	教育環境学		小林 敬一			
入試委員会・部会	教育環境学	○	中村 美智太郎	自然系教科学	◎	小谷 健司
	創造系教科学		松永 泰弘	教育環境学		竹川 慎哉
	教育環境学		鎌塚 優子	教育環境学		梅田 恭子
	教育環境学		塩田 真吾	人文社会系教科学		田口 達也
	人文社会系教科学		大瀧 綾乃			
学位審査委員会・部会	教育環境学	○	村越 真	創造系教科学	◎	寺本 圭輔
	自然系教科学		小南 陽亮	人文社会系教科学		丹藤 博文
	自然系教科学		丹沢 哲郎	創造系教科学		鈴木 英樹
	教育環境学		鎌塚 優子			
	創造系教科学		杉山 康司			
	教育環境学		香野 毅			
紀要編集委員会・部会	創造系教科学	○	村上 陽子	教育環境学	◎	鈴木 裕子
	創造系教科学		杉山 康司	人文社会系教科学		近藤 裕幸
				創造系教科学		山田 浩平
				自然系教科学		宮川 貴彦
広報部会	自然系教科学	◎	丹沢 哲郎			
	創造系教科学		長谷川 慎			
	教育環境学		塩田 真吾			
	教育環境学		渋江 かさね			
教員人事委員会・部会	自然系教科学	○	小南 陽亮	教育環境学	◎	石川 恭
	創造系教科学		松永 泰弘	自然系教科学		飯島 康之
	教育環境学		村越 真	創造系教科学		縄田 亮太
	教育環境学		香野 毅			
	自然系教科学		丹沢 哲郎			
	自然系教科学		郡司 賀透			
	創造系教科学		村上 陽子			
	創造系教科学		紅林 秀治			
教育環境学		鎌塚 優子				

\* ◎は委員長、○は副委員長



### Ⅲ. 学生の研究題目と指導体制

平成28年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会系数科学	30640002	大西 洋	おおにし ひろし	黒川みどり	白畑 知彦	野地 恒有			旧徳川幕府から明治政府への条約改正に関する継承性—社会科教材開発における単元の核の社会的事象設定についての—考察—
創造系数科学	30640003	室 雅子	むろ まさこ	村山 功	村越 真	石川 恭			生活力育成のための家庭科のあり方
教育環境学	30640005	渡邊 千佳	わたなべ ちか	村山 功	村越 真	鈴木 裕子			「楽しい授業, わかる授業」の実現をめざす校内研修ファシリテーターの育成

平成29年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
創造系数科学	217D005	田中 滉至	たなか こうじ	飯島 康之	石川 恭	鎌塚 優子	山田 浩平		単元「健康の社会的決定要因」の開発に関する研究

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30740001	磯崎 雄三	いそざき ゆうぞう	村越 真	村山 功	伊藤 貴啓		社会科地理的分野における読図を通しての思考力育成の手立て

平成30年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	30840002	河合 紳和	かわい のぶかず	紅林 秀治	村上 陽子	伊藤 貴啓			音楽表現の補助装置としての身体運動 音楽的ニュアンスを伝達する指揮のメカニズムについて

平成31(令和元)年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	219D001	片岡 佑衣	かたおか ゆい	寺本 圭輔	石田 靖彦	杉山 康司			幼児期における調整力の発達と体力向上に向けた運動遊びプログラムの開発
自然系教科学	219D005	大久保 博和	おおくほ ひろかず	岩山 勉	大鹿 聖公	郡司 賀透			科学的思考力を高め探求活動で活用できる実験教材の開発
教育環境学	219D007	武市 裕子	たけいち ゆうこ	野平 慎二	中野 真志	村越 真			子どもの心身の変化を視覚化するアセスメントツールの開発

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	30940002	黒須 雅弘	くろす まさひろ	杉山 康司	紅林 秀治	石川 恭			学校体育の短距離走における指導方法の開発に関する研究
人文社会系教科学	30940004	島崎 治子	しまざき はるこ	村山 功	紅林 秀治	石川 恭			大学英語リーディング授業において誤解力を高める指導方法の検証

令和2年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会科学	220D001	西野 雄一郎	にしの ゆういちろう	中野 真志	野平 慎二	丹沢 哲郎			ユニウス・ラストロップ・メリアムのミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム開発に関する研究
人文社会科学	220D002	行田 臣	ゆくた じん	中野 真志	竹川 慎哉	郡司 賀透	坂口 京子		戦後新教育期における愛知県三河地域の教育 ー実験学校に着目してー
自然系教科学	220D003	胡 石帆	こ せきはん	飯島 康之	小谷 健司	紅林 秀治	野崎 浩成		小学校でのプログラミング教育におけるプログラミング的思考能力の測定と授業方法の影響

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30040002	三宅 昂子	みやけ たかこ	鎌塚 優子	村越 真	野平 慎二			養護教諭のキャリアステップ別の養護診断プロセスにおける思考の相違点およびプログラム開発
人文社会科学	30040004	岡村 明夢	おかむら ひろむ	村山 功	村越 真	石川 恭			日本語を母語とする英語学習者の動詞の低位範疇化の習得

令和3年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	221D001	安藤 久美子	あんどう くみこ	野平 慎二	石田 靖彦	香野 毅			発達障害のある子どもを持つ保護者が小学校就学時に抱える不安とその支援について
教育環境学	221D002	河内 照治	かわち しょうじ	竹川 慎哉	野平 慎二	中村 美智太郎			石田和男における「わかる」の概念について
教育環境学	221D003	柴田 萌子	しばた もえこ	野平 慎二	飯島 康之	村山 功			高等教育における女子大学の機能と構造
人文社会系教科学	221D004	梅田 裕介	うめだ ゆうすけ	中野 真志	岩山 勉	郡司 賀透			自然遊び・科学遊びを通じた幼児の思考力育成プログラムの開発
創造系教科学	221D005	大矢 知佳	おおや ちか	寺本 圭輔	伊藤 貴啓	杉山 康司			就学前後小児における運動遊びを想定したデュアルタスク運動プログラムの効果

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30140001	小柳津 和博	おやいづ かずひろ	香野 毅	鎌塚 優子	石田 靖彦			重症心身障害児との関わり合いを促すインクルーシブ自己評価表」の開発
創造系教科学	30140003	室伏 春樹	むろふし はるき	紅林 秀治	村越 真	飯島 康之			プロジェクトマネジメントに基づいた技術教育の研究
創造系教科学	30140004	菊本 智之	きくもと ともゆき	杉山 康司	紅林 秀治	寺本 圭輔			中学校保健体育科における「武道」領域の授業者の資質向上を視野に入れた「かた」学習プログラムの開発

令和4年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	222D001	木田 千晶	きだ ちあき	石川 恭	鈴木 裕子	香野 毅			子育て支援における子ども理解を基軸とした保育者と保護者の「相互理解」の可視化
人文社会系数科学	222D002	諏訪園 純	すわぞの じゅん	丹藤 博文	中野 真志	紅林 秀治	坂口 京子		「高等学校国語教育における古典価値の創造に関する研究 —『源氏物語』を中心に—」
自然系数科学	222D004	劉 宇超	りゅう うちょう	飯島 康之	伊藤 貴啓	紅林 秀治	長谷川 慎		小中学校音楽科における「箏」を中心とした授業モデルの開発に関する研究

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30240001	美那川 雄一	みながわ ゆういち	村山 功	村越 真	中野 真志			歴史を「書く」ための授業デザイン —歴史(学)するパフオーマンス評価の開発—
人文社会系数科学	30240002	井上 健人	いのうえ けんと	郡司 賀透	村山 功	中野 真志			日本人英語学習者によるC-system, T-system に関わる英文法の習得明示的文法指導の効果検証について
人文社会系数科学	30240003	鈴木 智久	すずき ともひさ	紅林 秀治	村山 功	丹藤 博文			日本人英語学習者の第二言語習得過程におけるオンライン英会話を介したインタラクティブの有効性について
創造系数科学	30240004	樋口 大輔	ひぐち だいすけ	紅林 秀治	杉山 康司	飯島 康之			中学校技術・家庭科技術分野における生徒の実践知識獲得プロセスを適応した授業カリキュラムの提案

令和5年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	223D001	後藤 由美	ごとう ゆみ	野平 慎二	鈴木 裕子	香野 毅			初めての集団生活に乳児が適応していく過程における物的環境が与える影響
教育環境学	223D002	鈴木 一成	すずき かつなり	石川 恭	伊藤 貴啓	鎌塚 優子			「二人称アプローチ」による体ほぐしの運動遊びの教材開発と効果に関する研究
人文社会系教科学	223D003	孔 令杰	こう れいじえ	中野 真志	丹藤 博文	紅林 秀治	野崎 浩成		電子辞書と機械翻訳の比較研究
創造系教科学	223D004	中野 弘幸	なかの ひろゆき	寺本 圭輔	鈴木 裕子	杉山 康司	鈴木 英樹 R6.9.30退職		子どもの走能力向上のためのスキップエクササイズの開発
自然系教科学	223D005	IM RANY	いむ らにー	岩山 勉	大鹿 聖公	郡司 賀透			Development of teaching material for teaching and learning science in Cambodia

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30340001	可知 穂高	かち ほだか	村山 功	村越 真	石川 恭			学力下位高の生徒を対象にしたライフキャリア教育プログラムの開発と評価—情報社会の変化をふまえた「よりよい生き方」に着目して—
自然系教科学	30340002	山内 慎也	やまうち しんや	郡司 賀透	小南 陽亮	大鹿 聖公			中学校理科の考察における科学的な表現の育成を目指す実践的研究—相互評価活動と考察記述の定型化指導を用いた学習活動を通して—
創造系教科学	30340003	高宮 佳祐	たかみや けいすけ	杉山 康司	鎌塚 優子	石川 恭			ウォーキングの価値を高めたサッカーの授業に関する研究

令和6年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	224D001	小林 みどり	こばやし みどり	野平 慎二	鈴木 裕子	香野 毅				保育者の状況的で瞬発的な判断と支援 —保育者が「モノを動かす」行為に着目して—
教育環境学	224D002	山下 純平	やました じゅんぺい	石川 恭	石田 靖彦	鎌塚 優子				小学校体育科と豊かなスポーツライフをつなぐことを企図したハン ドボールの教材開発
人文社会科学系	224D003	韓 帥	かん すい	中野 真志	野平 慎二	郡司 賀透	野崎 浩成			中国の高校日本語教育における機械翻訳の活用の可能性
人文社会科学系	224D004	MABEL MAYILVA RAYNOX	まえる ましるう・あ れいのつくす	伊藤 貴啓	野平 慎二	紅林 秀治	田口 達也	大瀧 綾乃		インドネシア人日本語学習者と日本人インドネシア語学習者のコ ミュニケーションストラテジーの比較

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員	副指導教員	副指導教員	副指導教員	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	324D0001	掛本 健太	かけもと けんた	中村 美智太郎	鎌塚 優子	野平 慎二				『公共』を主軸とした高等学校における道徳教育の設計と実践開発 の研究：道徳教育の充実化を通じた『共生社会』の実現を目指し て—
教育環境学	324D0002	酒井 都仁子	さかい くにこ	鎌塚 優子	中村 美智太郎	野平 慎二				養護教諭の「経験から学ぶ力」育成プログラムの開発
教育環境学	324D0003	中原 悟	なかはら さとる	村越 真	中村 美智太郎	竹川 慎哉	郡司 賀透			体験学習・探究学習における学習者の認知過程と変容に関する研究 ～質的研究法による児童の概念化を中心として～
自然系科学	324D0004	望月 朋子	もちづき ともこ	丹沢 哲郎	郡司 賀透	竹川 慎哉				フードリテラシーの育成をめざした中学校家庭科における食生活カ リキュラムの開発
創造系科学	324D0005	河村 敏文	かわむら としふみ	紅林 秀治	村上 陽子	飯島 康之				設計学習における最適解を導き出すまでの思考過程に関する研究

## IV. 学生の研究計画と研究活動

# 大久保博和

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

導電シートと液晶サーモグラフシートを用いた発熱教材の開発と指導方法の検討

## ○研究ポイント

「電流とそのエネルギー」単元における「電熱線と水を用いた発熱実験」で、新たな実験教材の開発と指導方法を提案し、その効果と課題を検討する。

## ○キーワード

電流による発熱、熱量、導電シート、液晶サーモグラフシート

## 1 博士論文の計画

中学校2年生の「電気とそのエネルギー」単元における「電熱線と水を用いた電流による発熱実験」は、電流による発熱量と電力・時間の関係を調べる実験として長く教科書に掲載されてきた。一方、この実験の測定値である水の上昇温度とそれを基に計算によって得られる水が得た熱量の関係は学習指導要領の改訂の過程で大きく変わってきた。その変化は、「比熱」が削除された昭和52年(1977年)の改訂、1993年(平成5年)にcal(カロリー)が熱量の単位から除外され国際単位(SI)のJ(ジュール)が使われることになった後の改訂に顕著にみられる。現行の教科書でも電熱線と水を用いる実験は取り上げられている。しかし、水の上昇温度は電熱線から発生する熱量に比例する量として取り扱われ、また水が得た熱量を求めることは必要としていない。これまでの電熱線と水を用いる実験では実験の準備や測定に時間がかかり、火傷や感電に注意が必要であった。この実験では電流を流すことによる時間と温度上昇、電力と温度上昇の関係を確認することを目的としているので、電流を流すことによって短時間で安全に温度上昇が測定できる電熱線と水に代わる新たな教材を開発することとした。

最初に目的とした実験が実施できる教材の選出と実験に適切な規格の確定を実施し、写真用の印画紙に導電ペイントを様な厚さで印刷した導電シートを開発した。さらに、温度によって色が変化する液晶サーモシートを用いて可視化による効果を追加した。2024年度は開発した教材を用いて中学校での3年目の授業実践を実施した。今年度はこれまでの研究結果を基に、開発した教材と指導方法についてその効果と課題を検討し論文としてまとめる予定である。

## 2 2024年度の研究活動

### ・学会発表

大久保博和, 新鶴田道也, 岩山勉: 電力概念理解のために実施した指導方法の学習効果  
日本理科教育学会東海支部大会 第69号 39

# 武市裕子

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

子どもの心身の変化を視覚化するアセスメントツールの開発

## ○研究ポイント

本研究では、子どもの変化を捉えるツールとして養護教諭が成長曲線を用いることの有効性を測る。さらに、子どもの変化を見取ることができるアセスメントシートを作成し、成長曲線と併用することで、学級担任が行う教育相談の支援となるのか、教員と子ども双方からの効果を測定する。

## ○キーワード

成長曲線、養護教諭のアセスメント、教育相談

## 1 博士論文の計画

本研究の目的は、養護教諭が成長曲線の変動と予防的観察をアセスメントとして用いることで、子どもの変化を見取り、教育相談に生かす方策を見いだすことにある。研究の成果として、開発したツールを用いることで養護教諭や教員の経験だけに頼らず子どもの心理社会的な変化を見逃さない支援につなげることを目指す。

### <研究1> 成長曲線の変動が見られる要因についての分析・検討

成長曲線の変動の分類と事例の分析を行うことによって、成長曲線の変動から子どもの変化（特に社会心理的影響）が見取れるかを明らかにし、養護教諭が成長曲線の変動を抽出する基準を示す。

- ① 身長・体重変動を伴う要因について、先行研究を精査する。【文献研究】
- ② 成長曲線の変動パターンの分析【調査研究（統計分析）】
- ③ 成長曲線に変動がある子どもについての養護教諭への聞き取り調査【調査研究（テキスト分析）】

### <研究2> 「養護教諭のアセスメント」の視点の整理

先行文献を分析し、どのような視点から子どもの状態や変化を捉えるのかを明らかにする。その上で、子どもを予防的に観察する視点を挙げ、「養護教諭のアセスメント」を整理する。

- ① 教育相談における子どもを見る視点の分類【文献研究】
- ② 養護教諭が子どもを見る視点の分類【文献研究】

### <研究3> アセスメントシートを用いた教育相談の実施・検証【介入研究+調査研究（統計分析）】

成長曲線と「養護教諭のアセスメント」の視点から「アセスメントシート」を作成し、教育相談に活用することで教員と子ども双方に効果があるか検証する。

- ① 成長曲線と「養護教諭のアセスメント」の視点を生かした「アセスメントシート」の作成
- ② いじめや学校生活、悩み等を捉えられる項目の児童生徒用「教育相談アンケート」の作成
- ③ ①と②を併せ、教育相談に活用できる「教育相談支援シート」を作成
- ④ 「教育相談支援シート」を用いて学級担任による教育相談を実施し、有効性を測定

## 2 本年度の研究活動

今年度より学校現場を離れ、大学で勤務することとなった。研究の再構築を行うとともに、研究1の③について、全国的な学会への投稿に向けて論文を執筆中である。学校現場で日常的に養護教諭が成長曲線を活用するための研究の方向性を模索している。

# 島 崎 治 子

(学籍：静岡大学)

## ○研究テーマ

薬学教育における第2言語（L2）英語読解力の向上—語彙習得と協働リーディングの効果の検証

## ○研究ポイント

- ・薬学生の語彙知識（一般学術語彙・専門語彙）の習得状況を明らかにする
- ・協働リーディング（Collaborative Reading: CR）が英語の読解力に与える影響を実証的に検証する
- ・CRと個別リーディング（Individual Reading: IR）に対する学生の認識や学習意欲を調査

## ○キーワード

薬学教育、第二言語（L2）リーディング、語彙習得

## 1 博士論文の計画

本研究は、薬学教育における第2言語（L2）としての英語読解力の向上を目的とし、特に語彙習得と協働リーディング Collaborative Reading: CR）の効果を検証するものである。日本の薬学生は専門的な英文に接する機会が限られており、語彙力や読解力に課題を抱えることが多い。本論文では、語彙の習得状況とその難易度、CRと個別リーディング（Individual Reading: IR）の比較、学習者の意識や動機づけについて実証的に調査し、医療目的のための英語（EMP）教育における効果的な指導法を提案する。研究成果に基づき、高頻度専門語彙の体系的指導、形態素知識の活用、協働学習と個別学習の効果的な組み合わせ、そしてデジタルツールを用いた学習支援の実践モデルを提示する。これにより、薬学生の読解力向上と将来の国際的な医療現場への対応力強化を目指す。なお、本論文原稿はすでに事前審査に提出済みであり、現在は審査委員からの指摘を踏まえた修正作業を進めている。

## 2 本年度の研究活動

「薬学英語授業設計における『三つの第一原理』の活用」『外国語教育研究 Special Edition』（2025年4月）筆頭著者

"Effective L2 English Reading Instruction for Pharmacy Students: A Literature Review Exploring the Role of Collaborative Reading (CR) in L2 English Comprehension." *Journal of Medical English Education*, 23(3), 61-66 (2024年10月) 筆頭著者

"Disrupting the Hermetically Sealed Classroom." *JALT Hokkaido 2025 Winter Language Teaching Conference* (2025年2月16日) 共同発表

"The Challenges of Teaching Writing as a Non-Native Speaker." *JALT 2024 International Conference* (2024年11月16日) 共同発表

"Reading Instruction for Effective L2 English Reading Comprehension for Pharmacy Students." 第27回 JASMEE 学術集会 (2024年7月13日) 単独発表

# 行 田 臣

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

戦後新教育期の愛知県内実験学校におけるコア・カリキュラムの特色

## ○研究ポイント

戦後新教育期における愛知県における教育の特色を実験学校の取り組みを通して明らかにすることを目的とする。

## ○キーワード

戦後新教育期 実験学校 愛知県 コア・カリキュラム

## 1 博士論文の計画

博士論文の構成として以下のように考えている。

①愛知県における軍政部の行った教育改革について行政側の視点から明らかにする。

- ・「愛知県実験学校協議会」(全3回：1947年6月・7月・9月)での指導内容の分析
- ・地区実験学校協議会の取り組みを、岡崎市立六名小学校『トライ・アウト・スクール協議会記録』、春日井市立勝川小学校『トライ・アウト・スクール協議会記録』をもとに分析する。

愛知県は、4つの地区に分かれ、実験学校協議会が開催されていった。これまでの先行研究で取り上げられてきた、西三河地区実験学校協議会に加え、尾張東地区、尾張西地区の実験学校協議会の活動を分析し、愛知県の終戦直後の実験学校における研究の実態を報告する。

②軍政部、県からの指導を受け、愛知県の実験学校がどのような実践を展開したのか、プランをカリキュラムの形態で分類する。愛知県では、教科的コア・カリキュラムと経験コア・カリキュラムの2つのコア・カリキュラムが確認された。カリキュラムの形態は同じであっても、単元レベルでは違いが確認された。そこで、各学校がどのような授業を展開していったのかを、単元レベルで分析し、実践の特色を明らかにする。取り上げる学校は以下の通りである。

- ・三河地区5校

豊川市立八南小学校、蒲郡市立塩津小学校、岡崎市立六名小学校、  
愛知教育大学附属岡崎小学校、新城市立千郷小学校

- ・尾張地区2校

名古屋市立幅下小学校、愛知学芸大学愛知第一師範学校春日井附属小学校

## 2 本年度の研究活動

(1) 学会発表

- ・「戦後新教育期における総合単元的な学習-名古屋市立幅下小学校の実践-」  
日本生活科・総合的教養習育学会 第33回新潟大会

(2) 論文

- ・「戦後新教育期の実験学校における実践と特色-名古屋市立幅下小学校『生活単元学習』を例に-」  
愛知教育大学社会科教育学会『探求』第35号

# 三宅 昂子

(学籍：静岡大学)

## ○研究テーマ

養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」に関する研修プログラムの開発  
—「器質的疾患の可能性の除外」の思考に焦点化して—

## ○研究ポイント

本研究は、「器質的疾患の可能性の除外」の思考に焦点化した、養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」に関する研修プログラムの開発を行うことを目的とした。

## ○キーワード

養護診断、養護教諭、心理的な要因、器質的疾患の可能性の除外

## 1 博士論文の計画

以下の構成・目次で執筆した。

序章 本研究の背景と目的

第1章 熟練養護教諭と熟練学級担任のリフレクションの相違

—リフレクションプロセスの構成要素の視点から—

第2章 養護教諭が児童に「心理的な要因が存在する」と判断する際の思考の概念と力量向上方法（質的検討）

第3章 養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」の特徴と力量向上方法（量的検討）

第4章 「心理的な要因が存在する」と判断した児童生徒が器質的な疾患も抱えていた事例と「器質的疾患の可能性の除外」についての思考が働かなかった要因

第5章 養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」に関する研修プログラム（予備調査）の開発と評価

第6章 養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」に関する研修プログラム（本調査）の開発と評価

終章 総合的考察

## 2 本年度の研究活動

本年度は、第3章養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」の特徴と力量向上方法（量的検討）、第4章「心理的な要因が存在する」と判断した児童生徒が器質的な疾患も抱えていた事例と「器質的疾患の可能性の除外」についての思考が働かなかった要因、第5章養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」に関する研修プログラム（予備調査）の開発と評価、第6章養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」に関する研修プログラム（本調査）の開発と評価に関するデータ収集と分析を行った。

- ・三宅昂子・鎌塚優子：児童に心理的な要因があると養護教諭が判断する際の思考の概念化．教科開発学論集 12：23-35、2024
- ・三宅昂子・鎌塚優子：養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」に関する力量形成の方法．静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）75：48-60、2024

# 安藤久美子

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

就学移行時の発達障害児の支援－保護者と学校の連携と協働－

## ○研究ポイント

発達障害のある子が義務教育の開始となる就学移行という時期を迎えた時、保護者は小学校生活に対してどのような不安を抱え、小学校はどのように親子を支援していくのか、その課題を明らかにし、連携と協働の在り方を検討し、小学校生活の適応に導く支援方法の構築を目的とする。

## ○キーワード

特別支援教育、就学移行期、発達障害児支援、保護者と学校の連携と協働

## 1 博士論文の計画

博士論文は

研究1 今日の就学移行期における特別支援教育の課題をまとめる

研究2 小学校教員等支援者に対する質的研究

支援者が課題と考える項目の洗い出しに至る質的調査（研究協力者に実施済みの予備面接から、半構造化面接の質問項目の作成）

半構造化面接を行い、教員向け質問紙の作成

研究3 小学校教員等支援者に対する量的研究

質問紙調査を実施して、どのような内容が課題とされるのか、保護者と連携するための支援方法は何かを分析する

研究4 保護者に対する質的研究 保護者が課題と考える項目を検討

研究5 保護者・小学校の連携と協働についての課題と、よりよい適応に向けた支援方法構築のための連携と協働の在り方を考察する

## 2 本年度の研究活動

先行研究のまとめ

大学に研究倫理申請を行い、インタビュー調査実施

インタビューで明確になった課題から、教員向け質問紙調査項目を作成する

# 大 矢 知 佳

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

就学前後における脳神経活動に着目した運動遊びの効果の検討

## ○研究ポイント

発達段階の特徴より幼児期・児童期は神経型の発達が著しいことから基本的な動きや多様な動きを獲得するために適した時期である。運動や運動遊びの効果のエビデンスに基づき示すため、生理学的指標を用いて検討することとした。客観的指標からその効果を示すことで、体育の授業といった限られた時間の中でより効果的なプログラム開発につながると考える。

## ○キーワード

脳神経活動、運動遊び、多様な動き、筋間コヒーレンス、筋電図

## 1 博士論文の計画

### 1) ヒトの動きの獲得と脳神経機能の発達から運動の遊びの意義について示す

身体を動かす情報や指令は神経細胞によって伝達されている。子どもは神経型の発達が著しい時期とされており、基礎的な動きの獲得に適した時期である。文献調査よりヒトの動きの獲得の構造と子どもの脳・神経機能の発達と動きの獲得のメカニズムを整理し、運動遊びの意義について生理学的視点から示す。

### 2) 歩行中における脳と筋の神経活動の同調性を検討

脳において、感覚器官からの情報と運動司令の情報の統合性より身体の動きの調整をしている。この調整を脳と筋の間の神経活動における同調性から評価する方法としてコヒーレンス法という手法が示されている。近年では筋電図間におけるコヒーレンスによって評価が可能であると考えられ、無線の筋電機器を使用することにより、運動遊び中の脳神経活動を示すことができるのではないかと考える。まず、歩行課題における筋間コヒーレンスについて検討し、単歩行、二重課題歩行における脳神経活動について検討する。

### 3) 運動の介入前後の脳と神経活動の同調性の変化から運動の効果を検討

運動の介入前後の脳・神経活動を評価することで、身体をコントロールする運動制御機能の視点から運動の効果を検討する。特に運動の頻度が高くなる期間と通常の園の活動の期間との変化の違いについて検討する。

## 2 本年度の研究活動

本年度は実際に運動の介入前後で測定を行い、運動の効果について検討した。脳・神経活動の測定に加えて、幼児の運動能力テストの測定項目である両足跳び越しも実施した。今後は、歩行時のコヒーレンスと両足跳び越しの測定結果を分析していく予定である。

# 木 田 千 晶

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

子ども理解を基軸とした保育者の保護者理解促進と支援に関する研究

## ○研究ポイント

保護者の保育・幼児教育理解を促し、保育者と保護者の相互的な関わりで成り立つ子育て支援を目指すことが本研究の立場である。特に本研究では、保育者と保護者がそれぞれの立場から「子ども理解」しようとする姿を手がかりとする。保護者の子ども理解に着目することにより、保護者が子育て支援の受け手に留まらない可能性を探ることができると考える。その上で、保育者と保護者が対等な関係を構築する実践への手立てを得ることを目的とする。

## ○キーワード

子ども理解、保育者の専門性、子育て支援、保護者支援、保護者との関わり、パートナーシップ

## 1 博士論文の計画

「子ども理解」は、保育・幼児教育において広く認知され、あらゆる場面で用いられてきた言葉の一つである。主に保育者の保育行為を示すような文脈で用いられる。「子ども理解」という言葉の始まりや言葉の意味を明言することは難しいが、一つの共通概念としての側面を強めてきたと考える。

本研究では、保育者と保護者それぞれの子ども理解を明らかにし、保護者の保育・幼児教育理解を促すための保育者の役割を検討する。保護者の保育・幼児教育への理解を促すことは、社会全体からの保育・幼児教育理解の促進にも通ずると考える。保育者が行う子育て支援に対する従来の考え方を見直し、保育者が蓄積している専門性と保護者が有する経験が活かされる、対等で相互的な営みとして成り立つ子育て支援を検討する。

博士論文では、以下の計画に基づいて研究を進める。

### 【研究1】保育研究における子ども理解の再解釈 ※実施済み

子ども理解に関する先行研究から国内の研究動向を分析し、子ども理解が抱える現代的課題について論稿する。CiNiiを用いた文献検索を行い、抽出された文献に対する解釈を行う。

### 【研究2】保護者の保育における子ども理解・保育理解の実相 ※実施済み

保護者の保育における異なる遊び場面に対する「子ども理解」の構造を明らかにする。子どもを保育施設に通わせる保護者を対象とする。多声的ビジュアルエスノグラフィーを援用し、映像視聴による集団討議を実施、SCATによって分析する。

### 【研究3】保護者と保育者との子ども理解の相違と共有可能な概念 ※現在進行中

保育者と保護者それぞれの「子ども理解」を概念化し、差異性と共通性を検討する。現職保育者と子どもを保育施設に通わせる保護者を対象とする。研究2と同様の方法で実施する。

### 【研究5】「保護者との協働関係を構築するための保育者の自己評価尺度」の開発 ※現在進行中

尺度開発の手法により、保育者が保護者と対等で相互的な関係を構築するためのパートナーシップを具体化する。

## 2 本年度の研究活動

### 【論文】

- (1) 木田千晶 (2024) 保育の場における保育者と保護者の子ども理解の違い—幼児が集団で遊ぶ場面に対する解釈に着目して—。教科開発学論集. 13, 13-25

### 【学会発表】

- (1) 木田千晶 (2024) 保育における遊びに対する保育者と保護者の価値観. 日本保育学会第77回大会 (オンライン)
- (2) Kida,C.(2024) How Has the Concept of "Understanding Children" Been Interpreted throughout the History of Early Childhood Education in Japan?. The 24th Pacific Early Childhood Education Research Association International Conference

# 諏訪園純

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

国語科における古典教育価値論——『源氏物語』を例として——

## ○研究ポイント

学習者にとって古典を価値あるものとするために、通時的な視点から古典をとらえたり、その固有性・異質性に注目したりすることを可能とする教材と学習指導を開発する。通時的な視点とは、古典が受容され継承されてきた側面に注目するものであり、固有性・異質性とは、現代と異質で古典に固有の要素を基軸として教材を扱っていくということである。これらを通じて、学習者の認識に広がりと厚みを持たせたい。

## ○キーワード

古典教育 教材価値 源氏物語 通時的 固有性 異質性 享受・継承

## 1 博士論文の計画

以下の構成・目次を見込んでいる。

- ・序章 古典教育の現状と、本研究の目的・方法
- ・第1章 古典の固有性・通時的なとらえ方に基づく戦後古典教育論  
戦後の古典教育諸論を、古典の固有性・通時的なとらえ方といった視座から整理する。
- ・第2章 古典教育における『源氏物語』の受容・実践史  
戦後の授業実践における『源氏物語』受容のありようを分析する。各種の実践報告・実践記録の類を分類・類型化する際の基準・項目としては、「テキストから引き出す指導内容」について、○物語内容が中心か、○物語言説に着目するか、○時代背景に還元するか、といった諸観点と、「学習者とテキストの関わらせ方」について、○共通性に基づくか、○固有性・異質性に基づくか、○物語に没入させるか、○通時的な側面に着目させるか、といった諸観点を定める見通しである。
- ・第3章 『源氏物語』に埋め込まれた物語享受を読む学習指導——古典の通時的な側面  
『源氏物語』絵合巻などを読むことで、物語や古典の享受・継承過程を学習する。
- ・第4章 『源氏物語』浮舟巻の教材価値と、それをもとにした学習指導——古典の固有性  
『源氏物語』浮舟巻を用い、近現代小説と異なる語りの構造を学習する。
- ・第5章 『源氏物語』に見えるフレーズを用いた学習指導——古典の（共通性を経た）異質性と通時性  
『源氏物語』から抽出したフレーズ・名言から学習者が気に入ったものを選んでその場面を読み、自分を取り巻く状況とその場面とを比べ、それらの違いを意識したり古典の意義を考えたりする学習。
- ・終章 本研究の成果と課題

昨年度は第3章の内容を論文化し、今年度は第4章の内容を論文化し、第5章に関わる授業実践を行った。次年度は第1章と第2章について、主に文献調査を進める予定である。

## 2 本年度の研究活動

### (1) 口頭発表

「実生活と関係する古典のことばを学習者が選び取る言語文化学習——『源氏物語』の「抜書」を用いて——」

第147回全国大学国語教育学会・自由研究発表、2024年10月

### (2) 研究ノート

「語り」の持つ主観的な側面について学習するための教材開発——『源氏物語』浮舟巻の長大な心内語を取り上げて——」

『教科開発学論集』13、2024年11月

# 美 那 川 雄 一

(学籍：静岡大学)

## ○研究テーマ

歴史的ナラティブを構成する教授-学習の開発

## ○研究ポイント

歴史を理解するとは、ナラティブという文化的ツールを用いて成しえる媒介された行為である。ナラティブが歴史理解にアフォーダンスと制約を提供する。高校生が歴史のナラティブを構成する教授-学習について、認知的葛藤を引き起こす矛盾する資料と協調学習の側面から研究する。

## ○キーワード

歴史的思考、歴史的ナラティブ、概念変化、認知的葛藤、協調学習

## 1 博士論文の計画

2025年度は、以下の論文を執筆する予定である

- ・「欧米における歴史的思考に関するアプローチの変遷—歴史教育における認知主義から社会文化的アプローチへの拡大—」（教科開発学論集第14号に投稿予定）

近年の欧米における歴史的思考に関するアプローチが、英国でのピアジェ派のアプローチや米国の熟達化研究を経て、社会文化的アプローチへと拡大していく過程について整理し、歴史教育の在り方について主張した。

- ・「ナラティブが歴史の想起と説明に及ぼす効果に関する検証」（日本教育工学会に投稿予定）

ナラティブが歴史の想起と説明に及ぼすアフォーダンス（産出）と抑制について明らかにすることを目的に、準実験の非等価事前事後テストデザインと質的調査による検証を行った。ナラティブ・テンプレートが歴史の想起と説明を促す効果を持つことを明らかにし、ナラティブ・テンプレートと概念が歴史の想起と説明に与える影響の類似性について示唆した。

- ・本年度は、博士論文提出を予定しております

## 2 2024年度の研究活動

### (1) 論文

- ・ 「概念変化と歴史的ナラティブの構成を促す矛盾する資料および協調学習の開発・検証」  
日本教育工学会論文誌 48(1)、pp.109-122.

### (2) その他

美那川雄一、「歴史理解のツールとしてのナラティブ」『社会科教育』No.788, 明治図書, 2024年

# 樋口大輔

(学籍：静岡大学)

## ○研究テーマ

中学校技術・家庭科技術分野における、のこぎりびきの基礎課題において生徒の技能を言語化する活動が内省や技能向上に与える効果の検証

## ○研究ポイント

筆者らは、中学校技術・家庭科(技術分野)において、のこぎりびき作業の技能を言語化する活動が、内省や技能向上に与える効果について研究している。これまでの研究から、「言語化活動を通して、生徒は作業の要点や身体の使い方について詳細に記述することができるようになる」ことや、「技能の言語化活動を行うことで、一部ではあるが生徒の技能は向上する」ということがわかった。

技能を言語化する方法として、作業の様子を動画撮影し、それを視聴しながら生徒にインタビューをする方法を用いた。

## ○キーワード

中学校技術科教育、技能の言語化、のこぎりびき、内省、技能向上

## 1 博士論文の計画

本研究では、以下の示す流れで研究を進める。

- 1) 先行研究の整理
- 2) ものづくりに関する技能の定義
- 3) 技能の言語化がもたらす教育効果の仮説設定
  - ・生徒が獲得した技能を言語化することの教育効果に関する仮説を立てる。
  - 仮説1 「技能の言語化活動を行うことで、生徒は作業の要点や身体の使い方について、言語化活動前よりも詳細に記述することができるようになる」
  - 仮説2 「技能の言語化活動を行うことで、生徒の技能は向上する」
  - 仮説3 「技能の言語化活動を行うことで、生徒は分析的に作業を捉えて要点を一般化し、その内容を発展的な課題にも生かせるようになる」
- 4) 技能を言語化する具体的手法の考案
- 5) 実験結果の評価方法設定
- 6) 実験および結果の考察
- 7) 技能を言語化する活動を取り入れた授業の設計

## 2 本年度の研究活動

[論文]

- 1) 樋口大輔・紅林秀治「技能学習における生徒の技能を言語化することの教育効果—木材加工実習での鋸引き作業に関する記述に着目して—」教科開発学論集 第13号(2024)

[学会発表]

- 1) 樋口大輔・紅林秀治「技能学習における生徒の技能を言語化することの教育効果」第67回 日本産業技術教育学会全国大会(鳴門)(2024)
- 2) 樋口大輔・紅林秀治「技能学習における生徒の技能を言語化することの教育効果」第15回教科開発学研究会(2024)

# 後藤由美

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

園生活への1歳児の適応における保育室の物的環境と子どもの行動との関係

## ○研究概要

子どもの園生活への適応については、人的環境としての保育者と子どもとの関係を中心に議論されることが多い。保育環境への適応過程において、保育者のかかわりは、子どもにとって重要であるが、集団での保育の場では保育者は子ども一人だけのそばにいられるわけではない。一方、保育者が意図や思いを込めて構成した環境は子どもの周りにあり続ける。そこで本研究では、従来と異なる側面として、人的環境である保育者との関係ではなく物的環境との関係に着目し、子どもたちの園生活を環境の視点から捉えることを着想した。適応過程において、1歳児とモノとのあいだで何が起ころのかについて分析し、保育環境における物的環境、特にものの実践的な価値を浮き彫りにしようとするものである。

本研究では、乳児保育における1歳児の入園時期からの環境への適応において、保育室の物的環境と子どもとの行為との関係を分析する。具体的には、シグニファイヤを含むアフォーダンスを理論的な枠組みとして用い、1歳児が園生活に適応する過程においての物的環境、特に子どもがものにどのような行動を促されるのかを考察する。環境と子どもの行動との関係を詳細に捉えることにより、適応過程における子どもにとっての環境の役割や意味を明らかにする。その際、園生活を送る中で、子どもが多く時間を費やす「遊び」場面において、物的環境との関係に着目し、1歳児の姿を明らかにする。入園間もない1歳児の園生活への安心や安定、集中などの状態が促される適応過程において、物的環境との関係を明らかにし、子どもたちの園生活における遊びの姿を描き、遊び場を構成する物的環境が子どもにどのような行動を促すかを検討し、適応における遊びの重要性と、適応と不可分であることを実証する。保育者にとっては感覚的に自明なことでも、「今、この子どもにとっての、この環境の意味」を学術的に言語化することは、「環境を通した」という保育の意義を再確認することにも繋がる。保育内容における領域環境における物的環境という教材の適切さを追求するものであり、教材開発学としての乳児保育内容理論の構築に寄与することを目指す。

## ○キーワード

保育施設、適応、物的環境、1歳児、アフォーダンス理論

## ○博士論文の計画

### 第1部

第1章 問題と目的

第2章 先行研究

第3章 保育場面において1歳児がものにかかわる出来事の特徴を分析するための観点と水準の設定 (名古屋柳城短期大学研究紀要 45 21-33)

第4章 1歳児が保育という環境や集団に「適応」する意義の理論的検討と本研究で用いる測定指標 (愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 9. 155-163)

### 第2部

第1章 保育室内環境においての子どもに対するもののもたらす力 (調査1)

第2章 1歳児の適応過程における物的環境と子どもの行動との関係 (調査2) (教科開発学論集 13, 27 - 38)

第3章 異なる環境の保育室におけるものと子どもの行動との関係の比較 (調査3)

第4章 途中入園の1歳児の適応過程において保育室のものがおよぼす影響 (調査4)

第5章 総合考察

# 鈴木 一成

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

「二人称的アプローチ」による体ほぐしの運動遊びの教材開発と効果に関する研究

## ○研究ポイント

本研究は「二人称的アプローチ」による体ほぐしの運動遊びの教材を開発するとともに、小学校第1学年及び第2学年の体育の授業実践より体ほぐしの運動遊びにおける「共感的（二人称的）かかわり」についての学びの様相を描き出すことで教材の効果を明らかにすることである。

## ○キーワード

二人称的アプローチ, 体育, 体ほぐしの運動遊び, 教材, 授業

## 1 博士論文の計画

2023年度及び2024年度は、博士課程の授業、セミナーⅠ・Ⅱ及びゼミ等でのご指導を踏まえて、博士論文に関連する査読付きの学術雑誌掲載論文（【小学校体育科の体ほぐしの運動における教材概念の一考察, 教材学研究, 第35巻, 7-16. 2024年】【小学校体育科体ほぐしの運動遊びにおける「共感的かかわり」を目指す教材の効果に関する研究, 臨床教科教育学会誌, 第23巻, 第2号, 23-35. 2024年】）の執筆及び博士論文の序章, 第1章, 第2章を執筆した。（【序章】教科開発学における「二人称的アプローチ」による体ほぐしの運動遊びの教材化に関する問題の所在及び本論文の目的とその構成, 教科開発学における本研究の位置の明確化, 【第1章】体ほぐしの運動遊び及び体ほぐしの運動の教材概念及び教材開発と効果に関する本研究の理論的枠組みの提示, 【第2章】体ほぐしの運動遊びの教材化の方法として「二人称的アプローチ」を導入することを目指して, 「二人称的アプローチ」の特徴と「なる」論2の「体ほぐしの教材化における三項関係の発達」の検討と本研究の教材開発・効果に関する方法の提示）

2025年度は、第3章以降を執筆する。（【第3章及び第4章】第1章及び第2章をふまえ, 第1学年の体育の授業実践（2実践）を行い, 「二人称的アプローチ」による体ほぐしの運動遊びの教材化過程及びその効果について明らかにする。【第5章及び第6章】第1章及び第2章をふまえ, 第2学年の体育の授業実践（2実践）を行い, 「二人称的アプローチ」による体ほぐしの運動遊びの教材化過程及びその効果について明らかにする, 【終章】統合的考察と今後の展望について示して研究全体をまとめる。前半では, 各章の研究成果を総合的に考察し, 「二人称的アプローチ」による体ほぐしの運動遊びの教材開発と効果について得られた知見を結論づける。後半では, 今後の研究に向けた課題及びその展望を示す。）

## 2 本年度の研究活動

2025年8月セミナーⅢ発表

2025年9月事前審査申請

2025年11月学位審査申請

2026年1月最終試験

# 孔 令 杰

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

中国人日本語学習者における ChatGPT を活用した作文トレーニング

## ○研究ポイント

中国人日本語学習者向けに ChatGPT を活用した日本語作文トレーニングを実践し、その ChatGPT からの影響を検証探究する

## ○キーワード

ChatGPT, 日本語学習, 日本語作文トレーニング, 日本語教育

## 1 博士論文の計画

ChatGPT を日本語に適応し、学習者の言語レベルとニーズに合わせたトピックを提供する実証実験を行う。学習者は ChatGPT と対話し、リアルなフィードバックを通じて日本語の表現力と論理展開を向上させることを目指す。単語、文法の運用と自然表現の三方面から対象の作文を評価し、新しい学習手法の実用性を明らかにする。

中国人日本語学習者の作文実力向上させるため、ChatGPT を代表とした AI ツールの有用性を証明し、AI ツールを利用した言語学習の課題を示す。特に中国人学習者は、漢字依存や母語干渉により独自の課題を抱えるため、AI 活用による「文化的・言語的ギャップの解消」が本研究の核心的意義である

対象者を、ChatGPT を用いた日本語作文トレーニングを行う実験群と、ChatGPT を使用せずに従来の方法で作文トレーニングを行う対照群の 2 つのグループに分ける。各グループには、初級クラス 13 名、中級クラス 13 名、上級クラス 13 名、大学生以上の学習者 13 名が含まれるように配置する。

実験群には、先生からの採点修正以外に、ChatGPT プログラムとアカウントを提供し、ChatGPT を用いて作文修正と書き直す。週 1 回の頻度で 1 ヶ月間（全 4 回）のトレーニングを行わせる。対照群は、従来の教師主導による作文トレーニングを同様に実施する。

## 2 本年度の研究活動

上記研究実験を実践し、データを分析と整理した。

文章化にして論文を執筆した。

# 中野 弘幸

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

子どもの走能力向上のためのスキップドリルの開発

## ○研究ポイント

本研究は、運動前のウォーミングアップとして広く用いられているスキップを利用した、だれでも速く走れるようになるスキップドリルの開発を目的としている。そのために、スキップと走動作の関係を運動学的に明らかにした上で、より効果的に走能力を向上させられるスキップ動作を特定し、ドリル化したいと考えた。

## ○キーワード

子ども、スキップ、短距離走、走能力、走動作

## 1 博士論文の計画

中学3年生を対象に実施したスキップと50m走のデータから得られた研究成果を以下のように博士論文としてまとめ、学校体育のかけっこ・短距離走の授業や地域のスポーツクラブ等に有効な指導内容を提供したいと考えている。

### 研究Ⅰ：中学生の走動作とスキップ動作の関係

走速度とスキップ速度の間に有意な正の相関が認められた。また、スプリントとスキップは同様に、速度が高い者ほどストライド長が広く、接地時間が短かった。これらのことから、ストライド長の拡大や接地時間の短縮を意識させるスキップドリルの実施は、中学生の走能力向上に有効であり、学校教育やトレーニングにおける具体的な指導法の一助となると考えられた。

### 研究Ⅱ：走動作とスキップ動作の運動学的特徴<sup>1)</sup>

走動作とスキップ動作の関係について検討した結果、スキップはスプリントよりも大きな股関節伸展角加速度を発揮していることが明らかになった。また、走能力が高い被験者は、接地中のより早い時点で股関節伸展角速度を高めていた。これらのことから、スキップを行うことで股関節伸展筋力を高めて最大角加速度の出現時点を早めることは、走能力の向上に有効であると考えられた。

### 研究Ⅲ：スキップドリルが走能力に及ぼす運動学的効果<sup>2)</sup>

スキップ中の踏切脚の動きに基づき、「フロントサイドメカニクス (FM) 群」(n=12) と「バックサイドメカニクス (BM) 群」(n=5) で比較検討した。FM 群ではスキップ速度が向上したが、BM 群では有意な変化は認められなかった。また、FM 群ではスキップ動作と走動作における支持期後半の膝関節角度が小さくなったが、BM 群では逆に膝関節角度が大きくなった。これらの結果から、脚の剛性や動作の連動性の向上を目指すスキップドリルは、合理的な走動作の習得を促進し、走能力向上に寄与する有効なトレーニング法になると考えられた。

### 研究Ⅳ：スキップドリルの開発とその効果の検証<sup>3)</sup>

走能力向上に有効なスキップの動作ポイントを用いてスキップをドリル化し、指導現場で子どもたちに実施する。そして、指導前後の走能力を比較することで、指導の妥当性を検討する。

## 2 本年度の研究活動

- (1) Kinematic analysis of hip extension during skipping and sprinting in junior high school students. *Journal of Physical Education and Sport*, 209: 1887-1892, 2024.
- (2) Kinematic effects of skip drills on sprint ability in junior high school students. *Journal of Physical Education and Sport*, 287: 1912-1918, 2024.
- (3) スキップは走能力向上に有効か - 小学3年生の授業実践から明らかになったこと - . *楽しい学校*, 大日本図書, 2024, 69: 20-21.

# IM Rany

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ(Research Theme):

Development of Teaching Material to Enhance Teaching and Learning Science in Cambodia

○研究ポイント(Research Point):

Development of hands-on activities through video-based experiments with agar gel to teach acid-base concepts and chemical kinetic

○キーワード (Keywords):

Agar gel, Digital image analysis, ICT integration, Science education, Science process skills, Video-based experiment

## 1 博士論文の計画 (Doctoral Dissertation Plan)

The purpose of this study is to examine the capacity of STEM pre-service teachers to integrate technology into their teaching practice and to develop teaching materials that leverage technology to advance chemistry education in Cambodia. The teaching material developed in this study is cost-effective, environmentally friendly, locally available, as simple as the conventional approach, and highly accurate. Through the developed materials, teachers can design lessons and activities that are more attractive, engaging and advanced. The study addresses three research questions:

1. To what extent do STEM pre-service teachers comprehend the technological pedagogical content knowledge?
2. What teaching materials can be developed based on the advantage of ICT in learning Chemistry in Cambodia?
3. How effective are the developed teaching materials in teaching and learning Chemistry in Cambodia?

In the academic year 2023-2024, a survey was conducted to examine the pre-service teachers' comprehension of technology integration in their teaching practice. Then, the agar gel and video-based experiments were developed to teach the topic of acid-base concepts and chemical kinetics. The study included three experiments focused on acid-base chemistry and two experiments dedicated to chemical kinetics. In the first semester of the academic year 2024-2025, a series of teaching practices using the developed teaching materials were conducted in Cambodia with pre-service teachers to determine their effectiveness and relevance. The study employed a quasi-experiment design featuring a single-subject pre-test and post-test approach.

## 2 本年度の研究活動 (Research Activities)

Within two academic years, four research papers have been published.

1. Rany Im, Tsutomu Iwayama and Masashi Osa. "Development of Acid-Base Indicators from Natural Pigments in Agar Gel." Published in the Journal of Chemical Education.

DOI: <https://doi.org/10.1021/acs.jchemed.3c00131>

2. Rany Im, Savrin Thy, Tsutomu Iwayama and Masashi Osa. “Cambodian STEM Pre-service Teachers’ Competency in Effective Information Communication Technology Integration Teaching Based on Technological Pedagogical Content Knowledge Framework.” Published in the Journal of Science and Education. DOI: <https://doi.org/10.56003/jse.v4i2.285>
3. Rany Im, Tsutomu Iwayama and Masashi Osa. “Utilizing Reactant-Infused Agar Gel to Model the Effect of Solid Reactant Particle Size on the Reaction Rate”. Published in the Journal of Chemical Education. DOI: <https://doi.org/10.1021/acs.jchemed.4c00594>
4. Rany Im, Tsutomu Iwayama and Masashi Osa. “Assessing the Science Process Skills of Chemistry High School Teachers: A Case Study in Cambodia”. Published in the Universal Journal of Educational Research. DOI: <https://doi.org/10.17613/z0c2-8v50>

# 可 知 穂 高

(学籍：静岡大学)

## ○研究テーマ

進路多様校における「余暇」に着目したライフキャリア探究学習プログラムの開発と評価

## ○研究ポイント

これからの情報社会を生きる進路多様校の高校生がよりよい人生を歩んでいくために必要な能力や態度を検討し、それを育成するためのライフキャリア教育学習プログラムの開発と実践を行う。特に、情報技術の発達から今後増加すると考えられる「余暇」という生活場面に着目し、余暇をどのように過ごすかという点について考える実践研究を行い、高校生の生涯を通じた余暇生活の充実を目指す。

## ○キーワード

進路多様校, ライフキャリア教育, 余暇, 情報社会

## 1 博士論文の計画

まずこれからの情報社会を踏まえたキャリア教育を検討するにあたって、特に着目する必要がある人生上の生活場面を明らかにするために、情報技術に対し専門性を有すると考えられる情報分野の研究者を対象に調査を行い、情報技術によってこれからの社会がどのように変化すると考えられるかの示唆を得る。

続いて、進路多様校の高校生がもつこれからの社会、及び「余暇」に対するイメージなど、進路多様校の高校生の実態調査を行う。その後、これからの社会変化に関する示唆と進路多様校の実態とを照らし合わせながら、これからの情報社会を生きることを踏まえた時の進路多様校の高校生がもつ教育的課題と育成したい能力や態度を検討する。

最後に、こうした課題を解決する方法、及び学習プログラムを開発して、学習を行う場面の検討と、進路多様校での実践を行うことで、その効果を検証していく。研究の進捗に応じて、博士論文の執筆を進めていく。

## 2 本年度の研究活動

- 可知穂高・塩田真吾 (2024) 「高校生を対象とした余暇のイメージに関する実態の調査・分析—生涯における余暇の充実を目指したライフキャリア教材の開発に向けて—」『余暇ツーリズム学会誌』第 11 号, 余暇ツーリズム学会, pp.35-46.
- 可知穂高 (2024) 「進路多様校を対象とした総合的な探究の時間におけるライフキャリア学習プログラムの開発と評価-20 年後の社会における人生役割, 及びリスクの変化を意識して-」『日本基礎教育学会紀要』29 巻, 日本基礎教育学会, pp.21-29.
- 可知穂高・塩田真吾 (2024) 「20 年後の情報社会を見据えたキャリア教育の検討 - 「活動時間の増減」と「能力の重要度の変化」の調査を通して - 」, CIEC 会誌編集委員会編集『Computer & Education』57 巻 (研究ノート), コンピュータ利用教育学会, pp.66-70.
- 可知穂高・塩田真吾 (2025) 「高校生の余暇に対する『認識の拡張』と『主体的態度の育成』を目的とした総合的な探究の時間におけるキャリア教育プログラムの開発と評価—目的から余暇を分解・再設計する活動を通して—」『余暇ツーリズム学会誌』第 12 号, 余暇ツーリズム学会 (掲載決定).

# 高宮佳祐

(学籍：静岡大学)

## ○研究テーマ

ウォーキングとサッカーの良さを融合した授業に関する研究

## ○研究ポイント

体力差や技能差といった個人差を鑑みて多くの児童生徒が自らの楽しみ方を味わえる教材開発

## ○キーワード

サッカー、ウォーキング、ウォーキングフットボール、体育、教材開発

## 1 博士論文の計画

### 第一章 本研究の目的.

保健体育科におけるサッカー教材の現状と課題を論考し、新たな教材開発の方向性を示す。

### 第二章 体力差を踏まえたウォーキングフットボール教材が及ぼす影響について.

「サッカー」および「ウォーキングフットボール (WF)」ルールで行ったゲームが、体力差のある生徒のプレー参画に及ぼす影響について検討した。

### 第三章 「ウォーキング」を取り入れたサッカー単元が技能およびプレーに及ぼす影響.

ウォーキングを取り入れたサッカー単元を実施し、前後における技能の向上、ゲーム中の生理学的応答およびプレーに及ぼす影響について大学生を対象に検討する。

### 第四章 「ウォーキング」を取り入れた単元から得られた楽しさの要因について.

大学生を対象としたウォーキングを取り入れたサッカー単元における記述データより、単元で享受した楽しさを抽出し、その変化を明らかにする。

### 第五章 中学生における実践とまとめ

これまでの研究から単元を作成し、中学生を対象とした実践を行い、学習者の学習機会を調査し、本研究のまとめとする

## 2 本年度の研究活動

### 【口頭発表】

高宮佳祐, 平嶋裕輔, 山口理生, 杉山康司「教材化に向けたウォーキングフットボールにおける一人当たりのコートサイズが運動強度、移動速度およびプレーに及ぼす影響」日本フットボール学会 (愛知)

# 小林 みどり

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

保育者の状況的で瞬時的な判断と支援 —保育者が「モノを動かす」行為に着目して—

## ○研究ポイント

本研究では、保育者の瞬時的・状況的な「モノを動かす」行為に着目する。保育者が「モノを動かす」ことの意味や意図を捉え、保育における子ども理解と保育展開の構造化を目指す。

## ○キーワード

「モノを動かす」行為、環境構成、間接的な援助、保育者、子ども理解、

## 1 博士論文の計画

本研究が対象とするのは、保育展開過程における環境の再構成としての保育者が「モノを動かす」行為である。瞬時的・状況的な「モノを動かす」行為を行っていくことで、保育者は、環境の再構成をしていると考える。瞬時的・状況的な「モノを動かす」行為を構造化することにより、環境構成の可視化、理論化につながると考える。保育者が「モノを動かす」際に、どのように子どもの思いを捉え（教育環境学）、遊びの展開を予想して行なっているのかを明らかにする（教科学）ことで、保育展開の方法や保育者の役割を明らかにする（教科開発学）ことを目的に、保育方法の可視化・理論化による保育者の専門性向上に寄与したいと考える。

### (1) 「環境を通して行う保育」概念の系譜と意義の再考と間接的な援助としての環境構成の定義

「環境を通して行う保育」の概念が、どのように定義、説明され、変容してきたかを先行研究から明らかにし、本研究での「間接的な援助としての環境構成」を定義する。

### (2) 保育現場や養成校で作成される指導計画にみる間接的な援助としての環境構成の分析

保育雑誌や保育現場、養成校で作成される指導計画から環境構成の記載内容を分析し、保育者や保育者養成校の学生の間接的な援助としての環境構成の捉え方や記載を困難にしている要因を明らかにする。

### (3) 保育者と子どもの関係構築における間接的な援助としての「モノを動かす」行為の分析

アクション・リサーチ的手法を用いて、保育者による間接的な援助としての環境構成の目的、内容を分析、保育実践における間接な援助としての環境構成を可視化する。

### (4) 「モノを動かす」という視点からの間接的な援助としての環境構成の構造化

間接的な援助としての環境構成の目的・内容を構造化する。

## 2 本年度の研究活動

### 【論文】

1. 小林みどり(2024) 環境構成としての保育者の支援—3歳児の遊び場面における保育者の「モノを動かす」行為に着目して—。『教育開発学論集』第13号
2. 小林みどり, 鈴木裕子(2024) 保育における環境構成概念に関する論考—状況的・瞬時的な環境構成の構造化を目指して—。『愛知教育大学研究報告』第74輯

# 山下純平

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

現代的教育課題を解決する小学校体育科のゴール型の学習プログラムの開発  
ーハンドボールの教材化とその実践を通してー

## ○研究ポイント

体育科をより社会とのつながりが実感できる教科へと発展させるために、スポーツの競技種目である「ハンドボール」を素材にして、特別活動と往還させながら小学校体育科のボール運動系の学習で子供たちが現代的教育課題を解決する力を身に付けることができるように教科開発学の視点から「教材化」することで小学校体育科におけるハンドボールの学習プログラムを再構成し、開発することである。

## ○キーワード

現代的教育課題、ハンドボール、教材化、運動有能感、学級力

## 1 博士論文の計画

私の研究は、体育科をより社会とのつながりが実感できる教科へと発展させるために、教科開発学の視点から学習プログラムを開発し、その実践の有効性を検証するものである。

私の研究の独自性は、教科開発学的なアプローチにある。具体的には、我が国の大綱的な教育指針である学習指導要領に示されている学習内容を現代の社会的文脈、学校の文脈により導き出される教育課題に基づいて解釈する「教育環境学」的アプローチによって新たな解釈の概念を検討し、再構成した体育科のボール運動系ゴール型の学習内容を示していくことで「教材化」する(教材論)。そして、学習内容の指導方法を「教育論」の体育科教育学的および「教育内容論」のコーチング学的視点から検討することで学習プログラムとして示していく。最終的にはその有効性を検証することで新たな学習プログラムの開発として位置付ける。

学位論文提出までの計画は以下のとおりである

1 年次：教科開発学への理解を深めるためにできるだけ多くの授業を受講する。セミナーⅠでその学びを踏まえた論文構想を検討し発表する。後期に試行的な授業実践を行い課題の検討をする。

2 年次：得られた実践データ基に論文を執筆する。授業改善について検討し授業実践を行う。セミナーⅡで学位論文の第1回中間発表をする。

3 年次：学位論文を執筆する。セミナーⅢで第2回中間発表をする。学位論文を提出する。

## 2 本年度の研究活動

本年度の研究活動は以下のとおりである。

- ・指導教員にご指導いただきながら論文構想について検討していった。
- ・教科開発学的視点にたつて、ハンドボールの教材化の現状と課題についての論文を執筆した(教科開発学論集第13号掲載)。
- ・多くの授業を受講して教科開発学に対する理解を深めた。
- ・愛知県内の3つの小学校で計8クラスのハンドボールの授業実践を実施した。
- ・授業実践者に対して、ハンドボールの授業に関する内容のインタビュー調査を実施した。

# 韓 帥

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

中国の高校における日本語発音練習方法の比較研究

## ○研究ポイント

中国人学習者が直面する発音の難点を中心に据え、先行研究や実証分析を通じて、日本語の母音混同、促音および長音学習の困難といった問題を明らかにし、それに基づいて現行の発音練習方法を比較分析する。

## ○キーワード

日本語発音、中国人日本語学習者、日本語学習、比較分析

## 1 博士論文の計画

音声を可視化するオーディオビジュアル法、シャドーイング法、音声認識機能を利用する発音練習という3つの方法の有効性にあり、それぞれを比較評価する。本研究では特に、母音の学習効率、促音・長音の学習効率、および学生の学習意欲の3つの側面に注目する。その結果に基づき、現行の日語発音教育に新たな知見を提供するとともに、教育現場で実践可能な具体的な提案を行うことを目指す。

論文構成：

第1章 序論

第2章 先行研究説明

第3章 研究方法紹介

第4章 データ分析方法説明

第5章 分析の結果と考察

第6章 結論と展望

## 2 本年度の研究活動

先行研究のまとめ

投稿用論文の執筆

調査する学校の場所と人数を協議して決める

# Mael Masilva Raynox

(学籍：愛知教育大学)

## ○研究テーマ

コミュニケーションストラテジーに関する考察 –インドネシア人日本語学習者の場合–

## ○研究ポイント

本論文の目的は、インドネシア人日本語学習者（初級レベル）に対するコミュニケーション・ストラテジー（CS）の教授が、コミュニケーションの成功およびスピーキング能力の向上に与える影響を明らかにすることである。また、CSの教授が日本語学習者の会話におけるCSの使用にどのような影響を及ぼすかについても検討する。

## ○キーワード

コミュニケーションストラテジー、Communication Strategy, インドネシア人日本語学習者、コミュニケーションの成功、スピーキング能力

## 1 博士論文の計画

本研究は大きく以下の4つの研究から構成する。

【研究1】CSの教授が会話におけるコミュニケーションの成功に与える影響（量的研究、統計分析）

【研究2】CSの教授がインドネシア人日本語学習者の会話におけるCSの使用に与える影響（量的研究、統計分析）

【研究3】CSの教授がインドネシア人日本語学習者の会話におけるCSの使用に与える影響(量的研究、統計分析)

【研究4】インドネシア人日本語学習者のCSの教授に対する認識（インタビュー結果の質的分析）

## 2 本年度の研究活動

- 先行研究のまとめ
- CSの使用に関するパイロットスタディ
- 指導教員と相談
- CSの教授の準備  
(教材の準備、プレテストの資料（ロールプレイ）、ポストテストの資料（ロールプレイ）など。)

# 掛本 健太

(学籍：静岡大学)

## ○研究テーマ

高等学校における道德教育の拡充に向けた公民科の授業設計に関する研究

## ○研究ポイント

学習指導要領の改訂に伴い、高等学校の学習指導要領に新たに道德教育に関する項目が加わり、高等学校における道德教育の充実化が求められるようになった。一方で、これまで高等学校における道德教育は、義務教育とは異なり、道德教育に関する授業が設置をされていないことなどを背景として、その不足が指摘されてきた。そこで本研究は、道德教育の充実化を目指して、高等学校における道德教育の課題である中核的な指導場面の不在を乗り越えるために、義務教育段階の道德教育と接続し得る公民科における単元設計及び授業実践の検討し、あり方を明らかにすることを旨とする。

## ○キーワード

道德教育、高等学校、公民科教育、他者理解、ケアの倫理

## 1 博士論文の計画

本研究は、以下の4段階で展開をする。第1に、これまでの「道德」に関する議論の整理、検討を行う。その際、「道德」的行為において重要な要素の1つであると考えられる他者を理解することに点を当て、「理性」に基づく「道德」ではない「ケアの倫理」の道德教育への導入を検討し、他者への理解に基づく道德教育の在り方を明らかにする。

第2に、第1で明らかとした「他者理解」を道德教育として高等学校に位置づけることを試みる。その際に、高等学校の道德教育の現状と課題を整理する。そのうえで、小中学校における道德性の涵養の段階を踏まえ、高等学校への道德教育の接合について検討を行い、高等学校における道德教育として取り組むべき方針を明らかとする。

第3に、第2までで明らかとした道德教育の中核となる教科として公民科を位置づけ直す。これまでの歴史的な背景をふまえて、道德教育と公民科との接合の可能性、現状や実践からの課題を明らかにし、道德教育の核としての公民科の在り方について検討を行う。

第4に、ここまでの検討を通じて明らかにしてきたことをもとに、公民科の単元とその中で実施される授業の設計及び実践、分析を通して、高等学校における道德教育の拡充の方策を明らかにする。

## 2 本年度の研究活動

### 【論文】

・掛本健太、中村美智太郎「高等学校における道德教育の実践可能性：義務教育段階における道德教育の発展としての『公共』の検討」、『静岡大学教育学部研究報告. 人文・社会・自然科学篇』、第75号、2024年、226-235頁。

### 【学会発表】

・掛本健太、中村美智太郎「高等学校の道德教育の拡充化に向けた先行実践の分析とそれを踏まえた授業開発 ー内容項目の視点からー」、日本道德教育学会 第104回大会、2024年。

# 望 月 朋 子

(学籍：静岡大学)

## ○研究テーマ

フードリテラシーの育成をめざした中学校家庭科における食生活カリキュラムの開発

## ○研究ポイント

- ・家庭科教育における食生活教育の課題を解決するために、国際的に取り組まれているフードリテラシーという概念を明確にすることを通じてその育成を図るカリキュラムを構築する。
- ・構築したカリキュラムの実践と評価をすることを目的とする。

## ○キーワード

フードリテラシー、中学校家庭科、食生活カリキュラム

## 1 博士論文の計画

### (1)博士論文の構成

- <序章> 一人ひとりが自分の食生活について「問う - 応答する」  
- これまでの中学校家庭科食生活の学びをフードリテラシーへ
- <第1章> フードリテラシーを定義する
- <第2章> 日本のフードリテラシーの実践事例に対する批判的検討
- <第3章> フードリテラシーの育成のためのカリキュラムの構築
- <第4章> 授業モデルの修正・実践の見直し
- <結章> フードリテラシーの育成をめざした中学校家庭科における食生活カリキュラム

### (2) 研究計画・方法

- ①リテラシーの考え方の歴史的・理論的發展過程を整理し、フードリテラシーとの関係性の検討を行う。
- ②フードリテラシーの定義に関する歴史的展開を整理・検討し、本研究における定義を明確にする。
- ③日本のフードリテラシーの実践事例を批判的に検討する。
- ④カリキュラムの開発、中学校での実践と評価を行っていく。

## 2 本年度の研究活動

本年度は、主に序章、第1章に関する内容について研究に取り組んだ。成果を以下に示す。

<序章>これまでの中学校家庭科教育における食生活の学びの在り方とその課題が明らかになった。その課題こそが、今後一層望まれる食生活の学びに関する大切な要素であった。このようなことから新しい食生活の学びとカリキュラムを構築する必要があると考えた。食の学びは近年、国際的にはフードリテラシーとして論じられているため、はじめにリテラシーをどのように理解するか検討し、論じた。

<第1章>国際的に語られるフードリテラシーであるが、一定の定義は現在も見つからない。そこで、フードリテラシーに関する先行研究を丁寧に読みとり、本研究におけるフードリテラシーを定義した。

研究の成果については今後、愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻教科開発学論集に投稿、日本教科教育学会で口頭発表をする予定である。

# 河村 敏文

(学籍：静岡大学)

- 研究テーマ  
技術科における材料の厚みを認識する過程に着目した思考分析
- 研究ポイント  
研究の目的は、中学校技術・家庭科技術分野（以下、技術科）の構想・設計学習において、習得が難しいとされる「材料の厚み」を学習者が認識する過程に着目し、製作の場面でどのように活用していくかを分析することである。
- キーワード  
ものづくり，設計学習，製図学習，構想図，材料の厚み

## 1 博士論文の計画

本研究では、上記の研究目的を達成するために、次の三つの研究課題を設定し、研究を進める。

一つ目は、小学校算数科の図形学習と中学校技術科の製図学習との関連について調査を行う。具体的には、①小学校算数科の図形学習と中学校技術科の製図学習に関する実態について ②小学校算数科の図形学習と中学校技術科の製図学習の基礎的製図の技能評価との関連性について ③技術科の構想図の作成における設計学習プリントの効果（材料の厚みと相貫体の認識）についての調査である。

二つ目は、技術科の製図学習に関する手描き製図と3DCADを活用した作図の効果の違いについて検証を行う。具体的には、①技術科の手描き製図による形状認識力と空間認識力を育成に関する効果について ②技術科の3DCADを活用した製図学習による形状認識力と空間認識力を育成に関する効果について ③手描きによる作図と3DCADの作図に関する学習者の思考の変容について ④設計学習プリント及び構想図を表現できない生徒の視覚認知に関する分析についての検証である。

三つ目は、試作品製作による創造的な思考を生み出す過程に関して検討を行う。具体的には、①学習者の最適解を導き出す過程に着目した思考に関する先行研究について ②構想図から試作品製作への思考の転移について ③技術科の試作品製作における最適解を導き出す過程に着目した思考分析である。

本年度は、それぞれの研究課題のデータを回収することができ、現在分析中である。来年度は、分析したデータを基に、実践方法に改善の必要の有無を検討し、再度実践を行う予定である。

## 2 本年度の研究活動

[論文]

- 1) 河村敏文・紅林秀治：技術科の試作品製作における最適化に向けた修正・改善点の分類 — 自己決定群と他者参考群の違いに着目して —，教科開発学論集第13号，pp.59-70（2024）

[発表]

- 1) 河村敏文・磯部征尊・紅林秀治：小学校算数科の図形学習と中学校技術科の製図学習との関連性の調査，第42回日本産業技術教育学会東海支部大会要旨集，pp.1-2（2024）
- 2) 河村敏文：中学校技術科の構想場面における設計学習プリントと3D-CADを併用した授業実践，日本産業技術教育学会第8回アイディアソン（2024）（他1本）



## V. 修了生一覧と

### 令和6年度修了生論文要旨

## 修了生一覧

### 愛知教育大学

修了生氏名	論文題目	修了 年度	
杉野 裕子	プログラミングを活用した図形概念形成についての研究 ー教材コンテンツ開発と授業実践を通してー	H27	課程修了
今井 隆夫	感覚英文法による言語表現の意味づけ指導の効果	H28	課程修了
原 郁水	小学生のレジリエンスを高めることを目的とした保健教育プログラムの開発	H28	課程修了
山田 丈美	言語を基盤とした教科等横断的指導による思考力と表現力の相互育成に関する研究	H30	課程修了
伊藤 佐奈美	軽度知的障害生徒における自己理解の支援に関する実証的研究	H30	課程修了
内田 智子	幼児期の運動指導が体力・運動能力向上につながる運動プログラムに関する研究	R1	課程修了
大島 光代	発達障害幼児の音韻意識及び語彙の獲得を目的とした 言語指導プログラム開発に関する研究	R1	課程修了
名倉 一美	保育における幼児の「集団所属感」アセスメントツールの開発	R2	課程修了
森 慶恵	健康情報の判断と選択に着目した健康情報リテラシー教育に関する研究	R2	課程修了
小池 嘉志	算数・数学の問題解決型授業における精緻化を促進する指導法に関する研究	R2	課程修了
マム チャンセン	カンボジアの生物教育における物理的アプローチによる教材開発 Development of Teaching Materials through Integration of Physical Approach for Biology Education in Cambodia	R2	課程修了
中川 右也	An Empirical Study of Cognitive Linguistics-Based Instruction for Effective English Phrasal Verb Acquisition (認知言語学的アプローチによる英語句動詞の指導と習得に関する実証研究)	R3	課程修了
市川 裕理	英語劇活動における協働対話がランゲージングに与える影響についての研究	R3	課程修了
長田 洋一	自閉症スペクトラム児の対人関係の向上を目的とした心理劇的アプローチの開発ー小学校の 通級指導教室における自立活動の授業実践を通してー	R3	論文博士
新鶴田 道也	中等理科教育におけるCNP抵抗器教材の開発とその学習効果の解析	R4	課程博士 R4. 3. 31単位取得退学
馬場 洸志	アメリカの高等教育機関における Community Engagement Professional に関する研究 ーサービス・ラーニングコーディネーターに焦点をあててー	R4	課程博士 R2. 3. 31単位取得退学
澤田 育子	高等学校における「響く歌声」を生み出す発声法の検討 ー「共鳴腔」と「呼吸法」の発声法の比較を通してー	R4	課程修了
加藤 智	非認知的スキルの育成に資するサービス・ラーニング型総合的な学習の時間に関する研究	R5	課程修了
中村 仁志	デューイ実験学校における歴史教育の理論と実践に関する研究 ーデューイのメリオリズムと成長論の萌芽としての適応論に着目してー	R5	課程修了
露木 隆	電気抵抗の科学的概念の形成を促す教材と指導法の開発	R5	課程修了
THY SAVRIN	Developing ICT-Based Teaching Material for Physics Education in Cambodia カンボジアにおける物理教育のためのICTを基礎とした教材開発	R5	課程修了
田中 滉至	高等学校保健科教育における健康の社会的決定要因の認識を深めるための指導に関する研究	R6	課程修了
西野 雄一郎	J. L. メリアムによるミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラムと実践	R6	課程修了

静岡大学

修了生氏名	論文題目	修了年度	
鈴木 正行	近代民衆思想史研究から教科内容開発への展開 －歴史研究を踏まえた教科開発学の構築をめざして－	H26	課程修了
松島 充	算数・数学教育における協朝敵問題解決を実現する学習に関する研究	H26	課程修了
加賀 恵子	中学校家庭科における社会資源の協働によるシティズンシップ育成に関する研究	H27	課程修了
一ノ瀬 敦幾	教師の資質能力能力向上および学校組織の活性化を図る評価システムに関する研究 －教科開発学を視野に入れた教師の資質能力と学校組織の往還－	H27	課程博士 H27. 3. 31単位取得退学
長倉 守	中学校社会科世界地誌学習の授業実践力向上に関する教科開発学的研究	H28	課程修了
日高 翼	米国ハイスクールにおける「生物学」の成立過程に関する研究 －ヒトの身体の扱いに焦点を当てて－	H28	課程修了
大矢 隆二	投動作学習プログラムの開発とその学習効果	H29	課程修了
酒井 郷平	中学生のインターネット依存傾向の予防・改善を目的とした情報モラル教育に関する実践的研究	H29	課程修了
大瀧 綾乃	日本語母語話者による英語の動詞の自他動性の習得と指導の効果検証 －英語能格動に焦点をあてて－	H30	課程修了
山田 哲也	紙製受動歩行模型教材を使用した小学校設計学習に関する研究	H30	課程博士 H30. 3. 31単位取得退学
百瀬 容美子	先天全盲児童・生徒の運動イメージ生成指導法と評価に関する研究	R2	課程修了
荒谷 航平	1821-1930年の米国ハイスクール「物理」の成立過程	R2	課程修了
田村 知子	日本語の母語発話者における英語の派生接辞の第二言語習得と明示的指導	R2	課程博士 R3. 3. 31単位取得退学
西ヶ谷 浩史	設計を中心にした授業過程の研究	R2	課程博士 R3. 3. 31単位取得退学
満下 健太	教育的意義が教員のリスク認知に及ぼす影響の研究	R3	課程修了
青木 麟太郎	ドライバ操作における手指動作の分析を基にした手先の器用の指導についての研究	R3	課程修了
箱崎 雄子	小学校英語教育における音声指導 －明瞭性の向上を目指した超分節音素の指導に関する実証的研究－	R4	課程修了
高根 信吾	バレーボールにおける学習プログラムの開発とその実践が思考・判断過程に及ぼす学習効果の研究	R4	課程修了
望月 大	災害情報を活用し豪雨災害時に安全を確保できる資質・能力を育む社会科授業の開発	R4	課程修了
古田 このみ	受動歩行模型を用いた中学校から大学を対象とした科学的探究活動の開発	R4	課程修了
谷川 ゆり	G P S 活用による児童の活動分析からみる小学校体育科教材としての鬼ごっこに関する研究	R4	課程修了
山元 薫	知的障害教育における授業力を高めるツールの開発 －授業づくり研修に活用した有効性の検討－	R4	課程修了
児玉 恵太	転移適切性処理説に基づくリーディングのためのL2語彙獲得	R5	課程修了

修了生氏名	論文題目	修了 年度	
中山 敬司	静岡県における融和運動史研究と部落史を活用した部落問題学習の教材開発 —井上良一の事例—	R5	課程修了
塩澤 友樹	学校数学における標本データに基づく統計的推論の学習上の困難点の特定とその解消に関する研究—データの変動性に着目して—	R5	課程修了
安永 太地	ユース選手を対象としたスポーツ・インテグリティ教育に関する実践的研究	R5	課程修了
二見 隆亮	体験現象と教材とした自己探求型ランニング学習の可能性	R5	課程博士 R5. 3. 31単位取得退学
下田 実	「個」を「場」に導く指導に関する研究	R5	課程博士 R5. 3. 31単位取得退学
岡村 明夢	Comparison of Factors Causing Overpassivisation of Unaccusative Verbs : In the case of Japanese learners of English 非対格動詞の過剰受動化を引き起こす要因の比較 : 日本語を母語とする英語学習者の場合	R6	課程修了
小柳津 和博	インクルーシブ保育における保育者の専門性可視化 —重症心身障害児を含む集団における子ども同士の関わり合いを促す支援—	R6	課程修了
室伏 春樹	技術科教育のものづくり学習における見通しの形成にむけた指導の研究	R6	課程修了
室 雅子	家庭科教員の保育領域における力量形成に関する研究	R6	課程修了
山内 慎也	中学校理科の考察における科学的な表現の育成を目指す実践的研究 —相互評価活動と考察記述の定型化指導を用いた学習活動を通して—	R6	課程修了
杉山 元洋	科学を学ぶために読むことの指導法	R6	課程博士 R6. 3. 31単位取得退学

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

# 学位論文要旨

## Abstract of Doctoral Dissertation

専攻：共同教科開発学専攻

氏名：田中滉至

Course : Cooperative Doctoral Course in Subject

Name : Koji TANAKA

論文題目：高等学校保健科教育における健康の社会的決定要因の認識を深めるための指導に関する研究

Title of dissertation : A Study on Interventions to Improve Understanding of Social Determinants of Health in High School Health Education.

論文要旨：

本研究は日本の保健の授業の中で健康の社会的決定要因の認識を深められるような指導方法の検討することが目的であった。そのために、研究1では、国内外のプログラムおよび実態調査を踏まえ、健康の社会的決定要因を扱う保健教育の試案を作成し、研究2では研究1で作成した試案の予備的な効果検証を行い、それらの結果を踏まえて試案の修正を実施した。最後に、研究3では修正した試案の効果を検証した。

まず、研究1-1では、国内外の社会的決定要因に関する健康教育プログラムをレビューした。その結果、プログラムの目的に健康の社会的決定要因の変容を掲げる「社会志向型」のプログラムと、スキルの改善などを目的とする「個人志向型」のプログラムに2分されることが明らかになった。しかし、日本で実施されたプログラムは個人のスキルや知識の育成を目指した「個人志向型」のプログラムのみであったため、日本において健康の社会的決定要因に関するプログラムの開発の必要性が明らかになった。

続いて、研究1-2では書籍に掲載のある学習指導案の分析を行った。その結果、健康の社会的決定要因の「個人志向型」の内容が多く提示されてはいるものの、「社会志向型」の教育内容はほとんど提示されない傾向にあった。この傾向は研究1-1と同様であった。ちなみに、諸外国の健康の社会的決定要因に関する実践研究では、ほとんどの場合で「社会志向型」の教育内容が提示されている。こうした知見から、日本の高等学校保健科においては、まずは「社会志向型」の教育内容による効果検証の必要があると考えられた。

さらに研究1-3では、高等学校の保健体育科の科目保健で用いられる教育方法を明らかにするために質問紙調査を実施した。その結果、講義型の教育方法は実施率が高い傾向にあり、生徒の情緒的側面との関連が認められた。その一方で、生徒の行動的側面との関連が認められるのはグループ活動型の教育方法であった。授業の実施率から考えるなら、用いる教育方法は講義型であることが望ましいと考えられたが、生徒の情意への影響と照らし合わせてみると、必ずしもどちらかが良いとはいえないな

った。また、生徒の情緒的な側面に対しては講義型の授業が、行動的な側面に対してはグループ型の授業の関連が強かった。そのため、実現可能性の観点から、講義型の授業方法で指導のあり方を検討する一方で、情意への影響の観点からは必ずしもそうとは言えないことを考慮する必要があることが明らかとなった。

研究 2 では「社会志向型」の教育内容を講義型の教育方法で用いる指導の効果を検証し、その結果を踏まえた試案を作成した。まず、教育方法の実現可能性を最大限に考慮して従来通りの講義型で介入をする一方で、教育内容に特色を持たせる指導の効果検証を予備的に行った。つまり、行動的側面との関連は認められない教育方法ではあるものの基本的には講義型で授業をしつつ、「社会志向型」の教育内容を扱うこととした。その結果、介入群において、各授業の振り返りの場面で健康の社会的決定要因に関する記述が増加する傾向にあったが、自己効力や結果期待に関する記述は増加しなかった。総括的評価でも統制群と介入群にほとんど違いが認められなかったため、教育内容を「社会志向型」にした場合においても授業方法を従来通りの講義型形式で固定しては、健康の社会的決定要因の認識を深める効果は期待できないと考えられた。そのため、効果の検討を行う試案は健康の社会的決定要因に影響について具体的なイメージを持ったり身近に感じたりすることをねらいとして **CROSS OPINION** を実施し、その後に「社会志向型」の教育内容を提示する試案の効果の検討を実施した。

研究 3 では、「社会志向型」の教育内容を提示する前にグループ活動型の教育方法を行った。グループ活動型の教育方法によって、「社会志向型」の教育内容を理解するうえでの手がかりを保障し、身近な存在として理解できると考えられたためである。そのため、グループ活動型の教育方法においては、**CROSS OPINION** の手法を組み込んだ。なぜなら、**CROSS OPINION** は、生徒の情緒的側面とのポジティブな関連が報告されているだけでなく、授業を受けた生徒から分かりやすかったなどの報告が成されているからである。その結果、研究 2 では介入群・統制群共に授業の前後で得点が変わらなかったものの、研究 3 では授業直後および授業後 1 週間において、健康の社会的決定要因の得点が高くなる傾向にあった。これは、「社会志向型」の教育内容を提示される前に、生徒たちがそれまでの学習内容についてお互いに理解を確認し合ったり自分の言葉で伝えたり考えたりした活動を行ったことが、健康の社会的決定要因について理解する際の手がかりとなったことが影響していると考えられる。

以上の研究から、高等学校保健科において高校生の健康の社会的決定要因に関する認識を深めるためには、**CROSS OPINION** のようなグループ活動型の教育方法に加えて、「社会志向型」の教育内容を組み合わせた指導が有効である。

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

# 学位論文要旨

## Abstract of Doctoral Dissertation

専攻： 共同教科開発学専攻 氏名： 西野 雄一郎

論文題目： J. L. メリアムによるミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラムと実践

論文要旨：

本研究は、ジュニアス・L・メリアム (Junius L. Meriam, 1872-1960) が1905年から1924年にかけて行ったミズーリ大学附属初等学校 (以下、ミズーリ学校と称する) におけるカリキュラムと実践の実態解明を目的とする。メリアムと彼の実験に関する先行研究が少ない故、彼と同校が当時の新教育運動にどのように位置付けていたのかは未だに不明瞭である。そこで本研究においては、学校教育に社会的効率 (social efficiency) を求めたメリアムの着想と、それに基づくカリキュラムと実践を明らかにすると同時に、当時の社会的効率を求める教育学者や社会学者との関係性を明らかにすることによって、メリアムの新教育の動向における位置付けについて考察した。

第1章では、産業化に伴って急激に変化したアメリカ社会において、当時の教育学者や社会学者たちがどのような社会的効率を求めたり、主張したりしたかについて述べた。キッドによって初めて使用され、バグリーやデューイによって明確化されたと言われる社会的効率という用語は、社会的効率に寄与する要素を意味することもあれば、社会的効率によって実現できる理想を意味することや、社会的効率に属する人々が参加する特定の活動を意味することもあり、その文脈により使用方法が異なるものだった。例えば、当時のアメリカ社会においては、産業化に伴う人間関係の分断、教会や家庭による教育力の低下に伴い、社会統制や社会奉仕が求められていたため、それらの実現自体が社会的効率と呼ばれたり、また、それを実現する資質や能力も社会的効率と呼ばれたりした。社会の状況にその者が問題意識をもっていなければ社会的効率は掲げられない。社会的効率を求める教育 (学) 者は、急激な産業化に対応できていないアメリカ教育界の現状があったからこそ出現したと言える。当時の多くの教育 (学) 者が急激な産業化に対応する教育を求めていた故、それらの教育 (学) 者は皆、社会的効率を求めた教育 (学) 者だったとも言える。

第2章ではまず、メリアムによるミズーリ学校における実験の基盤となる着想について明らかにした。社会的効率という用語がアメリカ教育界に広く普及する中、メリアムもまた、社会的効率を求める着想をもつに至った。メリアムは、複雑な産業社会に適応するカリキュラム作成こそ、社会的効率に寄与する取り組みと捉えていた。当時の複雑化していく産業社会における必要性和、維持され続ける伝統的カリキュラムとの間の不整合について問題視し、その改善に取り組むメリアムの実験は、社会的効率に寄与する取り組みであった。続いて、社会的効率に関する動向によるメリアムの着想への影響

について明らかにした。メリアムは、社会統制と社会奉仕の動向の影響を受け、自己統制や社会奉仕の精神的態度を涵養するカリキュラム作成の着想をもつに至ったことが明らかになった。また、デューイの社会的効率に関する定義とメリアムの社会的効率に関する着想の整合性の高さが明らかになった。さらに、メリアムとスネッデンやボビット、チャーターズとは、伝統的カリキュラムと産業社会との不適合について問題意識を抱いている点や、教育的過程において心理的側面と社会的側面の両方を位置付けている点が類似していた。メリアムが心理的側面をより重視していたことに対して、スネッデンとボビット、チャーターズは社会的側面をより重視していた点が相違していたことが明らかになった。

第3章では、ミズーリ学校におけるカリキュラム構成の原理と、メリアムの求める社会的効率との一貫性について検討した。メリアムは、「カリキュラム構成の五つの原理」を提示し、それに基づいてカリキュラムの内容を構成した。その原理とメリアムの求める社会的効率の一貫性を検討した結果、それぞれの原理がメリアムの求める社会的効率の要素を涵養し得る内容だった。そもそも、カリキュラム構成全体が当時の産業社会に見合った合理的カリキュラム構成であるため、メリアムの求める社会的効率に適っていると言えるが、各原理についての説明を読み解くことにより、メリアムの求めた様々な社会的効率の要素の獲得が目指されていたことが明らかとなった。

第4章では、ミズーリ学校のカリキュラムを構成する4領域である「観察」、「遊び」、「物語」、「手仕事」について明らかにした。それぞれの理論や意義については『子どもの生活とカリキュラム』に詳述されているため、その著書に基づいて論述した。一方、実践事例については、その著書に加えて、ミズーリ学校の教師が記した実践事例とメリアムペーパーズに収録されている実践に関する記事も併せて使用した。本章において、メリアムの実践が、子どもを中心としたものでありながら、彼の求める社会的効率に寄与するものであり、且つ従来の教科内容をなおざりにしなかったものであることが明らかになった。

本研究において、メリアムの功績を二つ見出すことができた。一つ目は、社会的効率を求めるカリキュラムを作成しただけでなく、実践まで行なったことである。もう一つは、デューイの社会的効率の定義に、結果的に忠実な実践を行なったことである。デューイに影響を受けた学校は多々あるとしても、デューイが進展させた社会的効率の定義に基づく実践を行なった教育学者や実験学校は見当たらない。よってメリアムを、教育において社会的効率を求めてカリキュラムを作成し、実践を行なった教育学者として、アメリカ教育における社会的効率を求める動向に位置付けることができるのである。

# 博士論文執筆体験談

(西野 雄一郎 学籍：愛知教育大学)

## 1 博士論文のテーマ

博士論文のタイトルは「J.L.メリアムによるミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラムと実践」であり、メリアムがどのような歴史的背景のもと、どのような問題意識や理論的基盤をもってカリキュラム作成と実践を行ったのかを明らかにしようと試みました。特に、彼が社会的効率(social efficiency)という用語を積極的に用いたことに着目し、これまで十分に活用されていなかったアーカイブ資料を基に再検討を行った点が特徴です。メリアムの実験を解明することにより、新教育の未解明な側面の一端を明らかにすることも目指しました。

## 2 研究の経過

メリアムの著書を翻訳した後、先行研究で論じられている点とそうでない点を整理し、2020年度(2021年2月)の「教科開発学セミナーI」で、それらから見えてきた作業課題について発表しました。2021年度には、アメリカ教育学会の機関誌『アメリカ教育研究』に、ミズーリ大学附属初等学校のカリキュラムにおける領域「物語」についての論文が掲載されました。翌年には、メリアムへのデューイの影響に関する論文を執筆し、2022年度・2023年度と2年連続でデューイ学会へ投稿しましたが、いずれも採択には至りませんでした。一方で、並行して執筆した「観察」に関する論文は『教科開発学論集』第11号に掲載され、学位論文提出の要件を満たすことができました。

学位論文提出に向け、本研究に関する論文を6本執筆しましたが、いざ学位論文を書く段階では、既存の論文だけでは不十分であり、第1章から第3章にかけては大部分を新たに執筆する必要がありました。長編論文の執筆経験がなかったことや、自身の計画性の欠如もあり、学位論文の執筆は非常に困難を極めました。それでも、主指導教員である中野真志先生のご丁寧且つ一貫したご指導のおかげで、無事に提出に至ることができました。

## 3 謝辞

私一人の力では学位論文を書き上げるどころか、そのスタート地点に立つことさえできなかったと思います。研究者として未熟な私に、適切かつ丁寧なご指導を賜りました主指導教員・中野真志先生に、心より感謝申し上げます。中野先生のご指導のもとで学位論文を提出できたことを、今後も忘れることなく、研究に真摯に取り組んでまいります。

また、副指導教員および主査の先生方におかれましては、拙稿をご精読いただき、温かいご助言とご指導を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

このたび博士の学位を頂戴し、ようやく研究者としての出発点に立てたと実感しております。今後も研鑽を重ね、より一層精進してまいりますので、引き続きのご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

# 学位論文要旨

## Summary of doctoral dissertation

Course : Cooperative Doctoral Course in Subject Development

Name : Okamura Hiromu

Title of dissertation : Comparison of Factors Causing Overpassivisation of Unaccusative Verbs:  
In the case of Japanese learners of English

Summary : The purpose of this dissertation is to reveal which factor causing overpassivisation by Japanese learners of English (JLEs) is the most influential through a series of experiments. In addition, based on the results of the experiments, the author will pose some suggestions about how to instruct the classification of English verbs and passive voice structures in Japanese foreign language education.

It has been reported that second language (L2) learners of English overpassivise unaccusative verbs. Because unaccusative verbs are a kind of intransitive verb, they must not be used as passives. However, L2 learners erroneously passivise them like “\*The accident was happned.”

A number of studies so far have argued why L2 learners, including JLEs, make such an error, and they have discussed and proposed plausible factors to account for the phenomenon. For example, some studies have supported the NP Marker Movement Hypothesis proposed by Zobl (1989), which supposes that L2 learners inappropriately associate the subject movement of unaccusatives with that of passive (Balcom, 1997; Hirakawa, 1995; Oshita, 2000). Some claimed that existence of external agents in the discourse affected the overpassivisation of unaccusatives (Ju, 2000; Sato, 2015). Others stated that the first language (L1) transfer of the morphology was considered to be the factor causing the overpassivisation (Montrul, 2000; Kondo, 2009). Moreover, Yusa (2003) suggested that the property of telicity which unaccusatives have was influential on the error. More recently, Shirahata et al. (2020) argued that animacy of the subjects influenced the overpassivisation, and also the degree of telicity of unaccusatives partially affected the error.

In this way, various plausible factors for the phenomenon have been proposed in the previous studies. However, few of them have compared these factors in the same experiment. Thus, so far, it is unclear which factor can most strongly affect the overpassivisation of unaccusatives. In order to clarify which is the most influential factor causing overpassivisation of the four factors, animacy of subject, existence of a conceptualizable agent, degree of verb telicity, or existence of a transitive counterpart for the equivalent verb in the first language, this dissertation will conduct four experiments.

In each experiment, a forced-choice task was administered to compare two factors with other untargeted factors eliminated. Experiment 1 compared two factors: the animacy of subject and the existence of a conceptualizable agent. As a result, the author found that both factors can affect JLEs' overpassivisation, but the animacy of subject is more influential on overpassivisation than the existence of a conceptualizable agent.

Experiment 2 investigated the influence of the existence of a conceptualizable agent and the degree of telicity. The result was that the existence of a conceptualizable agent was influential on the overpassivisation, but the degree of telicity hardly affected the errors.

Experiment 3 compared the animacy of subject and the existence of a transitive counterpart for the Japanese equivalent verb. As a result, the animacy of subject affected the overpassivisation whether the Japanese equivalent verb has a transitive counterpart or not. On the other hand, the existence of a transitive counterpart for the Japanese equivalent verb was influential only when the subject was an animate. From the result, it can be said that the animacy of subject more strongly influences the overpassivisation than the existence of a transitive counterpart for the Japanese equivalent verb.

Experiment 4 compared the existence of a conceptualizable agent and the existence of a transitive counterpart for the Japanese equivalent verb. The result indicated that the existence of a conceptualizable agent affected the overpassivisation while the existence of a transitive counterpart for the Japanese equivalent verb was influential only when there was a conceptualizable agent in the context. The result suggests that the existence of a conceptualizable agent is a stronger factor than the existence of a transitive counterpart for the Japanese equivalent verb.

From the results of the four experiments, the author concluded that the animacy of subject is the most influential factor of the four, the existence of a conceptualizable agent is the second, the existence of a transitive counterpart for the Japanese equivalent verb is the third, but the degree of telicity has little influence on the JLEs' overpassivisation. However, the results of Experiment 3 and Experiment 4 also showed the possibility that the rate of overpassivisation would be different depending on variations of translation into Japanese. Thus, further studies will have to investigate how JLEs translate unaccusatives into Japanese.

Based on the results, the author posed some suggestions about how to instruct the classification of English verbs and passive voice structures in Japanese foreign language. He discussed that English teachers should instruct the classification of English verbs and passive constructions by associating the factors that can cause overpassivisation.

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

# 学位論文要旨

## Summary of doctoral dissertation

専攻： 共同教科開発学専攻                      氏名： 小柳津 和博  
Course： Subject Development                      Name： Kazuhiro OYAIZU

論文題目：インクルーシブ保育における保育者の専門性可視化

—重症心身障害児を含む集団における子ども同士の関わり合いを促す支援—

Title of dissertation : Visualization of Childcare Professionals' Expertise in Inclusive  
Childcare

—Support for encouraging children to interact with each other in  
groups that include children with severe Motor and Intellectual  
disabilities—

論文要旨：

近年、障害のある・なしにかかわらず、子どもたちが共に保育の場で生活することの重要性が叫ばれている。そのような中、我が国のインクルーシブ保育の在り方については現場の保育者の力量に任せられている現状があり、インクルーシブ保育における保育者に必要な専門性の不明確さが社会的な課題となっている。真のインクルーシブ保育を目指す上で、多様な子どもたちが共に育つために必要な保育者の専門性を可視化することが求められている。

本研究ではインクルーシブ保育を、全ての子どもたちが包摂され、多様な子どもたち一人ひとりの豊かな生活が尊重された共に育ち合う保育、と定義する。特にこれまでインクルーシブ保育の対象にされにくかった重症心身障害児に着目し、彼らを含む集団の保育として子ども同士が関わり合う上で必要な保育者の専門性を可視化することを主たる目的とした。

第2章から第5章にかけて、インクルーシブ保育における保育者の専門性として概念の抽出を試みている。第2章研究1では、重症心身障害児を含む集団の保育実践において、子ども同士の関わり合いを促した事例を取り上げた。保育者の語り等を踏まえて質的分析を行い、インクルーシブ保育における保育者の専門性について概念の抽出を行った。その結果、予見的・即時的・共感的・未来的として4つの創造力が保育者の専門性にあることが示唆された。第3章研究2では、前章で抽出した創造力について、インクルーシブ保育を実践する保育者の具体的様相について場面想定法を用いたアンケート調査を行った。研究1と同様の質的分析方法を用いて、インクルーシブ保育における保育者の専門性として

さらなる概念の抽出を進めたところ、子どもの運動発達・姿勢に着眼する保育者の姿があることが見出され、重症心身障害児を含む集団特有の専門性があることが示唆された。第4章研究3では、研究2の調査内容を活用して、異なる機能を持つ3種類の施設へと対象を広げた調査を行った。計量的分析手法を用いて重症心身障害児を含む集団の保育における特異性を浮かび上がらせることを試みた結果、子どもを主語において保育を創造すること、運動発達として姿勢に着目することなどの特徴を見出すことができた。第5章研究4では、障害児の保育を担当する保育者を対象に、先行研究を基にした調査項目から自己評価を行い、得点から保育者の強みを抽出した。

本論の中核となる第6章では、インクルーシブ保育自己評価項目の構築、そこから精度を高めた自己評価表の作成、自己評価表の活用、の3つから論を展開した。自己評価項目の構築では、重症心身障害児を含む集団におけるインクルーシブ保育の保育者の専門性について研究1、4の成果を用いて50項目の自己評価項目を構築したプロセスを示した。2つ目の自己評価表の作成では、大規模調査(280名を対象)を基に自己評価項目からさらに精度を高めた内容を抽出し、研究2の結果と合わせて自己評価表を作成したプロセスを示した。3つ目の自己評価項目の活用では、自己評価表を用いて保育を実践した保育者の自己評価の変化と、自己評価表を意識して見えた保育での実践事例について調査を行い、自己評価表の活用可能性について研究3、4で抽出した概念を踏まえて考察した。

本研究の成果として、重症心身障害児を含む全ての子どもたちが包摂され、多様な子どもたち一人ひとりの豊かな生活が尊重された育ち合う保育を実践するための保育者の専門性を可視化する試みを通して、14項目からなる自己評価表を構築することができた。自己評価表の構築は保育者と子どもの2者に効果があったことが示唆された。保育者への効果として、1点目は保育者が自分自身の保育者としての力量を把握できるような指標を得ることにつながったことと、2点目は保育者にとって自身のキャリア形成につながる道程を得ることにつながったこと、3点目は現場で保育者が実際に行っている保育を肯定できたことがあった。子どもへの効果として、子どもたち一人ひとりが地域で尊重された保育を受けることができる可能性が高まることがあった。これらのことから、重症心身障害児を含む集団における子ども同士の関わり合いを促す保育者の専門性可視化を目指した取り組みは、子どもと保育者の全ての人が含まれ、多様な人一人ひとりの豊かな生活が尊重された共に育ち合うことにつながると考えた。

研究の限界として、構築したインクルーシブ保育自己評価表の妥当性について検討が十分ではないこと、重症心身障害児に着目すること自体が本来全ての子どもを対象とするインクルーシブ保育と離れることにつながる可能性も否定できないこと、などがある。これらの課題を一つひとつ解消することが真のインクルーシブ保育の充実につながると考えた。

(1964字)

# 博士論文執筆体験談

(氏名：小柳津 和博 学籍：静岡大学)

## 1 研究テーマの設定

博士課程入学前よりインクルーシブ保育に関心をもって研究を進めてきました。多様な子どもたちが共に育ち合うために必要な保育者の専門性を明らかにしたいと考えています。インクルーシブ保育の現場において、子ども同士の関わり合いを促すことに長けた保育者が存在します。そのような保育者は具体的にどのような点で巧みといえるのかを明らかにする取組を続けています。博士論文では、これまでインクルーシブ保育の対象にされにくかった重症心身障害児に着目し、彼らを含む集団での子ども同士の関わり合いを促す保育者の専門性を可視化することを主たる目的として研究テーマを設定しました。

## 2 研究過程

重症心身障害児を含む集団における子ども同士の関わり合いを促す保育者の専門性を明らかにするために、概念の抽出について複数の方法で試みました。専門性を可視化する中で明らかになってきた視点を、一つにまとめる過程において特に苦心しました。本研究の成果を通じて、これからインクルーシブ保育の専門性を高めていこうとする保育者にとって、専門性向上の道しるべとなるような指標を社会に提案したいと考え、研究を進めました。研究を進める中ではたくさんの保育所、保育者の先生方にご協力いただき、現場の保育者の視点から多くのご示唆をいただきました。研究を通して、インクルーシブ保育の現場で活用しうる「インクルーシブ保育自己評価表」を構築できたことが、本研究の最大の成果と考えております。ただ、インクルーシブ保育自己評価表については、妥当性が十分に検討できておりません。引き続き研究を進めているところです。

## 3 今後の抱負と謝辞

博士論文の執筆にあたり、多くの先生方からご教授をいただきました。特に指導教員の香野先生からは、私の研究を博士論文として一つにまとめるための工夫について、たくさんのご示唆を賜りました。職員の皆様には、院生生活を通して多方面からご支援をいただきました。心より感謝申し上げます。

保育者・教師を養成する大学に勤めるものとして、引き続き専門性の高い保育者・教師を育成していきます。特に、インクルーシブ保育・教育の視点から、全ての子どもたちが共に育ち合い、学び合える社会を創造していくことが私の課題です。今後も自分の研究テーマを通して社会への発信を継続し、子どもたちへよりよい保育・教育環境を提供していきたいと考えております。最後に、いつも私を支えてくれている家族に感謝の気持ちを伝えたいと思います。ありがとうございます。

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

# 学位論文要旨

## Summary of doctoral dissertation

専攻： 共同教科開発学専攻 氏名：室伏 春樹

論文題目： 技術科教育のものづくり学習における見通しの形成にむけた指導の研究

Title of dissertation :

A Study on Instruction Aimed at Shaping Prospects in Craft Learning within Technology Education

論文要旨：

本研究は中学校技術・家庭の技術分野（以降，技術科）で実施されるものづくり学習における見通しに着目し，生徒の見通しの形成を支援するための指導方法を明らかにする。

変化の激しい社会において，わが国の学校教育では社会に開かれた教育課程が重視され，様々な資質・能力の育成が求められている。その中の一つである問題発見・解決能力は，プロジェクトによる学習が有用である。なぜなら，プロジェクトによる学習では生徒が発見した問題を主体的に解決する学習活動が展開されるためである。本研究では，プロジェクトによる学習として技術科のものづくり学習に着目する。この学習では，生活や社会の中から問題を発見し，課題を解決するために「もの」をつくる。しかし，義務教育の範囲では生徒のものづくり経験が不足しているため，ものづくり学習における問題解決の知識や技能が不足する。そのため，ものづくり学習における見通しが必要であると考えた。

これまでの技術科教育では，見通しは一般名詞として扱われていた。そのため，生徒がどのような見通しを形成し，ものづくりに着手しているか検討したり，見通しの形成にむけた段階的な指導方法が提案されたりすることは無かった。そこで本研究では，見通しの形成に寄与することが想定される技術科教育の先行研究や実践を調査し，ものづくり学習における見通しを定義した。本研究における見通しは，見通しⅠと見通しⅡに分類される。見通しⅠは，どのような「もの」をつくるか見通すためのものである。見通しⅠは反復的な製作により形成されることが期待され，自身の知識や技能を踏まえて初期状態から目標状態に向かうまでのメタ認知的知識といえる。見通しⅡは，どのように「もの」をつくるか見通すためのものである。見通しⅡは作業工程の提示により形成されることが期待され，ものづくりの中で自身の状況を客観的に評価し，今後の活動にむけた調整を行うメタ認知的活動といえる。これら2つの見通しの分類で，ものづくり学習とメタ認知との関連性を示すことができた。一方で，生徒目線の問題解決過程と，見通しⅠと見通しⅡの形成に向けた具体的な指導方法を明らかにする必要性が生じた。

生徒目線の問題解決過程を明らかにするため、中学生を対象にしたロボット製作実践の経験者からインタビュー調査を行い、見通しに関する言及を質的研究法により分析し、モデルとして構築した。構築したモデルはプロジェクトマネジメントの手引に基づき「立ち上げ」「計画」「実行」「管理」「終結」の 5 つの段階を有する。構築したモデルの特徴は、プロジェクトの時間軸と能力的な制約を踏まえた検討要素軸の 2 軸を設定したことである。この特徴により、ものづくり学習による問題解決過程は時間経過と共に検討要素が増加するが、終結にむけて検討要素を減少させていく必要があることを簡潔に表現できる。

見通しⅠを形成する課題として、反復的な製作を技術科の全ての指導内容で扱うことが困難であった。そこで、見通しⅠの形成にむけて構築したものづくり学習の問題解決過程モデルを踏まえた 3 年間の技術科ものづくり学習カリキュラムの構成原理を示した。この構成原理は、ものづくり学習の問題解決過程モデルでも採用したプロジェクトマネジメントの手引に基づいている。1 年時は個人によるものづくり、2 年時は集団によるものづくりを教員主導で行い、3 年時は生徒自らがプロジェクトとして企画、運用を目指す。また、この構成原理の実装例を提示したことで、カリキュラムの構成原理が汎用的であることを示した。

見通しⅡを形成する課題として、作業工程の提示において問題となる手戻りの表現に対応しつつ、生徒にとって簡易で分かりやすい手法が必要であった。そこで、見通しⅡの形成にむけてバーンダウン・チャートを利用するワークシートを提案し、生徒にとって有用であるか検証を行った。バーンダウン・チャートは残作業量と残日数の 2 軸で構成されるグラフである。生徒は、教員が提示する作業内容と作業量をもとに、自身の作業の進捗状況を判断する。また、判断に基づき次の作業に対する意思決定を行うことができる。生徒に対してバーンダウン・チャートを提示したところ、先行研究で扱われたガントチャートよりも分かりやすく、利用の想定もしやすいものであることが明らかとなった。

これらの研究結果から、本研究はものづくり学習における見通しを定義し、その見通しの形成に必要なカリキュラムの構成原理と指導資料を新たに開発している。そのため、今後の技術教育におけるものづくり学習の実践に示唆を与える先駆的な研究である。

(1899 文字)

# 博士論文執筆体験談

(氏名：室伏 春樹、学籍：静岡大学)

## 1 研究テーマの設定

私の研究対象である中学校技術分野は、木材、金属、電気、機械、生物、情報と多岐にわたる内容を扱います。これら親学問も異なる内容をつなぐのが問題解決の視点です。技術分野では子どもが生活や社会における問題に対して、技術によって解決を図る学習を行います。これは企業の開発者や研究者の営みに通じるものです。したがって、技術分野では製品開発の過程と同様に、問題発見・課題設定、設計・計画、実行、評価といった順に進む学習過程が想定されます。しかし、このような過程は開発者や研究者のように、既に知識や技能を有している者の捉え方であり、知識や技能をこれから学ぶ子どもには適さないと考えました。そこでキーワードとなるのが「見通し」です。開発者や研究者は、これまで得てきた知見をもとに「見通し」をもって製品開発にあたります。技術分野の教員は、地域や子どもの実態を踏まえて題材を選定し、「見通し」をもって指導します。同じように、初めて技術による問題解決に挑戦する子どもに対して「見通し」を持たせることができれば、子ども自らが調整し、粘り強く取り組む学習ができると考えました。

## 2 研究過程

入学以前から、研究テーマに関わる内容としてプロジェクト・マネジメントの研究を行っていました。プロジェクトとは期日のある独自の活動のことであり、プロジェクト・マネジメントはプロジェクトを円滑に実施するための方法として日本産業標準(JIS)で規格化されています。当初は、技術分野の学習の中に規格化されたプロジェクト・マネジメントを「どのように当てはめるのか」に着目していました。しかし、博士課程の講義やゼミでのディスカッション、実践評価等を通して、規格化されたプロジェクト・マネジメントを簡素化したり、抜粋したりするのではなく、プロジェクト・マネジメントの本質を捉えようとしていったことで、「見通し」の語にたどり着くことができました。

## 3 今後の抱負と謝辞

博士論文で執筆した内容に基づき、提案した見通しⅠや見通しⅡの分類を具体的な実践内容と対応づけていきます。また、授業や学校もプロジェクトであるため、プロジェクト・マネジメントの知見を学校教育の中でも展開・活用していくための手立てを研究していきたいと考えています。

博士論文の執筆および審査では、主指導教員の紅林秀治先生をはじめ、審査委員の村越真先生、飯島康之先生、丹沢哲郎先生、村上陽子先生から多くのご意見、ご示唆をいただきました。また、所属する学会でお世話になっている鳴門教育大学の菊地章先生には博士課程における心構えや論文に関するご指導を賜りました。博士課程に関わる皆さまにも心から感謝いたします。

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

# 学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻： 共同教科開発学専攻 氏名：室 雅子

論文題目：家庭科教員の保育領域における力量形成に関する研究

論文要旨：

本研究は家庭科教員の力量形成、特に保育領域における力量形成について、家庭科教員の置かれた状況と教科特性をふまえ、保育体験実習の有効性を明らかにし、体験実習を組み込んだ教員養成課程でのプログラムを実証提案するものである。本研究で着目する「力量」とは、家庭科教員自身が指導内容を理解し、教える自信を持つことをさすものとする。

家庭科教員の力量形成において保育領域に着目する理由は3つある。1つは、教員は不断の学習つまり自己研鑽が求められるが、保育領域においては自己研鑽が難しい状況があること、2つめは家庭科教員を輩出する教員養成課程の履修には偏りがある場合が多く、食物・被服領域に比べて保育領域を得意とする教員を輩出しづらいこと、3つめは家庭科が日常生活と密接な関係にあるという教科特性において、実際に体験して理解することは重視され、中高生にも実践的・体験的な学習を長年求めているが、教員自身が体験する機会は不十分であること、である。これらの指摘は暗黙の了解として教員には知られているが表出しておらず、また個別の研究は報告されていても統合して問題点を提起されてこなかった。また教員や教員養成課程生が乳幼児接触体験をする効果について言及する研究もなかった。

ゆえに、本研究では上記の問題を、現状と課題(第1章、第2章)、教員養成課程生の体験学習実施前の力量(第4章)、日常体験による授業への効果とプログラム提案(第3章、第5章)の大きく3つの話題で述べ、保育における家庭科教員の力量形成には体験の影響が少なくないが、乳幼児接触体験者が獲得した力は模擬体験でも引き出せるという仮説を大学の教職課程での実験により検証するものとした。

第1章では、免許法の問題点であるとすでに指摘されている事項、学生の技術が不足している現状、現在の教員研修の課題を示し、さらに家庭科教員の保育領域の力量を形成する過程を発達過程としてとらえ、日常に体験機会がある場合はより発達できるが、体験機会を持っていない場合は、あらゆるシステム下で発達機会を阻害されている現社会状況を述べた。

第2章では、教育職員免許法施行規則による履修科目と実際の履修履歴にみられる領域

の学習量の偏り、および出身学科による履修領域の偏りについて、免許法上の履修単位削減前のデータ分析結果（2.1）と削減後の既存調査の文献分析および独自のシラバス分析（2.2）の比較から、昔も今も偏りは是正されていないことを明らかにした。

第1, 2章の結果から、問題の所在は明らかであるが、現状の制約下でできる改善を考案する必要がある。そこで、家庭科教員が子育てを体験すると保育領域を得意と回答する傾向から、第3章では子育てを経験した家庭科教員にどのような心的または授業改善的な変容が生じるのかを半構造化インタビューの実施と分析から述べた。結果、事例（エピソード）の獲得や知識の実態確認だけでなく、指導内容に対する視点の転換や、指導意義への考え方の変化、批判的思考が発現し指導内容に変化が起こることが明らかとなった。本章の結果から、このような変容が教員養成課程における模擬体験にて起こすことができれば、力量向上につながると考え、模擬体験実習を含みより効果的に実施するプログラムを考案し、効果を検証した。

第4章では、効果検証の前提として、教員養成課程生の実習実施前の力量を調査し明らかにした。その結果、教える自信がない項目には未体験の内容が多い傾向や、理解に関する理論と照合すると、自信がない場合というのは理論的に「理解」に到達していないこと、「理解」に到達していると考えられる者は日頃に乳幼児体験があることが明らかとなった。

第5章では、第3・4章をふまえ、実際に教員になる直前の学生に体験実習を実施し、その効果を質問紙調査の結果と記述式課題のテキスト分析により明らかにした。少人数かつ教員予定者による実験1では、事前の保育領域や子どもに対する不安が減少し、教科書記載知識の確認よりも、子どもという人間自体の持つ力への気づき（養育者視点）や、教員としての指導、またはキャリア教育の視点が起こっており、模擬体験でも子育てで得られる転換が起こる可能性を示した（5.1）。実験2では実際に教職課程のカリキュラムの中で実施できるよう参加人数を1クラス（20人程度）にし、事前及び事後学習も意図的に組み込み、事前・事後学習と実習の効果を検証した（5.2）。結果、実習の実施は、授業・指導に重要だと言われる「教科（内容）に好感を持つ」こと、つまり子どもに好感を持たせる傾向がみられた。自信が持てるようになったという回答も事前2割弱が事後9割以上となった。さらに事前学習は、学習指導要領を読み、自己理解度のメタ認知を起こさせた場合と、高校教科書を読ませた場合では、実習時の観察視点が異なることがわかり、両方必要であることがわかった。事後は保育教諭との対話を設けたことにより、取得知識の専門性を高め、卒業後には、授業実施に役立つだけでなく本人の人生設計にも影響を及ぼしていた。

以上より、家庭科教員の自己研鑽が難しい現状、履修の偏りを是正する問題は社会的な課題であり、すぐには解決が難しいが、提案プログラムの実施で教員養成課程において模擬体験実習を行うことにより、保育領域の指導に自信を高めさせ、子どもをみる視点や指導視点の転換を期待できるといった力量向上の可能性が明らかにできた。

# 博士論文執筆体験談

(氏名：室 雅子， 学籍：静岡大学)

## 1 研究テーマの設定

入学当初は、卒論・修論の頃から関心があった家庭科の好き嫌いと日常生活の関連について、さらに深めようと思っていました。しかし、セミナーⅠ・Ⅱにて、そのテーマは生涯かけて研究するテーマだとご指摘をいただき、指導教員の先生と相談して、対象は家庭科教員養成に、内容も最も課題があると感じていた保育に限定し、博論として書き上げられる範囲にしていきました。

## 2 研究過程

別大学の博士課程を単位取得退学してから15年近く経っており、入学時には学位論文の書き方がわからなくなっていました。紀要や学術誌などの短い論文は書けるのですが、博論の書き方がわからないのです。既存の博論を多数見ましたが、見れば見るほど「自分の展開にふさわしい既存理論をどのように選定し用いたらよいか」がわからなくなって方向性が定まらず休学もしました。しかし、休学中も博論のデータとなる実験は継続し、科研も取り研究結果を紀要などに投稿していたことが、後に功を奏しました。

復学し、恥を忍んで上記の疑問を指導教員の先生に尋ねてみたところ、別に既存理論は無理に入れなくてもいい、これまで積み重ねたデータをこのような論展開で組み立てて書けるよ、とアドバイスをいただき、目の前の霧が晴れた思いでした。資格論文は、家庭科教育や家政系学会誌ではなく教育系学会誌に投稿したことで、査読で「家庭科教育を知らない人が読んでもわかる記述を」という指摘をいただき、後に各教科や専門が混在する本研究科でもわかってもらえる文章・用語・説明という大切な視点を頂きました。

学会誌掲載後からセミナーⅢまでの4か月、執筆が思うように進みませんでした。セミナーⅢで家政系の学会では質問されないような暗黙の了解の視点を聞かれ、ここで家庭科の特異性に気づかされました。また「この研究、意味ある？」と問われた（ように思えた）意見で、私の研究の意義や家庭科教員の置かれた状況、社会背景と体験との関連が、専門外の人にもわかるよう情報提供しないと必要性さえ伝わらないんだ、と気づかされ、その後は奮起して、質問されそうな事項を想像しながら本文に丁寧に書き込み、どんどん書き進められるようになりました。ちなみに、あれほど心配していた理論の扱いについては、執筆過程で自分の論の後ろ支えに用いたい理論が自然に生じ、こういうことか、とわかりました。

## 3 謝辞

まずは、授業などすべてにおいてご指導いただいた先生方に御礼申し上げます。家政系学部・修士出身の私には、教育学系の授業はどれも大変新鮮で、論文構想や執筆のみならず勤務先の大学の授業にも大いに役立ち、明らかに視野や関心が広がりました。主指導教員の村山先生には、いつも私の考えを的確にくみ取っていただき、明確かつ方向性のゆるがないご指導をいただいたことが私の安心感と原動力となりました。副指導教員の村越先生、石川先生には、研究の不足点や間違い、気づかなかった視点のご指摘をいただき、論文を未熟ながらもより盤石なものにさせていただきました。審査委員の先生方にも今後の研究に必須の視点をご指摘いただきました。心より感謝申し上げます。これまでの学びを生かし、今後も家庭科教員の育成に関わりながら家庭科や家庭科教員の力量形成に役立つ研究をしていきたいと思っています。

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

# 学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻：共同教科開発学専攻 氏名：山内 慎也

論文題目：中学校理科の考察における科学的な表現の育成を目指す実践的研究  
—相互評価活動と考察記述の定型化指導を用いた学習活動を通して—

論文要旨：

本研究の目的は、相互評価活動と考察記述の定型化指導を取り入れた授業をデザインし、実践することにより、学習者の考察に関する意識と科学的な表現の育成に与える効果を検討することである。この目的を達成するために、授業で行われる観察・実験の結果を基に記述された考察に対して、相互評価活動と考察記述の定型化指導を取り入れた授業を実践し、学習者の考察に関する意識と科学的な表現の育成に与える効果を、質問紙調査や調査問題、学習者の考察記述から分析を行った。

序章では、国内外での調査と先行研究をレビューし、科学的な表現を育成する研究の必要性について明らかにした。そして、理科教育における考察について、科学的な表現を育成するための取組の一つとして、相互評価活動と考察記述の定型化指導を取り入れることに着目した理由を、先行研究における成果と課題から整理した。

第1章では、相互評価活動を取り入れた授業を実施し、生徒の考察に関する意識の変化を明らかにすることを目的として実践に取り組んだ。分析の結果から、相互評価活動を取り入れることによって、生徒の考察に関する意識の変化として、分かりやすい考察の書き方を意識させたり、友達との意見交換や考察を修正する活動を含むことが授業を分かりやすくさせたりするため、肯定的に捉えられていることが明らかになった。

第2章では、考察記述の定型化指導を取り入れた授業を実施し、生徒の考察に関する意識の変化を明らかにすることを目的として実践に取り組んだ。分析の結果から、考察記述の定型化指導は、考察を書く上でのサポートとして、生徒に考察の書き方を分かるようにさせ、また、「結果（データ）」、「主張（結論）」、「根拠（理由）」を意識させるため、肯定的に捉えられていることが明らかになった。

第3章では、相互評価活動と考察記述の定型化指導の両方を組み込む学習活動（以下、「相互評価と定型化指導による学習活動」）を用いた中学校理科授業を実施し、生徒の考察に関する意識の変化を明らかにすることを目的として実践に取り組んだ。分析の結果から、相互評価と定型化指導による学習活動を実施した群は、考察記述の定型化指導を実施した群と比較して、考察の場面として、友達が書いた考察を修正するという意識を高めることに影響があることが明らかになった。

第4章では、相互評価と定型化指導による学習活動を用いた中学校理科授業を実施し、プレポスト比較に着目し、生徒の科学的な表現の育成に与える効果について明らかにすることを目的として実践に取り組んだ。分析の結果から、相互評価と定型化指導による学習活動には、結果（データ）、主張（結論）、根拠（理由）の要素を含み、科学的な表現になるように記述の改善を促す効果があることが明らかになった。

第5章では、相互評価と定型化指導による学習活動を用いた中学校理科授業を実施し、相互評価活動を実施した群、考察記述の定型化指導を実施した群、相互評価と定型化指導による学習活動を実施した群の3群の比較に着目し、学習者の科学的な表現の育成に与える効果について明らかにすることを目的として実践に取り組んだ。分析の結果から、相互評価と定型化指導による学習活動を取り入れる授業を行うことは、相互評価活動と考察記述の定型化指導のいずれか一方を取り入れる授業を行うことと比較して、科学的な表現における根拠（理由）の改善が見られたこと、その要因の一つは、相互評価と定型化指導による学習活動を取り入れる授業を行うことで、学習者は自己評価や他者評価を行う中で、グループで話し合い、探究の過程を振り返るなどの協働的な学びを通して考察の書き方が分かるようになり、さらに、教師から書き方についての指導を受けることで、考察に結果、主張、根拠を書くように意識を持ったことにあることが明らかになった。

第6章では、相互評価と定型化指導による学習活動の定型化フレームを用いる実験群と用いない統制群を設定した上で中学校理科の授業を実施し、学習者の科学的な表現の育成に与える効果について明らかにすることを目的として実践に取り組んだ。分析の結果から、定型化フレームを用いて相互評価と定型化指導による学習活動を行うことが、定型化フレームを用いないで相互評価と定型化指導による学習活動を行うことと比較して、還元に関する結果（データ）、主張（結論）、根拠（理由）の要素を含み、さらに、結果(データ)→主張(結論)→根拠(理由)の順序でつなぎ、科学的な表現になるように記述の書き直しを促したこと、その要因の一つは、考察の書き方を自分だけでなく相手への伝わりやすさを意識したことと、考察の内容と書き方、順序に関しての手段保有感の高まりとともに効力期待を高め、さらに、相手にとって伝わりやすく、適切に表現する考察を書くことができるといった結果期待を高め、学習への動機づけが促された可能性にあることが明らかになった。

第7章では、論理的に思考し、表現することを目指す取組として、相互評価と定型化指導による学習活動を各教科に取り入れる可能性について明らかにすることを目的として実践に取り組んだ。分析の結果から、学習者と教員共に相互評価と定型化指導による学習活動を各教科に取り入れることについて肯定的に捉えていることが明らかになった。

本研究により、相互評価活動と考察記述の定型化指導を取り入れた授業を実践することによる、学習者の考察に関する意識と科学的な表現の育成に与える効果に関する知見を得ることができた。

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

# 学位論文要旨

## Summary of doctoral dissertation

専攻：教育学研究科 共同教科開発学専攻 氏名：杉山元洋

Course : Cooperative Doctoral Course in Subject Development in the Graduate School of Education Name : Motohiro Sugiyama

論文題目：科学を学ぶために読むことの指導法

Title of dissertation : Read to learn instruction for Science

論文要旨：

Summary :

本研究は、従来、行われてきた国語における読解指導に相当する「読み方を学ぶこと」とは異なる、教科学習における「学ぶために読むこと」の指導に位置づけられる領域固有リテラシー(Shanahan & Shanahan, 2008)の一つとして、専門家としての科学者の読むことや科学的な文章や科学読み物の読むことに特徴的に見られるプロセスを調査検討し、そこから見出された知見に基づく、科学を「学ぶために読むこと」の授業や指導方法を、教育実践の文脈で利用、展開することが可能な形式で提案することを目的とした。細分化すると、第一に、授業や指導方法の提案による日々の教育実践への貢献、第二に、科学領域のカリキュラム開発における指導項目の提案、第三として、専門家の読むことを同領域の初心者がどのように自らの学習、発達上で利用できるのかという理論的提案の3点を目的とした。

第2章「科学固有の『学ぶために読むこと』の指導の必要性」では、なぜ従来の「読み方を学ぶこと」の指導だけでは不十分で、科学固有の読むことの指導が必要なかを明らかにするため、科学的な文章や科学読み物から科学を学ぶために読むことの指導としては、これまでに行われてきた汎用的ストラテジーの指導では限界があり、それらの限界を克服するためには、領域固有、すなわち、科学領域に固有のアプローチが必要であることを指摘した。

第3章「科学を学ぶために読むことの指導—小学校6年国語説明文の授業実践—」では、科学者の読むことや科学的文章を読むことに関する実証研究の調査から、科学領域に固有の指導項目を設定し、小学校6年生を対象に一単位時間の「科学者の読むこと」の授業を開発した。その授業を、現場実験として6年生に従来の単元指導の後に追加で実践し、従来の国語の追加授業を受けたグループとの被験者間で効果を検証した。グループ(統制群・実験群)とテスト(単元・科学読み)の対応あり、なし混在の2要因分散分析を行った所、主効果としてグループ間、テスト間で有意差があり、交互作用は有意な傾向が確認された。この結果と実験授業で観察された様子やその他の指標から、従来の国語の授業での「読み方を学ぶこと」の指導とは異なる、「学ぶために読むこと」の指導の効果が児童の授業の理解や活動への参加度合いに応じて生じていたと考えられる。本結果は、単一の付加的な授業ではなく、教科学習の中で継続した授業としてくり返し指導していくものとして、本指導法を

開発して、検証していく基礎となった。

第4章の「専門家の読むことに基づく『学ぶために読むこと』の授業の共通アウトライン」では、まず、専門家としての歴史家の読み方に関する実証研究から、歴史固有の読み方を抽出した。そして、それらの領域固有の特徴が Reisman (2012a; 2012b)で示されている「歴史家のように読む」(RLH)カリキュラムの指導原理や各授業の流れにどのように埋め込まれているかを示した。続いて、それらの特徴を汎用的なストラテジー指導の四つの限界(杉山, 2018)に対応させて整理した。これらを基に、「歴史家のように読む」(RLH)カリキュラムがどのように四つの限界を克服しているのかを考察した。その上で、「授業の共通アウトラインはどのように構成されうるか？」に答えるべく、四つの限界を克服するのに必要な構成要素を歴史領域に固有のパラメータとして捉え、他の領域固有の特徴を設定する10個のパラメータと一単位の授業の流れで構成される専門領域に共通して使用するアウトラインとして提示した。

第5章では、第4章で提案した、専門家の読むことに基づく『学ぶために読むこと』の授業の共通アウトラインを科学領域に展開するために、関連する先行研究の調査を行った。その結果、共通アウトラインに設定する10個のパラメータに適合する、科学領域に固有の読むことの特徴を特定し、一覧として作成すると共に、科学領域における具体例を提示した。これらパラメータは、一つの授業ですべて盛り込むものではなく、読み手や対象テキスト、時間数などの学習状況に応じて、指導者が単元やそれを構成する各授業を開発するときに利用可能なものである。考察では、歴史領域のアウトラインやパラメータとの相違から科学領域の学ぶために読むことの指導法の固有性を考察した。

以上より、相互教授法など汎用的なストラテジー指導の限界を克服しつつ、学年が上がるにつれて教科の細分化、時数の先細りが進んでいく科学教育の教授側の実践可能性と学習側の対象に応じた読み方の使い分けの双方の視点を反映した、科学者の読むことを基に「複数ソースのテキストを読むことに基づくアーギュメンテーション」(Litman et al., 2017)という知識構築実践(Goldman & Scardamalia, 2013)を核とする指導法を提案した。

# 博士論文執筆体験談

(氏名：杉山 元洋、学籍：静岡大学)

## 1 研究テーマの設定： 「科学を学ぶために読むことの指導法」

村山先生に担当頂くことになった時、「どうしてこの研究をしたいのか」を整理、記録するようにご指導頂きました。過去の自分の実践記録等の気づきを概念化したものでカテゴリー化して、「やりたいこと」を文章化しました（「読むことから他の技能への展開」、「問いの共有」等）。私は、国語の説明文指導やIB PYPの探究の単元（UOI）の実践における問題意識から「読んで学ぶこと」に焦点化しました。

## 2 研究過程

文献研究として、授業で紹介頂いた大学のジャーナル検索を使って、最新研究から有名な研究者や読みの理論、指導法は原初に遡り、隣接領域にも範囲を広げて探しました。自分の主張に関連して何に使えるか、わからなかった部分、読み始めと終えた日を論文コピーに書きこんでファイリングしました。

週末の活動が主であり、気づくと1か月経ってしまうこともありました。何のために何をしようとして、その日にどこまで進んだのかを簡単な活動記録として残しました。間を空けず、前回の続きからすぐに取り掛かるようになりました。研究会で他の方が、了解を頂いて打ち合わせを録音されていました。セミナーの発表を録音して、自分の理解があったのか、聞き逃したことはないか、ふり返りに活用しました。また、セミナーで重要な指摘を頂いた先生には、お約束頂き、後日、研究室にお邪魔してアドバイスを頂戴しました。

二本目の投稿は同じ雑誌で何度も書き直しましたが、そもそも雑誌の研究領域に自分の主張内容が合っているかを問われ、教科開発学論集に提出させて頂きました。初回の指摘事項はそれまでと重なりましたが、査読はただで受けられる指導だから積極的に出して、修正することが成長の糧になるとのお言葉を基に、すべてにお応えして再提出しました。ふり返ると、当初、複数の主張が入り混じって整理が必要だったのですが、折角頂戴した指摘事項に対して、該当箇所を論文の範囲から除外する傾向がありました。博論の指摘事項には、極力すべてに向き合い、お応えすることとしました。

## 3 今後の抱負と謝辞

「折り紙工学」(野島 2023;石田 2020;杉山 2016)を対象として研究、教材やワークショップ開発に取り組む予定です。最後に、先生方のご理解と忍耐に心より御礼申し上げます。  
(引用文献)

野島武敏. (2023). 折紙工学入門: 折紙--幾何学--ものづくりの架け橋. 化学同人.

杉山文子. (2016). ものづくりのための2枚貼り折り紙 (<特集> 折り紙の数理的・バイオメタックス的展開と産業への応用). 日本機械学会誌, 119(1175), 552-553.

石田祥子. (2020). 折紙工学 (1)—折紙は人の役に立つか?—. 応用数理, 30(1), 27-33.



## VI. 教科開発学研究会

# 教科開発学を創る

2024年 8/24 (土) 参加費無料 当日受付

会場：静岡大学 対面 教育学部G棟  
(会場A：教G202 会場B：教G201)  
愛知教育大学 オンライン (zoom)

[発表形式：対面 + zoom (ハイフレックス型)]

## プログラム

- 開会挨拶 (議長 中野 真志) 10:00~
- 講演 10:00~11:15 (オンライン)  
教科での「ものの見方」「考え方」の学習指導案作成  
—教職科目「情報通信技術の活用と教育方法(中等)」での実践—  
寺尾 敦 先生 (青山学院大学社会情報学部 教授)
- 研究発表 (会場A・B + zoom) 11:30~11:50  
13:00~13:20  
13:25~13:45
- 博士論文発表 14:00~15:25
- 閉会挨拶 (副議長 紅林 秀治) 15:25~

開催の趣旨：教科開発学は、教科専門・教科教育・教職専門の専門性の枠を越えて、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸問題に対応した研究を行っている。本研究会は、教科開発学の意義と役割、独自性などを確認しつつ、研究成果に関する議論を深めることを趣旨とする。

## 第15回教科開発学研究会

〈大会テーマ〉教科開発学を創る

### 1. 開催趣旨

教科開発学は、教科専門・教科教育・教職専門の専門性の枠を超えて、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸問題に対応した研究を行っている。本研究会は、教科開発学の意義と役割、独自性などを確認しつつ、研究成果に関する議論を深めることを趣旨とする。

### 2. 開催日時及び実施形態

令和6（2024）年8月24日（土）10：00～15：30

対面及びオンラインによるハイフレックス型

### 3. スケジュール

全体進行：郡司 賀透（静岡大学）

10：00 開会の挨拶（会場A）

議長 中野 真志（愛知教育大学）

10：00～11：15 講演（オンライン） 講演60分、質疑応答15分

進行：野崎 浩成（愛知教育大学）

講師：青山学院大学社会情報学部 教授 寺尾 敦 先生

テーマ：教科での「ものの見方」「考え方」の学習指導案作成

—教職科目「情報通信技術の活用と教育方法（中等）」での実践—

11：30～13：45 研究発表（会場A・B及びオンライン）

発表15分 質疑応答5分

11：30～11：50 発表1

13：00～13：20 発表2

13：25～13：45 発表3

**会場A** 座長：郡司 賀透（静岡大学）

1. 可知 穂高（静岡大学）  
未来社会の変化をふまえた進路多様校の生徒対象の  
ライフキャリア学習プログラムの開発と評価 ……P1
2. 樋口 大輔（静岡大学）  
技能学習における生徒の技能を言語化することの教育効果 ……P11
3. 室伏 春樹（静岡大学）  
中学校技術分野のものづくり学習における設計の段階に関する考察 ……P16

**会場B** 座長：野崎 浩成（愛知教育大学）

1. ○西ヶ谷 浩史（焼津市立大村中学校） 紅林 秀治（静岡大学）  
DC モータの速度制御を題材とした授業の試み ……P21
2. ○青木 麟太郎（福山平成大学） 紅林 秀治（静岡大学）  
データサイエンス教育用コンテンツの活用に関する検討 ……P28

**14:00～15:10** 学位取得者による博士論文発表（会場A・オンライン）

発表 20 分 総合質疑 15 分

14:00～14:20 発表 1

14:25～14:45 発表 2

14:50～15:10 発表 3

総合質疑

1. 加藤 智  
非認知的スキルの育成に資するサービス・ラーニング型総合的な学習の時間に関する研究
2. 露木 隆  
電気抵抗の科学的概念の形成を促す教材と指導法の開発
3. 中村 仁志  
デューイ実験学校における歴史教育の理論と実践に関する研究  
ーデューイのメリオリズムと成長論の萌芽としての適応論に着目してー

**15:25** 閉会の挨拶（会場A）

副議長 紅林 秀治（静岡大学）

## VII. 教員の教育・研究活動

# 石川 恭

所属 愛知教育大学教育学部保健体育講座  
職位・学位 教授 博士（教育学）  
博士課程分野 教育環境学  
担当科目 教科開発学原論、遊び文化環境論、教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ  
研究テーマ 遊び文化論、遊びと学び、ホイジンガの思想研究



## 1. これまでの教育研究について

ヨハン・ホイジンガの遊び文化論を現代社会との関りから、人生 100 年時代をよりよく生きるために、遊びと学びの関係について研究してきました。特に、今日の遊びが、子どもに及ぼす影響について焦点を当てて取り組んできました。研究の中で一貫している視点は、社会生活における遊びの重要性です。近代化が進むにつれて、社会生活における遊びの形態や内容はどのように変化したのか、それが人々にどのような影響を与えているのかといった観点です。そして、遊びこそが学びであることを主張してきました。

教育面では、授業を通して、人生 100 年時代の自由時間の過ごし方について、遊びと文化、自由時間と生きがいといった点から講義・演習を行ってきました。自由時間が増えている中で、どのような遊びが人々の生きがいと学びにつながるかを説いています。

## 2. 博士課程における教育研究について

博士課程においては、教育環境学と教科学を統合した教科開発学の視点から研究を行っています。具体的には、遊びをキーワードに、遊びと文化の融合や、現代社会における子どもの問題を、遊びによって解決する可能性を探ること、教科への伝承遊びの導入とその効果についてなど、理論的に構築し、その後、調査などを行い立証していく予定です。

## 3. 担当講義について

### 【教科開発学原論】

教育環境学と教科学を統合した学問としての背景と目的について理解を深めます。教育環境学は、学校環境だけでなく、地域・社会・文化を含んだ幅広い視点からの教育環境の発展を目指すものです。本講義では、子どもの遊びという視点から社会化との関わりについて説明しています。その上で、教科学への応用がどのような観点で可能かについて議論を行います。また、遊びと文化を機軸にして、特に、創造系と人文社会系の教科の現状と課題を捉えなおし、新たな教科観の開発・創造への可能性について検討します。

### 【遊び文化環境論研究】

現代社会における子どもの遊びは、過去と比べてかなり変化しています。この状況は、遊びそのものの変化に留まらず、様々な影響を子どもに与えています。講義では、現代に生きる子どもの問題を遊びとの関わりから考察します。また、遊びによって身につく社会を生き抜く力が、教育とどのような関わりをもつかについて、議論を交わします。その上で、遊びがもつ可能性について、グローバルな視点から文化の創造との関わりを考えます。

## 4. 主な研究業績(博士課程関連)

- 1) 子どもの問題に対する遊びの効果を取り入れた表現運動，教科開発学論集第 1 号，愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科，2013。
- 2) 教科学を創る，第 1 集，愛知教育大学出版会，2014，分担執筆。
- 3) 教科学を創る，第 2 集，愛知教育大学出版会，2016，分担執筆。
- 4) 教科開発学を創る，第 2 集，愛知教育大学出版会，2018，分担執筆。
- 5) 教科開発学を創る，第 3 集，愛知教育大学出版会，2021，分担執筆。
- 6) 教科開発学を創る，第 5 集，愛知教育大学出版会，2024，分担執筆

## 5. 主な社会的活動

- 1) 豊明市スポーツ推進審議会会長(2024)
- 2) 安城市スポーツ協会評議員会評議員(2024)
- 3) 安城市スポーツ指導者養成講習会講師(2024)
- 4) 西尾市スポーツ指導者養成講習会講師(2024)
- 5) 知立市スポーツ指導者講習会講師(2024)
- 6) 豊田市スポーツ少年団指導者研修会講師(2025)

# 野 平 慎 二

所属 愛知教育大学教育学部学校教育講座  
職位・学位 教授 博士（教育学）  
博士課程分野 教育環境学  
担当科目 教科開発学原論、教育哲学・思想論研究、  
教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ  
研究テーマ ドイツ教育哲学・教育思想史の研究、物語論の人間形成論、  
美的人間形成論



## 1. これまでの教育研究について

ドイツ教育哲学・教育思想史を主たるフィールドとしつつ、異質な他者といかに共存できるのか／共存できる主体を形成できるのか、をテーマとして研究を進めてきました。具体的には、人間形成における「美的なもの／崇高なもの」の意義に関する教育思想史的研究、コミュニケーション倫理学（J.ハーバーマス）に依拠した教育の公共性論や道德教育論などの研究を行ってきました。

## 2. 博士課程における教育研究について

物語論の知見に依拠しながら、伝統的な人間形成論（Bildungstheorie）と現代の経験的な人間形成研究（Bildungsforschung）をどのように媒介できるのかについて探究しています。特に、アイデンティティ形成や能力形成に還元されない人間形成の様相をいかに描き出せるか、主体と環境との相互作用としての人間形成の過程において、他者や共同体、構想力はどのような機能を果たすのかについて理論的、経験的に検討しています。

## 3. 担当講義について

### 【教科開発学原論】

教育哲学・教育思想史の観点から、教科指導と教科開発の考え方、ならびに人間形成にとって環境がもつ意義について検討します。教科を介した指導や、主体と環境との相互作用としての人間形成という考え方が成立した思想史的背景について考察し、同時に学校教育を取り巻く現代的な諸条件も勘案しながら、現代における人間形成のあり方をどのように描き出すことができるのかを探ります。

### 【教育哲学・思想論研究】

主としてドイツ教育哲学・教育思想史に依拠しながら、教育に対する現代的な考え方の歴史的、社会的な制約を問い直し、教育をめぐる倫理的に公正で公共的な語り方を探究することを目指します。特に近代の二元論的な世界観とそこから導かれる子どもに対する対象操作としての教育観を批判的に捉え直した上で、他者論や物語論の知見を踏まえながら、対象操作的でも弁証法的でもない人間形成の描き方を探ります。

## 4. 主要な研究業績

- 1) 野平慎二（2007）『ハーバーマスと教育』世織書房。
- 2) Shinji Nobira/Kayo Fujii (2022): Familienkonflikt, religiöse Beratung und Transformation: Bildung als Bekehrung. In: Thorsten Fuchs/Christine Demmer/Christine Wiezorek (Hrsg.): Aufbrüche, Umbrüche, Abbrüche: Wegmarken qualitativer Bildungs- und Biographieforschung. Opladen/ Berlin/Toronto (Verlag Barbara Budrich), S.317-333.
- 3) 野平慎二（2024）「ハーバーマスの「プラグマティズム的転回」と教育学」、『近代教育フォーラム』33、48-55頁。

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 教育哲学会 理事（2016.9.～現在）機関誌編集委員会委員長（2021.9.～2023.10.）
- 2) 教育思想史学会 理事（2009.10.～現在）
- 3) 一般社団法人 NGO インドネシア教育振興会 理事（2002.4.～現在）
- 4) 愛知県教育委員会あいちの学び推進課 家庭教育企画委員会 委員長（2016.4.～現在）
- 5) 愛知県教育委員会義務教育課 道德教育推進会議 議長（2024.4～現在）

# 竹川 慎 哉

所属 愛知教育大学教育学部学校教育講座  
職位・学位 准教授 博士（教育学）  
博士課程分野 教育環境学  
担当科目 教科開発学実践論 教育方法・内容論研究  
教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ  
研究テーマ 教育方法学、教育課程論（特に、カリキュラムの政治学的研究、批判的リテラシー教育、授業づくり）



## 1. これまでの教育研究について

国内外の授業実践、理論を対象にしながら、学習者が自己と他者、社会との関係を（再）構築していく学びを保障するための授業づくりについて研究しています。特にアメリカ、オーストラリア、カナダで実践されている批判的リテラシー教育に注目しています。批判的＝異なる見方、別の見方を探り出す教授＝学習をどう創り出すかに関心があります。

## 2. 博士課程における教育研究について

教科内容研究、および教材・発問づくりへのポリティカルな視点の可能性と課題を検討しています。対話論、身体論、政治哲学と教科内容論、教材論、指導論との接点を探りつつ、公正、平等、多様性、ポリティクスなどをキーワードに、授業づくりの現状と課題を考えていきたいと思えます。

## 3. 担当講義について

### 【教科開発学実践論】

本科目では、各受講者のこれまでの研究を教科開発学の視点から再構成した発表と受講者・教員によるディスカッションを通して、教育事象を理論的検討課題として構想する方法論等を学ぶ。私の専門である教育方法学、教育課程論の観点から、教育実践の理論的研究と教育学理論の実践的研究の往還を提示していきます。

### 【教育方法・内容論研究】

教育実践におけるマクロとミクロのポリティクスを捉える理論枠組みを理解していきます。いわゆる「カリキュラム政治学」と呼ばれる研究群およびそれらの思想的基盤を形成している哲学、言語学、社会学の諸理論を取り上げ、検討します。その上で、授業における政治性の編み直し＝公正・平等な授業構造について、実践記録などをもとに検討を進めていきます。

## 4. 主要な研究業績

- 1) 竹川慎哉・豊田ひさき編著（2024）『子どもがつながる、学びが深まる「発問」－「個別最適化時代」の教師の問い』学事出版。
- 2) 竹川慎哉（2023）『『教科横断』のポリティクス』愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編『教科開発学を創る 第4集』愛知教育大学出版会、pp. 8-26。
- 3) Yuya Takeda & Shinya Takekawa (2021). Critical Literacy in Japan: Reclaiming Subjectivity in the Critical. In Pandya, J. Z., Mora, R. A., Alford, J., Golden, N. A. & de Roock, R. S. (Eds.). *The Critical Literacies Handbook*. Routledge.
- 4) 木村裕・竹川慎哉編著（2019）『子どもの幸せを実現する学力と学校』学事出版。
- 5) 竹川慎哉（2019）「授業研究と教師の力量形成」、子安潤編『教科と総合の教育方法・技術』、学文社。
- 6) 竹川慎哉（2010）『批判的リテラシーの教育－オーストラリア・アメリカにおける現実と課題－』明石書店。

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 2023- 日本カリキュラム学会 理事・事務局長
- 2) 2020-2023 愛知県総合教育センター「新学習指導要領を踏まえた学習評価の在り方に関する研究」研究顧問
- 3) 2023- 愛知県総合教育センター「『主体的・対話的で深い学び』を実現するための探究的な授業づくりに関する研究」研究顧問 など

# 石田 靖彦



所属 愛知教育大学教育学部学校教育講座  
職位・学位 教授 博士（心理学）  
博士課程分野 教育環境学分野  
担当科目 教育評価実証方法論，学校適応論研究，教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ  
研究テーマ 児童生徒の学校への適応過程，学級内の人間関係が児童生徒に及ぼす影響

## 1. これまでの教育研究について

中学校新入生や大学新入生の友人関係の親密化や学校への適応過程について研究してきました。児童生徒間関係，学校適応，社会性の育成などに興味があります。

## 2. 博士課程における教育研究について

本博士課程では教育評価実証方法論，学校適応論研究ほかを担当しています。専門分野は，教育・社会心理学ですので，特定の教科に直接があるわけではありませんが，皆さんの研究を聞かせていただきながら，教科開発学にどのような貢献ができるかを探っていきたいと思っています。

## 3. 担当講義について

### 【教育評価実証方法論（分担）】

この授業のわたしの担当部分では，受講生の研究を紹介してもらい，それに基づいてデータの収集法，相関的研究と実験的研究法，尺度の信頼性と妥当性などについて考えます。

### 【学校適応論研究】

学校への適応について，専門書や研究論文を購読し，受講生の研究や教育への応用などについて考えます。

## 4. 主要な研究業績（2021.4 ～）

- 1) 知的障害特別支援学校の養護教諭が職務上抱える困難の内容に関する研究，学校心理学研究，24，2025年（共著）
- 2) 児童生徒の「強み」に着目した学級集団理解 教職キャリアセンター紀要，10，2025年
- 3) 子どもの友人関係・仲間集団 弓削洋子・越 良子（編著）学級経営の心理学：子どもと教師がともに成長するために（pp. 31-44.）ナカニシヤ出版 2024年
- 4) 友人の学習意欲と授業での取り組みが生徒の学習意欲と授業での取り組みに及ぼす影響—友人に対する感情と学習コンピテンスの調整効果の検討— 愛知教育大学研究報告（教育科学編），73，1-19. 2024年
- 5) 教師の学級指導行動と児童の自己成長感との関連—基本的心理欲求の充足と変化に着目した検討— 教科開発学を創る—第5集— pp. 30-45. 2024年
- 6) 自己肯定感と失敗観，失敗に対する対処行動との関連 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要，13，. 1-8. 2023年
- 7) 知的障害特別支援学校の養護教諭が職務上抱える困難の原因に関する研究 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要，13，34-41. 2023年（共著）
- 8) 中学1年生の定期テストが学業コンピテンスと学業動機づけに及ぼす影響—目標点との比較と平均点との比較— 愛知教育大学研究報告（教育科学編），72，26-33. 2023年
- 9) 養護教諭が職務上抱える困難に関する文献検討 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要，7，183-190. 2022年（共著）
- 10) 家族機能の認知が内在化・外在化問題に及ぼす影響—許し傾向性を媒介変数として 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要，7，199-205. 2022年（共著）
- 11) 児童の授業での取り組みと友人の授業での取り組みとの関連—友人に対する感情と児童の学習コンピテンスの違いに着目した検討— 愛知教育大学研究報告（教育科学編），70，68-75. 2021年（共著）

## 5. 主要な社会活動業績（2021 ～）

- 1) 日本学校心理士会愛知支部支部長（2011-現在），中部甲信越地区幹事（2011-2023）
- 2) 愛知県教育職員免許法認定講習講師（2023）
- 3) 愛知教育大学公開講座講師（2023）

# 鈴木 裕子

所属 愛知教育大学 幼児教育講座  
職位・学位 教授 博士 (学校教育学)  
博士課程分野 教育環境学  
担当科目 教育評価実証方法論 幼児教育・保育内容論研究 教科開発学セミナー  
研究テーマ 保育内容論 身体教育学 子ども学 身体表現論



## 1. これまでの教育研究について

保育内容論, 特に幼児期の身体表現・身体活動を主たるフィールドとして, 子どものこころとからだの相互作用をテーマとした研究を続けてきました。具体的には, 幼児間のコミュニケーションとしての模倣, 幼児の感性, 乳幼児の身体活動性増強の方略, 運動による心理社会的効果としての「遊び込む」概念の追求や環境構築, そして現在は, 幼少期のからだを動かす遊びにおける非認知能力の可視化を目指した研究に取り組んでいます。

## 2. 博士課程における教育研究について

幼児教育・保育の世界には「教科」はありません。「教科」に相当するのは「領域」ですが, 子どもたちの一つの活動, 特に「遊び」の中では, 様々な領域が重なり合い「保育内容」として存在しています。ですから「教科開発学」に相当するのは「幼児教育・保育内容実践開発学」といえるかもしれません。「幼児教育・保育内容実践開発学」では, 幼児教育・保育に関わる多様な実践や諸課題の改善・改革に貢献することのできる高度な研究指導能力を有する実践者及び実践に根ざした研究者を育成し, その成果として博士論文を発信することを目指したいと考えます。

## 3. 担当講義について

### 【教育評価実証方法論】

実践的研究者と研究的実践者の立場から, 対象を理解し分析評価する方法, それを研究として昇華させるための研究方法を扱います。受講者の研究背景や状況に応じて, 研究構想に寄与できるような高度研究手法としての定量的 (量的) な研究方法, 定性的 (質的) な研究方法, 混合研究方法などの中からいくつかの具体的な方法を取り上げます。

### 【幼児教育・保育内容論研究】

本授業では, 幼児教育, 保育の実践, またその類縁の学校教育や子育て支援, 家庭の養育等をめぐる最近の研究知見を学び, 研究動向を把握します。また保育内容・保育実践における様々な事象の中から問いを立てて検討し, 諸現象を実証的に分析する方法, 結果を説得的に提示していくための論理等, 論文作成に関わる研究営為を扱います。幼児教育・保育分野を直接に扱う受講者に対しては, 各人の研究主題に関連する研究のレビューをしながら, 今後の研究への示唆等が得られるようにしたいと考えます。

## 4. 主要な研究業績

- 1) 鈴木裕子 (2024) 幼児期における非認知能力の「非」を考える―「教科」をもたない幼児教育・保育からの発信―教科開発学を創る, 第5集, 48-70
- 2) Yuko Suzuki (2020) The Effect of Physical Play Experiences on Early Childhood Non-cognitive Skills Development, Journal of Education and Development, Volume 4, No 3, 54-72
- 3) Yuko Suzuki (2019) Characteristics of Physical Expression Activities Among Young Children – How Physical Contact Influences the Body and Expression –, Journal of Modern Education Review, Volume 9, No2, 109-123
- 4) Yuko Suzuki・Hideki Suzuki (2017) Psychosocial Effects of Physical Play in Early Childhood, Journal of Modern Education Review, Volume 7, No12, 894-906
- 5) 鈴木裕子 (2017) 幼児の「遊び込む」姿に含まれる要素の検討, こども環境学研究, 第12巻, 第2号, 54-62
- 6) 鈴木裕子 (2016) 保育における幼児間の身体による模倣, 風間書房
- 7) 鈴木裕子 (2009) 幼児の感性を具体化する試み: 幼児期の感性尺度の開発を手がかりとして, 保育学研究, 第47巻, 第2号, 141-153
- 8) 鈴木裕子 (2005) 幼児の身体活動評価尺度の開発: 子どもアクティビティ尺度, 体育学研究50, 557-568

## 5. 主要な社会的活動業績 (2025.1)

- 1) 日本保育学会 理事, OMEP 理事
- 2) 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構 専門委員
- 3) 愛知県豊明市子ども・子育て会議委員長, 愛知県蒲郡市子ども・子育て会議委員

# 野 崎 浩 成



所属 愛知教育大学  
職位・学位 博士（工学）  
博士課程分野 教育環境学  
担当科目 教授学習論研究  
教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ  
研究テーマ コンピュータと教育、教育工学、認知科学

## 1. これまでの教育研究について

これまでに取り組んできた教育研究のメインテーマは、「コンピュータを活用した学習支援」です。具体的なキーワードは、「eラーニング」、「学習環境の構築」、「学術論文執筆支援」、「第二言語習得」、「日本語コーパスを活用した言語学習支援」、「文章理解」、「教育におけるメディアの利活用」などです。特に、研究面では、科学研究費補助金の助成を受けて研究を進めています。

## 2. 博士課程における教育研究について

博士課程では、学習環境の構築や教材開発の実践を理論的に分析し、その理論を学校教育に活かすことを目的として教育研究に取り組んでいます。すなわち、実践と理論の往還を通じて、学習環境の諸課題を解決し、教授・学習を改善する方法を探究します。

## 3. 担当講義について

担当する講義「教授学習論研究」では、認知科学的な観点に立って、「教授・学習」に関わる理論について学習します。すなわち、「学び」を科学的に分析するための研究手法の習得を目指します。さらに、教授・学習に関連する研究論文や学術書などを輪読することを通じて、ICT等を活用した教育環境の改善について考察します。

## 4. 主要な研究業績

- [1] 野崎浩成，横山詔一，磯本征雄，米田純子（1996）文字使用に関する計量的研究：日本語教育支援の観点から，日本教育工学雑誌，Vol. 20, No. 3, 141-149（日本教育工学会 1997 年学会論文賞受賞）
- [2] 野崎浩成，市川伸一（1997）漢字学習支援システムの開発：漢字の構造理解と筋運動感覚の獲得，日本教育工学雑誌，Vol. 21, No. 1, 25-35
- [3] 野崎浩成，清水康敬（2000）新聞における漢字頻度特性の分析と NIE のための漢字学習表の開発，日本教育工学雑誌，Vol. 24, No. 2, 121-132

## 5. 主要な社会活動業績

教育システム情報学会 東海支部役員/研究会委員会  
日本リメディアル教育学会 学会誌編集委員

# 梅田 恭子

所属 愛知教育大学 教育学部 情報教育講座  
職位・学位 教授・博士（学術）  
博士課程分野 教育環境学分野  
担当科目 教科開発学原論、ICT 教育研究  
研究テーマ 教育工学、情報教育



## 1. これまでの教育研究について

教育工学の視点にたち、人の学びに関する理論的な知見を基に教育実践研究を行っています。具体的な内容としては主体的・対話的で深い学びを支援するために ICT を活用した授業設計に関する研究や、問題解決・探求における情報活用、情報モラル、小学校プログラミングなど、子どもたちの情報活用能力の育成に関する研究、高等学校教科「情報」に関する研究を行っています。また、これらの内容を教員養成の視点から捉えた研究にも取り組んでいます。

## 2. 博士課程における教育研究について

博士課程においては、教育実践の結果を人の学びに関する科学的な知見から捉えることと、それらの理論から授業を設計し実践するということを往還し、経験豊かな教員の主に授業における暗黙知を形式知化する研究を試みたいと思っています。

## 3. 担当講義について

「教科開発学原論」では、教育の情報化の背景を概観し、なぜ ICT 活用が必要なのか、主体的・対話的で深い学びとの関連性などを検討したうえで、2020 年代を通じて実現すべき令和の日本型学校教育の姿について探ります。また、情報活用能力とは何かについて、教育の情報化における位置づけ、構成要素、資質・能力との対応の観点から捉えます。「ICT 教育研究」では、学習観や指導観の転換に基づいた ICT を活用した授業デザインについてインストラクショナル・デザイン理論から捉えます。また優れた実践研究や教育実践例を基にどのような授業設計の方法があるのかを検討します。

## 4. 主要な研究業績

- 林一真・梅田恭子(2021) 1人1台のタブレット端末を活用した情報活用能力を育成する授業設計の留意点の提案, 日本教育工学会論文誌 44(4), 497-511
- 三輪理人・梅田恭子(2023) 「情報デザイン」単元における問題発見に着目した授業デザインの一提案～デザイン記号論のデザイン手法の特徴を取り入れて, ～日本情報科教育学会誌 16(1), 13-21

## 5. 主な社会活動業績

- 文部科学省 学校 DX 戦略アドバイザー (2023 年度～)
- 文部科学省 GIGA スクールにおける学びの充実 (情報モラル教育推進事業) 委員 (2021 年度～)
- 愛知県総合教育センター 情報教育の充実に関する研究 (ICT 授業活用に関する研究) 顧問 (2021 年度～)

# 伊藤 貴 啓



所属 愛知教育大学教育学部地域社会システム講座  
職位・学位 教授 博士（理学）  
博士課程分野 人文社会科学系教科学  
担当科目 地理学教材研究論，教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ  
研究テーマ 農業地域の自立的発展とその条件，ヨーロッパ国境地域の空間変動，  
社会科の教科内容と教科専門と教科教育の架橋に関する研究  
教員としての実践的指導力育成と地域教材開発（社会科地域学習および 防災教育）

## 1. これまでの教育研究について

教科専門では、地理学担当教員の任にあります。専門の農業地理学では、野菜産地の変化から日本農業の地域的変動を追うとともに、農業地理学の学史的分析に関心があります。EU の国境地域や農村地域の研究では、オランダへの関心を持ち続けています。このような教科専門としての地理学をベースに、教員養成段階における教員としての実践的指導力育成の方途を主に社会科と防災教育の分野で探り、とりわけ、本博士課程の教科開発学に関わって、教科専門と教科教育の架橋における教科専門の意味と両者の連携による社会科教科内容の構築、教員の力量形成に関心があります。

## 2. 博士課程における教育研究について

本博士課程では、社会科に関わる地理学教材研究論ほかを担当してきました。研究面では、自らの専門である地理学と社会科教育をフィールドに教科教育研究者との対話による教科内容のほか、教科専門と教科教育の架橋等に関わる方途についてについて研究しています。

## 3. 担当講義について

従前の担当科目「文化資源活用論」「地理学教材研究論」はともに理事就任に伴い、2024 年度は開講しませんでした。

## 4. 研究業績（2022・23 年度）

- 1) 「地域」と「地域」の見方・とらえ方 (pp.71~81). 「自然災害から人々を守る活動」の教材化 (三河地震) (pp.124~133), コラム 7 「発問はまず Why よりも How で」 (p.81), コラム 8 「地域の構造図を描くには」 (p.82), コラム 9 「地理院地図と国土地理院をもっと利用しよう」 (p.97). 伊藤裕康 編『社会科教育のリバイバルへの途—社会への扉を拓く「地域」教材開発—』学術図書出版社, 2022 年 4 月
- 2) 高知県芸西村における総合的病害虫管理 (IPM) の普及と野菜産地の自立的発展. 地理学報告 124, pp.81~106, 2022 年 12 月
- 3) 教師教育 (教員養成) における教科教育と教科専門との対話 (1) —社会科地理の観点から教科専門の意味を問う, 愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編『教科開発学を創る 第 4 集』愛知教育大学出版会, pp. 71~98, 2023 年 1 月
- 4) 教師教育 (教員養成) における教科教育と教科専門との対話 (2) —教科専門地理学の観点からみた社会科教員の養成—, 愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編『教科開発学を創る 第 5 集』愛知教育大学出版会, pp. 85~116, 2024 年 3 月

## 5. 主要な社会活動業績（2024 度）

社会科副読本監修 知立市・安城市・岡崎市・高浜市・幸田町  
人文地理学会代議員

# 中野 真志

所属 愛知教育大学生生活科教育講座  
職位・学位 特別教授・博士（文学）  
博士課程分野 人文社会系教科  
担当科目 教科開発学原論、生活科教育内容論研究、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ  
論文講究Ⅰ  
研究テーマ ジョン・デューイの教育理論、生活科及び総合的な学習（探究）の理論と実践



## 1. これまでの教育研究について

研究者として、当初、アメリカのカリキュラム理論及び社会科教育を研究していましたが、日本において生活科が新設されて以降、その研究対象を「生活科」、「後に総合的な学習（探究）の時間」に広げ、カリキュラム理論だけでなく教育方法学及び授業論の観点からも生活科、総合的な学習（探究）の時間、および社会科の理論と実践について研究してきました。これらの研究とともに、ジョン・デューイの教育理論、特にデューイ実験学校のカリキュラム理論と教育実践を研究しています。また、近年、生活科及び総合的な学習における知性と社会生徒と情動の学習にも関心をもっています。

## 2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの研究成果に基づき、教科の内容構成のもとになる親学問が存在しない「生活科」と「総合的な学習（探究）の時間」を教えるのに必要な資質・能力とは何か、「生活科」と「総合的な学習（探究）の時間」における体験と活動をどのように単元構想に位置づけ、それらを現在及び将来に求められる知識・技法・態度等の育成にどのように関連づけるのか、生活科と総合的な学習（探究）の時間の題材とは何かについてカリキュラム理論、教育方法学、授業論の観点から考察すること、その考察を通して教科とそれ以外の領域とは何かについても考えたいと思います。

## 3. 担当講義について

### 【生活科教育内容論研究】

生活科新設までの経緯、誕生した背景と諸要因について考察し、親学問をもたない生活科という教科の特質と独自性についての理解を深めます。そのために、まず、生活科の目標と内容、単元構想、年間指導計画の基本的な考え方について検討します。次に、生活科と総合的な学習の源流の一つであるデューイ実験学校のカリキュラム理論と教育実践について考察し、現在の生活科のカリキュラム及び授業実践を批判的に分析し、考察する能力の習得を目指します。

## 4. 主要な研究業績（2020.4～）

- 1) 「生活科・総合的な学習（探究）の時間における子どもの参加」『せいかつか&そうごう』第32号（日本生活科・総合的学習教育学会、2025年3月、pp.4-7）
- 2) 「L.G. カッツ (Katz) と S.C. チャード (Chard) のプロジェクト・アプローチ・コンピテンシー・ベースのカリキュラムにおける生活科への示唆」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』第9号、2024年、pp.165-1174
- 3) 『資質・能力時代の生活科—知性と社会性と情動のパースペクティブ—』三恵社（西野雄一郎との共編著）、2023年3月
- 4) 『資質・能力時代の総合的な学習の時間—知性と社会性と情動のパースペクティブ—』三恵社（加藤智との共編著）、2023年3月
- 5) 「アメリカにおける社会性と情動の学習 (SEL) —「学術的、社会的、情動的な学習の協働」(CASEL) を中心に—」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』第7号、2022年、pp.159-166
- 6) 「ジョン・デューイの『子どもとカリキュラム』」『教科開発学を創る』第3集（愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻篇、2021年3月、pp.111-131）
- 7) 「『民主主義と教育』における経験とリフレクション—探究・体験型学習の理論的基底—」（日本デューイ学会編『民主主義と教育の再創造—デューイ研究の未来へ—』、勁草書房、2020年、pp.188-196）

## 5. 主要な社会活動業績（2024年4月）

- 1) 日本生活科・総合的学習教育学会 副会長(2020年度～2023年度)、会長（2024年度～現在）
- 2) 日本デューイ学会 理事(2022年10月～現在)、学会紀要編集委員長(2024年10月～現在)

# 丹 藤 博 文



所属 愛知教育大学教育学部国語教育講座  
職位・学位 教授・博士（教育学）  
博士課程分野 人文社会系教科学  
博士課程担当科目 文化資源活用論, 国語科教育教材論研究, 教科開発学セミナー I・II・III  
研究テーマ 文学教育・物語研究（語り分析）

## 1. これまでの教育・研究について

ソシュールやウィトゲンシュタイン以降の言語論, 記号論や構造主義による文学理論をベースとして, あるいは戦後文学教育の理論と歴史をふまえて, 国語教科書に掲載される文学教材の読みについて研究しています。近年は, 物語論（ナラトロジー）・フランスの国語教科書を研究することで, 語りを日本の文学教育に導入すべく指導課程を提案し実践的な有効性を検討しています。

## 2. 博士課程における教育・研究について

高度情報化社会といわれ, 子どもたちにもスマホが普及する中で, 子どものリテラシーをどう育てていくか, 文学的なテキストの果たすべき役割とは何かといったことを明らかにしていきたいと考えています。すでに学校においては, デジタル教科書が導入されていますが, メディア社会における文学の教育的な意味と役割を追究することが課題です。

## 3. 担当講義について

### 【文化資源活用論】

言語論・物語論について概説し, 物語分析の手法を紹介します。そのうえで, 小・中学校国語教科書に掲載される文学教材を分析し読みを問題としていきます。受講者にも, 自分で物語分析を演習してもらいます。

### 【国語科教育教材論研究】

戦後の文学教育の展開をたどることで, その成果と課題を明らかにします。戦後の文学教育を概観し, 20 世紀の言語論・文学理論を参照しつつ, 文学教育の在り方について考察します。そのうえで, 小・中・高校の国語教科書における文学教材・説明文教材の読み直しを図り, 教材価値について検討します。

## 4. 主要な研究業績（2022 年～、単著は 1995 年～）

### 1) 著書

〈単著〉『教室の中の読者たち』（学芸図書 1995）, 『他者の言葉』（学芸図書 2001）, 『文学教育の転回』（教育出版 2014）, 『ナラティブ・リテラシー—読書行為としての語り—』（溪水社 2018）, 『文学教育における読書行為の研究』（ひつじ書房 2024）

〈共著〉全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望 III』（溪水社 2022）, 『これからの国語教育はどうあるべきか』（東洋館出版 2024）, 『教科開発学を創る 第 5 集』（愛知教育大学出版会 2024）

### 2) 論文

「語りの行方—「一つの花」（今西祐行）の場合—」『国語国文学報』（第 80 集 2022. 3）, 「巻頭言 深く読むために方法を教える」『月刊国語教育研究』（No. 606 2022. 10）, 「物語に耳をすませば—読みにおけるオノマトペの扱い—」『月刊国語教育研究』（No. 608 2022. 12）, 「語りと行為—『モチモチの木』（斎藤隆介）の場合—」『ランガージュ』（創刊号 2023. 3）, 「国語教育におけるファンタジーの受容について—「白いぼうし」を例として—」『あまきみこ研究会 会報』（第 3 号 2023. 3）, 「文学教育行為論のために—生成 AI と語り—」『国語国文学報』（第 82 集 2024. 3）, 「みんなちがって、みんないい。—教室の多様性と文学の効用—」『月刊国語教育研究』（No. 632 2024. 12）

### 3) 報告書 『令和 4 年度～令和 6 年度 科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）課題番号 22K02519 国語科の授業におけるナラティブ・メソッドの有効性に関する実証的研究』（研究代表者 2024. 12）

## 5. 主要な社会活動業績（2024 年）

- 1) 全国大学国語教育学会理事, コモンズ・ランガージュ代表, ナラティブ・メソッド研究会代表
- 2) 国語教科書編集委員（『ひろがる言葉 小学国語 1 年～6 年』教育出版, 『伝え合う言葉 中学国語 1 年～3 年』教育出版）
- 3) 日本教職員組合教育研究全国集会（日本語教育）共同研究者, 岡崎市教育研究大会共同研究者, 西尾市市教研指導助言者
- 4) 愛知教育大学附属名古屋小学校, 岡崎中学校（国語）共同研究者
- 5) 都留文科大学国文学会講演、北海道教育大学釧路校「国語の会」講演、聖徳大学教育学部講演

# 田口 達也

所属 愛知教育大学教育学部外国語教育講座  
職位・学位 教授 PhD in English  
博士課程分野 人文社会系教科学  
担当科目 第二言語教育論研究  
研究テーマ 心理学的視点からの第二言語習得、研究方法論、英語教育



## 1. これまでの研究・教育について

これまで、第二言語習得（特に英語教育）における個人差を中心に研究を行ってきました。中でも、学習方略と学習動機づけ・態度を主たるテーマとしてきました。近年は、非認知能力の視点から、第二言語習得を捉える研究を行っています。また、データの収集や分析の方法の検討も、重要な研究テーマとなっています。以前は量的手法を用いた研究を中心としていましたが、最近では質的手法や混合手法も研究対象としています。教育については、学部では音声教育を含む英語教育全般、教職大学院では異文化理解を担当しています。

## 2. 博士課程における研究・教育について

どのような教授法を用いても、学習者の学習に対する意欲・動機が言語習得の成否を左右します。この背後には、学習者のアイデンティティやその形成も関わります。そのため、学習意欲・動機づけの研究・教育に、アイデンティティの研究視点を加味することの意義を検討しています。また、研究を行うために研究手法を身に付ける必要もありますので、研究手法（特に言語習得研究に関わる手法）についても扱うことを考えています。

## 3. 担当講義について

### 【第二言語教育論研究】

授業での学習時間には限りがあるため、学習者が授業に集中することと授業外で勉強をすることが英語習得には必要不可欠になり、これらの要因に関わる動機づけや学習意欲の研究は重要な意味を持ちます。本授業では、動機づけ・学習意欲に関する理論を概観しますが、それらの理論の実践的方法の検討も行いたいと思います。また、動機づけというと学習者の立場からの研究が容易に思いつきますが、語学教師の側にも勤労意欲等の動機づけが必要であると言えます。そのため、学習者を対象者にした研究だけではなく、教師にとっての動機づけも併せて検討していきます。

## 4. 主要な研究業績 (2018.4～)

- 1) 田口達也 (2018) 「TOEIC、学習時間、そしてやり抜く力—愛知教育大学の事例から—」『教養と教育』第18号、1-9頁。
- 2) Taguchi, T. (2020). Investigating self-control strategies of university students learning English in Japan. In T. Pattison (Ed.), *IATEFL 2019 Liverpool conference selections* (pp. 45–48). IATEFL.
- 3) 建内高昭・田口達也 (2025) 「小学校英語における学習意欲の違いによる動機づけ要因の違いの研究—4学年における比較—」『愛知教育大学研究年報. 人文・社会科学編』第74輯、42-46頁。
- 4) Taguchi, T. (2021). Validating a self-control measurement for L2 learning: A factor analysis study. *Studies in Foreign Languages & Literature*, 54, 75-95.

## 5. 主な社会活動業績

- 1) 教員免許状更新講習「言語教育における非認知的能力の研究動向」(2018.8)
- 2) JALT Journal、System、Routledge Handbook 論文査読委員
- 3) 愛知県立国府高等学校公開授業指導助言 (2021.11)

# 近藤 裕 幸



所属 愛知教育大学教育学部社会科教育講座  
職位・学位 教授 博士 (学術)  
博士課程分野 人文社会科学系教科学  
担当科目 文化資源活用論・社会科教育論研究  
研究テーマ 第二次世界大戦前の地理教育史

## 1. これまでの教育研究について

これまで、第二次世界大戦前の中等教育段階における地理教授を研究してきました。戦前は中等教育段階が複線型でとても複雑であるため、旧制中学校・高等女学校・実業学校などすべてにわたっての地理教授の実態は依然として解明されていません。師範学校も含めて、これらを比較考察することで、その全容を明らかにしたいと思っています。

最近、戦前の地理科や歴史科において、中学校と高等女学校でどのような差が見られるのかを明らかにして、とくに女性について求められていたものが何であったのかを教科書の内容に限定して研究しています。

## 2. 博士課程における教育研究について

博士課程では、社会科教育論研究を担当しています。専門知識はいうまでもないのですが、その専門性が現場の経験や知識に結びついていることが重要だと思っています。現職の方は専門知識の重要性を、教員経験のない方には現場の知識をお伝えして、理論と実践が往還するような授業を行いたいと思っています。

## 3. 担当講義について

### 【文化資源活用論】

社会科（地歴科・公民科）は、おもに地理・歴史・公民的な内容によって構成されています。特に、戦前の地理教育制度や教科書を取り上げ、今日の地理教育の課題について講義します。また、各教科の小中高一貫カリキュラムについても検討します。専門にこだわる博士課程だからこそ、視野を広げる授業にしたいと思います。

### 【社会科教育論研究】

社会科教育（地歴・公民科）でしばしばとりあげられる本（著作物）を輪読することによって、その本が社会科教育でなぜ取り上げられるのか、どのような教育的価値をもっているのかについて参加者全員で考えていくことを目的とします。

## 4. 主要な研究業績（2022年～）

- 1) 近藤裕幸（2022）. 明治期から第二次世界大戦期まで（1872-1945年）の日本の中等教育における地理教育制度の変遷-実業学校を中心として-, 人文地理, 74-2.
- 2) 近藤裕幸(2022). 明治期から第二次世界大戦期における高等女学校の東洋史教科書にみられる良妻賢母思想, 探究, 32.
- 3) 近藤裕幸（2023）. 昔の地理教育を知り、今日の地理教育を見つめ直す, 社会科教育, 774号.

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 清水南高等学校出張授業, 講師, 2024. 6. 26
- 2) 天白高等学校出張授業, 講師, 2024. 10. 10
- 3) 名古屋市立桜台高等学校出張授業, 講師, 2024. 12. 3

# 岩 山 勉

所属 愛知教育大学 理事・副学長（理科教育講座）  
職位・学位 教授・博士（理学）  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 科学技術活用論、物理教材論研究、教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲ  
研究テーマ 物理教材開発、科学・ものづくり教育、半導体物理学、ビーム物性



## 1. これまでの教育研究について

量子ビーム（イオン・レーザービーム等）を用いた半導体ナノ結晶の作製とその物性評価を中心とした研究を行っている。イオンビーム、レーザービーム、エキシマUVランプ、近赤外線ランプ、電子線等を組み合わせ用いることにより、微細構造の制御された半導体ナノ結晶、機能性薄膜を作製し、その物性の評価、さらには、その光電子機能デバイスとしての応用の可能性の探索を行っている。

## 2. 博士課程における教育研究について

子どもたちの「理科離れ」が様々な場で叫ばれており対応が急がれる。これは、教育現場で「なぜ理科を学ぶ必要があるのか」という素朴な疑問に答えていないことに原因の一端があるものと思われる。科学技術の発展とともに原理がブラックボックス化され、専門家以外は単にユーザとしてその恩恵を受けるのみの場合が多い。博士課程では、先端科学技術の原理をいかに簡素化・モデル化し、教育現場に定着させていけるのかという課題に取り組み、関連する教材開発と教育効果の検証も行っている。

## 3. 担当講義について

### 【物理教材論研究】

身の回りの物理現象や先端科学技術を概説しつつ、教材開発やその授業での活用法を検討する。特に、学習の動機付けや日常との関わりから、理科を学ぶ意義、楽しさを伝える工夫として、先端科学技術を利用した「日常生活」と「理科学習」をつなげる新規の教材開発研究を行い、その有用性を検討する。

## 4. 主要な研究業績

- 1) "Optical properties of Si nanocrystals in SiO<sub>2</sub> matrix synthesized by reactive pulsed laser deposition", *Journal of Physics: Conference Series*, (IOP Publishing), **1527**, 12027 (2020).
- 2) 「教科開発学を創る 第3集（第7章 生徒が実験を通して主体的・創造的に電気抵抗の概念を獲得することを目指した新規教材の開発）」愛知教育大学出版会 (2021).
- 3) 「中学校理科における電気抵抗の形状依存性の導入に向けての検討 ―抵抗体の形状を2次元的に変化させた電気抵抗値の測定実験の評価から―」*科学教育研究*, **46**(2), 117-124 (2022).
- 4) "Investigation of pendulum damping using an angle sensor and video analysis: Combination of viscous and dry friction", *Physics Education* (IOP Publishing), **57**, 65026 (2022).
- 5) "Investigating the properties of conductive clay and examining its potential as a teaching material, *Physics Education* (IOP Publishing), **58**, 55011 (2023).
- 6) "Development of Acid-Base Indicators from Natural Pigments in Agar Gel", *Journal of Chemical Education* (American Chemical Society), **100**(12), 4707-4713 (2023).
- 6) "Utilizing Reactant-Infused Agar Gel to Model the Effect of Solid Reactant Particle Size on Reaction Rate, ", *Journal of Chemical Education*, ACS (American Chemical Society), **101**(9), 3944-3948 (2024).
- 7) 「電気抵抗の授業におけるエンジニアリングデザインプロセスの導入」*理科教育学研究*, **65**(3), 647-655 (2025).

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 刈谷市理数大好き推進協議会理事
- 2) 刈谷市立住吉小学校刈谷市立住吉小学校運営協議会委員長
- 3) 愛知県立豊田北高等学校学校評議員、あいちラーニング推進事業研究アドバイザー

# 飯 島 康 之

所属 愛知教育大学教育学部数学教育講座  
職位・学位 教授 教育学修士  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 数学教材論研究  
研究テーマ 動的幾何ソフトを中核とした教育用ソフト開発・コンテンツ  
開発・授業研究, 数学教育



## 1. これまでの教育研究について

数学教育学に関する研究を行っています。中核は、Geometric Constructor(GC)という動的幾何ソフト(作図ツール)です。DOS版(1989-), Windows版(1996-), Java版(2000-), html5版(2010-)を開発しました。附属学校の他さまざまな学校と連携して授業研究を行い, 動的幾何ソフトが数学教育に及ぼす影響を, 教材研究, カリキュラム研究, 授業研究など幅広く, 理論的かつ実践的に研究しています。

## 2. 博士課程における教育研究について

2010年から開発に着手したGC/html5は, いろいろな意味での先進性を研究する中核になっています。html5+JavaScriptで開発することによって, 次世代の教育用ソフトのあり方を具現化しています。複数の点を同時に動かせることなど, 操作性と数学的活動との対応づけもできます。4人1組での学習の場で利用することによって言語表現の活性化が期待されます。また附属学校・公立学校の実際の授業で検証し, 理論的かつ実践的に明らかにすることに取り組んでいます。そのような環境の構築や教材開発と実践研究が, 数学的探究の教授可能性を広げていくことを目指しています。

## 3. 担当講義について

### 【数学教材論研究】

数学的問題解決に対して汎用のソフトを開発・利用することで, その改革を目指すさまざまな研究に注目します。ソフト開発, コンテンツ・教材開発, 授業研究, 認識論的研究などのさまざまな領域において, それらの研究がどのように行われているのかを文献で明らかにするとともに, GCに関する実際のコンテンツ・教材開発や授業研究をサンプルに, 参加される院生の周辺での開発研究の可能性について検討します。数年前からはSTEM教育の中での数学のあり方も模索しています。

## 4. 主要な研究業績(2015.4 - )

Y. Iijima, Ch. 64 Teaching and Learning Mathematics and communication technology in Japan - the case of Geometric Constructor, Bharath Sriraman et al (eds), The First Sourcebook on Asian Research in Mathematics Education : China, Korea, Singapore, Japan, Malaysia, India (International Sourcebooks in Mathematics Education), 1437 - 1553, 2015

飯島康之, 作図ツールGC/html5の開発—HTML5+JavaScriptによる教育用ソフト開発の可能性—, 科学教育研究 vol.39, pp.161-175, 2015

飯島康之, 作図ツールGC/html5を用いた数学的探究における精度・誤差について - インターラクティブな探究に向けて -, 教科開発学論集 4, 111-121, 2016

飯島康之, ICTで変わる数学的探究, 明治図書, 2021

飯島康之, 算数・数学教育でのICT活用の『今日・あす・10年後』について, イプシロン, 64, 1-18, 2023

飯島康之, STEAM教育時代の数学教育研究のあり方について—共同教科開発学専攻の諸研究から実感したこと—, 教科開発学をつくる第5集, 愛知教育大学共同教科開発学専攻, 157-173, 2024

飯島康之, 研究との連携をするフィールドとしての学部の授業—「中等数学科教育法CII」での30年以上にわたる実験・実践について—, イプシロン, 65, 1-26, 2025

# 大 鹿 聖 公

所属 愛知教育大学教育学部理科教育講座  
職位・学位 教授・博士（学術）  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 科学技術活用論・理科教材開発論研究  
教科開発学セミナー I, II, III  
研究テーマ 理科教材開発、環境教育・ESD カリキュラム



## 1. これまでの教育研究について

小・中・高等学校の理科教育に関わる教材開発に取り組んでいる。実験観察活動を基盤とした教材から、モデルやシミュレーションなどを取り入れた児童・生徒の主体的な活動を育む教材など幅広く取り上げて開発している。また、理科教育における理解促進のため、科学館や博物館などの社会教育施設との教育連携に関する研究にも取り組んでいる。現在では、理科教育にとどまらず、環境教育、ESD、SDGs といった持続可能な社会における科学教育や教科横断型トピックに関するカリキュラム開発や教育実践に関する研究にも取り組んでいる。

## 2. 博士課程における教育研究について

21 世紀の現代は、科学技術の発展と地球環境問題の複雑化によって持続可能な社会に貢献する科学技術人材が求められている。そのため、主体的に自然科学や科学技術に取り組み、科学的な探究を実践する児童・生徒の育成が急務である。そのために、科学教育として、どのような教材や指導法を提供することが適切であるのか、また、未知の課題を探究するために必要な資質・能力とは何か、それらについて、歴史的な研究背景を省察しながら、研究を進め、実践的な教育研究に取り組んでいる。

## 3. 担当講義について

### 【科学技術活用論】

現代は、Society5.0 を目指し、さまざまな分野で科学技術が発展・進歩している。自然科学・科学技術がどのような社会背景の中で進展し、科学教育に影響を与えてきたか、科学技術と科学教育の関わりから、俯瞰して解説を行う。

### 【理科教材開発論研究】

理科授業では、自然科学の概念理解のために様々な教材が開発、利用されている。それぞれの自然科学分野における教材開発の歴史を辿りながら、また、児童・生徒の科学概念の状態を踏まえながら、教材開発に必要な目的、方略、実践について、具体的にトピックを選択しながら、議論を深める。

## 4. 主要な研究業績

- 1) 「協働学習を導入した中学校理科カリキュラムの開発—対面的—積極的相互作用の活性化による効果を中心にして—」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』. 71, 125-133. (2022) (共著)
- 2) 「エネルギーミックスを扱ったシミュレーション活動教材の開発—中学校理科「科学技術と人間」での授業実践を通して—」『愛知教育大学研究報告教育科学編』. 69, 153-161. (2020) (共著)
- 3) 「科学館において SDGs を学ぶためのワークシートの開発 小学校の校外学習での活用を事例として」『ESD 研究』. 5, 59-66. (2022) (共著)
- 4) 「消化の働きを粒子の大きさで理解するための教材開発」『生物教育』. 65(3), 135-143. (2024) (共著)
- 5) 「小・中学校教員へのアンケート調査からみた学校現場と動物園・水族館との教育連携に関する現状と課題」『生物教育』. 65(1), 42-49. (2023) (共著)

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 日本生物教育学会理事・副会長 (2016～現在)
- 2) 一般社団法人 SDGs コミュニティ理事 (2019～現在)
- 3) Asia Association for Biology Education Executive Director (2018～現在)
- 4) 愛知県教育委員会科学の甲子園ジュニア運営委員会委員長 (2022～現在)

# 小 谷 健 司



所属 愛知教育大学 教育学部 数学教育講座  
職位・学位 教授・博士（理学）  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 科学技術活用論，数学教育内容論研究，教科開発学セミナーI, II, III  
研究テーマ 数学教材開発，常微分方程式論

## 1. これまでの教育研究について

私の研究分野は常微分方程式論です。常微分方程式とは微分を含む方程式で，自然科学の研究に大いに役立っています。私は常微分方程式を幾何学的に考える問題に興味を持ち，長年研究を行ってきました。同時に，教育学部の学生たちと身近な事象に現れる数学的な問題についても研究してきました。このことについても，いくつかの結果を残しています。

## 2. 博士課程における教育研究について

私は長年，身近な事象に現れる私は数学について研究してきました。このことを生かし，学生のみならずと新たな数学教材を作り出したいと思っています。

## 3. 担当講義について

### 【科学技術活用論】

数学的な考え方・数学的な問題解決の仕方について，身近な事象に現れる数学を題材として授業したいと思います。内容は受講者の経歴等によって柔軟に変更します。

### 【数学教育内容論研究】

身近な事象に現れる数学について一緒に考えたいと思います。内容は受講者の経歴等によって柔軟に変更します。

## 4. 主要な研究業績

- 1) Projectile motion with general air resistance, 愛知教育大学研究報告, 自然科学編 73 (2024), 7-11.
- 2) An elementary geometric proof that regular polygons have the largest area, Parabola 59, 2 (2023). Univ. of New South Wales.
- 3) 5次の魔方陣を作ろう, 数学教育, 2022年9月号, 20-23, 明治図書.
- 4) ファカルティ・ディベロップメント (FD) を通してみた医師養成・教員養成の高度実践化に関する初歩的研究, 日本教育大学協会研究年報 42 (2024), 173-183.

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 愛知県立刈谷高等学校 SSH 運営指導委員会委員 (2014年～現在)
- 2) 科学技術振興機構 SSH 生徒研究発表会審査委員 (2023年～2024年)
- 3) 新城市教育委員会「数楽チャレンジ大会」実行委員会 顧問 (2001年～2024年)
- 4) 国際協力事業団 短期専門家 (数学教育) (2001年7月31日～9月8日)
- 5) 国際協力事業団 短期専門家 (数学教育) (1999年3月28日～4月9日)

# 宮川 貴彦



所属 愛知教育大学教育学部理科教育講座  
職位・学位 教授・博士（理学）  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 科学技術活用論・物理教育内容論研究  
教科開発学セミナー I, II, III  
研究テーマ 物理教育、量子物性理論

## 1. これまでの教育研究について

数百ナノケルビンまで冷却された原子気体における量子協働現象に関する理論研究に取り組んでいる。これまでに、ボース-フェルミ混合気体の安定性解析、スピン自由度を持つボース・アインシュタイン凝縮体中のソリトン解の発見、さらに磁気双極フェルミ気体における新奇な磁気構造秩序の理論的予言などの成果を挙げてきた。近年は、磁気双極ボース気体によって形成される超固体相の超流動性の解明をテーマに研究を進めている。

## 2. 博士課程における教育研究について

高次の学力や汎用的技能を含むコンピテンシーの育成が重視される世界的な潮流の中、日本の教育においても「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3つを柱とする資質・能力の育成が目標とされている。しかし、実際には各教科における高次の学力（活用・分析・評価・創造）の育成を促す評価方法・授業方法・教材は、十分に普及しているとは言い難い。博士課程では、特に物理教育の文脈において、それらの開発と教育効果の検証に取り組む。

## 3. 担当講義について

### 【科学技術活用論】

現代物理学の基礎である量子力学は、半導体やレーザーをはじめとする多くの先端技術の発展を支えている。本講義では、量子力学の原理がどのように現代の科学技術に応用されているのかについて、基礎からその概要を理解することを目指す。

### 【物理教育内容論研究】

国内外の研究動向を踏まえ、中学校理科および高等学校物理学に導入可能な評価方法・授業方法・教材について検討する。評価方法については、観点別評価との関係を踏まえ、パフォーマンス評価の理論と実践を考察する。授業方法は、米国の物理教育研究の文献から学び、教材は動画解析ツールや各種センサーを活用した実験教材の事例を分析する。これらを基礎に、新たな評価方法・授業方法・教材の開発を視野に入れて検討する。

## 4. 主要な研究業績

- 1) Phase separation in trapped dipolar Fermi gases, T. Miyakawa, S. Nakamura, H. Yabu, Phys. Rev. A **101**, 033613 (2020).
- 2) 物理基礎におけるパフォーマンス評価への取り組み -高等学校における観点別評価の導入に向けて-, 石田智敬, 宮川貴彦, 藤江和也, 日本科学教育学会研究会研究報告, 第35巻, 8号, pp. 35-40 (2021).
- 3) 高等学校「物理基礎」におけるパフォーマンス評価実践の試み, 石田智敬, 宮川貴彦, 藤江和也, 池畑剛, 筒井康隆, 科学教育研究, 47巻, No. 2, pp. 122-126 (2023).
- 4) Collective Excitation Modes in a Dipolar and Non-Dipolar Fermi Gas Mixture, T. Miyakawa, E. Nakano, H. Yabu, JPS Conf. Proc. **38**, 011014 (2023).
- 5) Dynamical properties of Fermi-Fermi mixtures of dipolar and nondipolar atoms, T. Miyakawa, E. Nakano, H. Yabu, Phys. Rev. A **109**, 053308 (2024).

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 大学入試センター教科科目第一委員会委員 (2014年4月～2016年3月)
- 2) 愛知県教育委員会内地留学生の受け入れ指導教員 (2018年9月～2019年3月)
- 3) 愛知教育大学附属高等学校「附高ゼミ」アドバイザー (2022年10月～現在)

# 寺 本 圭 輔



所属 愛知教育大学 教育学部 保健体育講座  
職位・学位 教授・博士（人間環境学）  
博士課程分野 創造系教科学  
博士課程担当科目 教科開発学実践論・保健体育内容論研究  
研究テーマ 健康科学、発育発達、水泳

## 1. これまでの教育・研究について

私の研究分野は運動生理学及び水泳である。運動生理学的研究では、主に小児期の発育発達と生活習慣、身体調整力（脳・神経系機能）などをテーマとして研究を行っている。また、近年では発展途上国（カンボジア）の小児の発育調査や身体測定の普及にも取り組んでいる。水泳研究では、学校水泳や初心者の教授法や教材開発をテーマとして研究を行っている。

## 2. 博士課程における教育・研究について

子どもたちの体力低下やその下げ止まり、メタボリックシンドロームやロコモティブシンドロームの低年齢化は既知であるが、時代に即した適応ではないのか？とも考える。子どもたちの健全発育としての適切な動きやその巧みさとそれに関わる要因、悪とするならどのように学校教育や日常生活で改善できるのか、考えていきたい。また、水泳＝泳法として行われる水泳教育の弊害によって多くの水泳嫌いを招いている。水泳教育は本来どうあるべきか、考えていきたい。

## 3. 担当講義について

### 【教科開発学実践論】

授業参加者・担当教員が様々な専門領域を持っている中で自分の研究テーマを発表することは、多くの新たな気づきが得られる機会となると考える。当たり前と考えていたことが覆されたり、自分の専門領域のみでは大きな壁であったことが学際的視点により大きく進むこともある。本授業がそのきっかけとなればと考えている。

### 【保健体育内容論研究】

保健体育・健康科学に関する課題を運動生理学及びバイオメカニクスの観点から提起し、議論していきたい。特に、子どもたちの発育や動きの現状、それを改善する策を教科開発学の観点から授業参加者で考えたい。また、水泳のみならずそれぞれの本来の運動についての系統的学びと学校教育の現状と課題についても議論したい。

## 4. 主要な研究業績

### 1) 著書

- ・「自分の命は自分で守るための学習」プログラムの展開。教科開発学を創る，第5集，愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻篇，2024.
- ・自分の命は自分で守るための学習-水辺での「安全確保につながる運動」の意義-。教科開発学を創る，第4集，愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻篇，2022.
- ・「水泳＝泳法」ではない水泳教育-水中環境における系統的学びの展開-。教科開発学を創る，第3集，愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻篇，2021.

### 2) 論文

- ・Methods for evaluating motor control functions for the development of teaching materials for creation diverse movements: evaluation index for motor control function. Journal of Physical Education and Sport, Journal of Physical Education and Sport, 23(5), 1287-1296, 2023.
- ・Quantitative Evaluation of Skeletal Fat Content by Measuring Echo Intensity Using Ultrasonography in Preschool Children. Int. J. School Health, 10(3), pp. 2-11, 2023.
- ・A Cross-Sectional Study for a Reference Model of Body Composition in Japanese Children Aged 3 to 10 Years. Int. J. School Health, 9(1), 2-12, 2022.
- ・Body Composition due to Deference in Residential Area and School Meals Provision in Cambodian Children. Int. J. School Health, 9(2), 113-122, 2022.
- ・Determining total energy expenditure in 3-6-year-old Japanese pre-school children using the doubly labeled water method. Journal of Physiological Anthropology, 41(1):28, 2022.
- ・Physical Growth of Primary School Children in Cambodia. Int. J. School Health, 8 (1), 18-27, 2021.

## 5. 主要な社会活動業績

スポーツ庁地域スポーツ課技術審査委員、愛知県健康推進学校審査委員、三重県水泳連盟医科学委員会委員長

# 山 田 浩 平

所属 愛知教育大学教育学部養護教育講座  
職位・学位 准教授 博士（スポーツ健康科学）  
博士課程分野 創造系教科学  
担当科目 保健科教育論研究、教育評価実証方法論  
教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ  
研究テーマ 学校保健学、健康教育学、保健科教育学



## 1. これまでの教育研究について

生活者の自発的な健康行動の獲得というテーマのもと、対象者の **Quality of Life**（生活の質）の向上に焦点をあてた行動変容の研究を続けてきています。特に、児童・生徒・学生に視点をあて、現在、学校現場で注目されている生活習慣改善に対する意志決定や問題解決能力の育成、対人葛藤場面における対人関係能力との関わり、さらには保健授業のための指導資料や学習法、教材開発などに着目した研究をしてきました。これらの研究を背景にして、養護教諭や保健体育科教員を目指す学生たちの現代的健康課題に対応した学校健康教育の方法を具体的に教示しています。

## 2. 博士課程における教育研究について

発育発達期にある児童・生徒等の学校生活が楽しく健康に送れるように、また生涯にわたって健康に過ごせるように、学校ではさまざまな活動を行っています。これらの活動は、保健教育と保健管理に分けられ、両領域の円滑な運営を図るための保健組織活動があります。具体的には、特別活動等における保健の指導、健康観察や健康診断などの活動が挙げられます。ここでは保健教育に視点をあて、保健教育の目標、内容、方法、評価方法について研究を進めています。

## 3. 担当講義について

【教育評価実践方法論】学校教育における児童生徒へのさまざまな指導や教育方法について、その妥当性や効果を科学的に検証することは教科開発の観点から非常に重要です。ここでは、学校で行われる健康教育（保健教育）に対する評価方法を取り上げ、その概要を解説します。

【保健科教育論研究】保健教育には、限られた時間数の中で子どもたちに生涯にわたって自らの健康を守る能力を身につけるという目標があります。そのため、まず保健教育が何をを目指すのかを解説した後に、学習内容や方法について演習を含めて解説します。

## 4. 主要な研究業績

<著書>

- 1) 教科開発学を創る第4集：第7章「健康の概念と健康教育(p130-142)」，愛知教育大学出版会，2023
- 2) 学校保健：第1章第5節「児童・生徒の健康状態(p41-54)」，第2章第1～5節「学校における保健教育(p55-106)」，第5章第6節「学校保健と地域との連携(p251-261)」，大学教育出版，2021
- 3) 保健科教育学の探究：第2部第3章3節「実践研究の事例(p317-322)」，大修館書店，2021
- 4) 学校保健ハンドブック：第2章第2節「学習指導要領に基づく保健の指導(p66-70)」，ぎょうせい，2019

<学術論文>

- 1) 児童生徒のヘルスリテラシー向上に向けた健康教育の推進，日本健康教育学会 32 卷 3 号，p187-190，2024
- 2) Physical Growth of Primary School Children in Cambodia, International Journal of School Science, Health Policy Research Center, Vol.1,18-27, 2022
- 3) Effective Teaching・Learning Process for Training Life Skills, Official Journal of School Health, Vol.9, 45-58, 2016
- 4) 対人葛藤場面での断り行動に対する自己効力感と社会的スキル及びユーモア対処との関わり，学校保健研究，第54巻3号，203-210，2015（2015年度日本学校保健学会奨励賞）

## 5. 主要な社会活動業績

国立教育政策研究所教育課程研究センター（学習指導要領作成に関わる専門委員）、愛知県健康推進校審査委員、日本オリンピック委員会（医・科学スタッフ）、日本学校保健学会代議員、日本保健科教育学会理事

# 縄田 亮太

所属 愛知教育大学教育学部保健体育講座  
職位・学位 准教授・博士（体育学）  
博士課程分野 創造教科学系  
担当科目 教科開発学実践論、球技教材開発論研究  
教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲ  
研究テーマ 球技論、バレーボール、コーチング学、バイオメカニクス



## 1. これまでの教育研究について

専門領域はスポーツ科学および身体教育学です。前者では科学的なコーチングを目指し、バレーボールの基本技術であるオーバーハンドパス動作を対象に力学的な視点から動作原理を明らかにしました。後者では学校体育における球技領域の教材開発を行ってきました。近年では、イェナプラン教育を踏まえた異年齢集団におけるボールゲームの学習プログラムの開発という研究を進めています。教育面ではこれまでの当たり前を疑ってみることを重視して学生に問いかけています。特に体育・スポーツにおける経験的な部分と理論的な部分のギャップに新たな発見や学びの始まりがあることを大切にしています。

## 2. 博士課程における教育研究について

学位名である「教科開発学」は学問分野の専門的知識を基盤として、学校教育の場で児童・生徒に学ばせるべき内容やその授業方法、教材開発などの研究を行う新たな学術分野とされています。その根源的な定義を踏まえつつ、異なる分野の方々が集まる本専攻の特徴を活かし、他者との議論の中から、私の専門領域から「教科開発学」とは何かを追及していきたいと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【教科開発学実践論】

教科開発学実践論では教育事象を共有化し、実践を理論化する方法論等を学び、学校教育の実践を理論化し、また、その理論を指導に生かす能力を身につけます。各受講者のこれまでの研究を、教科開発学の視点から構成しなおし、それについて発表をし、受講者および教員全員で議論する事で、上記の狙いを達成します。

### 【球技教材開発論研究】

体育・保健体育における球技領域の教材開発力を養い、その授業での活用法を検討します。体育・保健体育における球技指導の歴史的な変遷を踏まえて、球技を学ぶ意義や目的、運動の特性を伝える工夫を討議・検討します。

## 4. 主要な研究業績

- ・縄田亮太（2020）幼児の自発的なボール遊びにおける動きに関する研究、愛知教育大学教職キャリアセンター紀要，5，pp.153-155
- ・縄田亮太（2020）ネット型ゲームにおける児童の「戦術的気づき」から「競争課題」を検証する～小学校3年生のキャッチバレーボールの実践より～，愛知教育大学体育学会研究報告，66，pp.55-60
- ・縄田ほか（2014）ビーチバレーボールにおけるオーバーハンドパス動作の特徴ーディープ・ディッシュの技術に着目して，コーチング学研究，28，pp.41-52
- ・縄田ほか（2013）バレーボールのオーバーハンドパスにおける飛距離の違いが上肢および下肢動作に及ぼす影響，体育学研究，58，pp.111-122

## 5. 主要な社会活動業績

- ・日本バレーボール学会・理事
- ・日本スポーツパフォーマンス学会・副編集委員長
- ・愛知県バレーボール協会・理事
- ・西尾市スポーツ協会・理事
- ・みよし市スポーツ推進審議会・委員
- ・愛知県総合教育センター中堅教諭等資質向上研修【前期】教科指導（保健体育）・講師

# 村越 真



所属 静岡大学大学院教育学領域  
職位・学位 教授 博士 (心理学)  
博士課程分野 教育環境学  
担当科目 学校危機管理理論研究、教育フィールド調査論、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ  
研究テーマ リスク認知、学校の危機管理、リスクマネジメント、空間認知、安全教育、

## 1. 研究ハイライト

- ①不確実性の高い環境の中で、人はどう賢く問題解決をしているのか？
- ②主体的、対話的な安全・防災教育の探求
- ③リスクの高い環境でのリスクの捉えとリスクマネジメントの知恵（実践知）の探究

上記3テーマがここ20年間の研究の柱である。①は主としてナビゲーション・空間認知・地図理解を対象としている。成果としては、(村越、1991、1995；Murakoshi、1990、1994、Murakoshi、1997；村越、2004等)がある。2000年以後は、②③を主たるテーマとして、子どもや教員・指導者がどのように危険を認知しているのか、そこにどのような安全上の課題があるのか(村越、2004、2006、2008)、危険を回避するスキルを育成する上で有効な教育方法はどのようなものかを実践・実験の両面から検討した(2011、2015；村越・小山・河合、2016、村越、2020)。また、自然体験・アウトドアスポーツでの事故の実態、活動者の危険認知や対処能力についての研究も行った(村越、2010、2013、2016；村越ら、2014)。2016年からは、自然環境の中でリスクに気づき対処する認知プロセスの実証研究を進め、高齢者はリスク特定能力が低下することを示唆する結果を得た(村越、2017)。また、過酷な自然環境のリスクに対する知識や実践知の研究を行っている(満下・村越、2019等)。国立登山研修所の専門調査委員や講師として、これらの成果を山岳遭難防止の研修等にも活用してきた。

## 2. 今後の研究の展開と博士課程における教育研究

最近の主要な研究成果は、①村越真・満下健太(2020)過酷な自然環境でのリスクマネジメントの実践知. 認知科学、27(1),23-43、②③Mitsushita, Murakoshi, & Koyama (2022) How are various natural disasters cognitively represented?: A psychometric study of natural disaster risk perception applying three-mode principal component analysis. Natural hazards, 116, 977-1000. ③Murakoshi & Mitsushita (2024). Cognitive Representation of Mountaineering Risks and its Change by Expertise, 19(1), Art.1 がある。①では、南極観測隊の安全管理隊員への聞き取りから質的研究法によってリスクの特性に応じたマネジメント方略の実践知を明らかにした。②③では3相因子分析という特殊な多変量解析の手法によって、人が自然災害をどのように認知しているかと、それが対処欲求にどう影響しているか(②)、多様な山岳遭難に対するイメージが登山経験によりどう変わるか(③)を明らかにし、いずれもリスクの特性によって人々の認知が異なることを示した。

2019～2021年の南極地域観測では、日本の南極観測で正式に採用される初の人文社会科学的研究「リスク対応の実践知の把握に基づくフィールド安全教育プログラムの開発」の研究代表者を務めた。また、幼少期の遊びや児童期の自然体験も「不確実性」という点では南極の過酷さと変わらない。見かけ上の過酷さの違いを超えた挑戦的活動におけるリスクマネジメントの統一的な原理の発見・構築に向けて、科研費補助金による学校での安全教育の構築に取り組んでいる。これらの成果は、リスク社会と呼ばれる現代におけるパーソナルなリスクマネジメントの理論構築とそれを踏まえた研修プログラムの開発につながることを期待できる。

# 村山 功

所属 静岡大学 学院教育学領域  
職位・学位 教授 教育学修士  
博士課程分野 教育環境学  
博士課程担当科目 教育工学論研究  
研究テーマ 認知心理学、学習科学



## 1. これまでの教育・研究について

これまで、現行学習指導要領と全国学力・学習状況調査に基づく授業改善について、研究や助言を行ってきました。その成果の一部を『平成30年度調査 全国学力・学習状況調査における中学校理科と教科書の活用』として公表し、また2019年3月3日の教科開発学研究会において「全国学力・学習状況調査に見る中学校理科授業の実態」として発表しました。また、教育委員会や学校で調査結果が適切に活用されることを願って、分析・活用の支援を行ったり、文部科学省の取り組みの検討を行いました。

新学習指導要領に対応した授業づくりについても研究を進めており、途中段階ではありますが「教育目標・内容、指導方法、学習評価の一体化に向けてー新学習指導要領における『主体性』を中心にー」にまとめました。現在はいま少し理論的な問題に取り組んでおり、主体的な学習に対しては「ハンズ・オン」や「インタラクティブな学習環境」という観点から、深い学び・真正な学習に対しては「数学的活動」という観点から、アプローチしようとしています。

また、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～の答申の「2. 9年間を見通した新時代の義務教育の在り方について」に触発され、学び方の洗練という観点から、生活科にも取り組む予定です。

## 2. 博士課程における教育・研究について

本年度で定年退職のため、主指導教員として、指導院生が博士論文を書くことができるよう、計画的に働きかけています。特に、学術誌へ論文を掲載できるよう研究を支援しています。

教育工学論研究のe-learning化を続けています。昨年度から、これに加えて、教材の英語（多言語）対応に取り組んでいます。私自身の授業は本年度で終了しますので、直接的な成果はあまりありませんが、オンデマンド授業のため英語対応がしやすいということがあり、専攻における試行という位置づけで進めています。

## 3. 担当講義について

### 【教育工学論研究】

「理論に基づいて教育プログラムを作る方法」というキャッチフレーズのもと、教育を再現可能な現象として捉え、工学的にアプローチする方法を紹介します。分野としては、インストラクショナル・デザイン（ID）に相当します。ただし、IDに関する教科書のほとんどは肝心のインストラクションの部分が不十分のため、この部分を学習科学の知見で補完しています。

## 4. 最近の主な研究業績（2020.4～）

- 1) 「静岡県における「ICT活用指導力」の動向：校種全体及び校種ごとの特徴」, 村山功・中村真二, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 33, 161-170, 2023/03/10.
- 2) 「全国学力・学習状況調査の結果に基づく学力向上：学校や教育委員会による分析方法の提案」(実践報告), 村山功, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 34, 244-249, 2024/03/11.
- 3) 「第4章 教育目標をどう表すかーコンピテンズとパフォーマンスー」, 村山功, 愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編『教科開発学を創る 第5集』愛知教育大学出版会, 72-84, 2024/03/15.
- 4) 「教育委員会と学校における『全国学力・学習状況調査』の活用に関する文部科学省の取り組み」, 村山功, 静岡大学教育実践支援センター紀要, 35, 119-127, 2025/03/17.

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 静岡市立の高等学校の在り方検討委員会委員長
- 2) 公益社団法人全国学校図書館協議会理事

# 香 野 毅

所属 静岡大学教育学部特別支援教育専攻  
職位・学位 教授 博士 (心理)  
博士課程分野 教育環境学担当科目  
教科開発学原論研究テーマ 特別支援教育 心理支援 動作法 子育て支援



## 1. これまでの教育研究について

特別支援教育専攻の教員として、障害をはじめとするニーズのある人への支援教育について、主として心理学の立場から取り組んできました。障害種別としては、肢体不自由、知的障害、ASDをはじめとする発達障害、いわゆる情緒障害などが対象となりますが、障害種に特化した支援というよりも、生活や心理面の支援を前面に出すことで、あらゆる人を対象にできると考えています。支援の窓口としては「身体」や「動作」を得意としています。また家族支援や地域との連携などについて実践的な研究を進めてきました。

大学では、学部では肢体不自由児の心理や教育を、大学院では発達障害児の理解と対応を中心に授業を行っています。

## 2. 博士課程における教育研究について

障害をはじめとするニーズのある人への支援教育について、エビデンスのある方法の開発に取り組んでいきたいと考えています。加えて、それを支える仕組みや制度、人的環境といった面からも、学校や支援の場をいかに機能させていくかについて考えてみたいと考えます。

## 3. 担当講義について

### 【教科開発学原論】

研究を進めるにあたっては先行研究のレビューが必要です。中心的な概念、近接領域での取り組み、研究の方法などの範囲において、参考になることが多いはずですが、また研究倫理の点からも欠かせません。この授業では、自分の研究を例にしながら、先行研究の整理を手伝えればと思います。

### 【特別支援教育研究】

障害のある人への指導支援の種々の方法や技法について深めていくとともに、その背景や構成等について理解を深めていきます。また学校や家庭といった関係機関がいかに機能していくのかについても考えてみたいと思います。

## 4. 主要な研究業績

- 1) 「緊張が高い子どもへの理解とアプローチ」 発達教育 2014年5月 Vol. 33 No. 5 pp. 4-11
- 2) 「発達障害のある子どもの姿勢と動き」 教育と医学 2015年3月 No. 741 pp. 58-64
- 3) 「肢体不自由者の持つニーズの年齢段階による変化 —保護者への質問紙と聞き取りによる調査から—」 特殊教育学研究 第54巻2号 2016年7月 pp. 77-86
- 4) 「学齢児を持つ保護者の相談ニーズに関する調査研究」 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 2017年3月 第26号 pp. 1-7 香野 毅・大石啓文・田代 篤・坂間多加志
- 5) 「障害のある子どもたちの新たな学びの場としての放課後等デイサービス —連携と専門性という課題に焦点をあてた調査と実践事例—」 教科開発学論集 2021年3月 第9号
- 6) 「肢体不自由者を中心とした障害者臨床・療育におけるアセスメント」 2020年5月 静岡学術出版
- 7) 「動作訓練の技術とこころ —障害のある人の生活に寄りそう心理リハビリテーション—」 2022年5月 遠見書房 全221頁

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 小中高等学校、特別支援学校、幼保こども園 等研修講師 多数
- 2) 心理臨床学会、静岡県公認心理師協会、日本公認心理師協会、日本リハビリテーション心理学会 理事、役員

# 小林 敬一



所属	静岡大学学術院教育学領域
職位・学位	教授・博士（教育心理学）
博士課程分野	教育環境学
博士課程担当科目	教科開発学原論，心理学的アプローチによる教育研究
研究テーマ	教授学習心理学，学習過程・メカニズム，学習支援，授業をベースにした心理教育プログラムの理論と評価，社会心理学

## 1. これまでの教育・研究について

人が学ぶメカニズムやプロセスを教育心理学的観点から明らかにする研究を行っています。特に、対話が学習において果たす役割，あるいは対話が重要な役割を占める学習現象に関心があり，共同作成の場におけるノートテイキング（メモやノートの中に現れる自分と他者の対話），異なる意見を持った複数テキストの読解やそれらに基づく意見文産出（自分を媒介にした他者間対話），他者に教えたり教える準備をしたりすることで自分が学ぶという現象（自分と教える相手との対話）などを取り上げ，理論的・実証的な研究を進めてきました。最近では，学校の授業を活用して実施される心理教育的介入プログラムの研究にも興味があり，その理論的・方法的基盤に批判的な検討を加える研究にも取り組んでいます。

## 2. 博士課程における教育・研究について

それとは明記されていなくても，心理学的な考え方を土台にしたり心理学的アプローチを用いたりしている教育研究（あるいは，「教科開発学」の研究）が少なくありません。大学院生のみなさんがそれぞれの研究テーマを追求する過程で，そうした心理学的考え方やアプローチを提供できればと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【教科開発学原論】

私の担当部分では，そもそも「研究とは何か」を考えてもらうことを目的としています。そのために，学術論文の introduction 部分に着目し，それがどのような構造をしているのか，なぜそのような構造をしているのかについて深い理解を得てもらうような授業を目指しています。授業では，受講生が互いにディスカッションしながら，それぞれの研究テーマに即して「研究とは何か」を考えてもらうつもりです。

### 【心理学的アプローチによる教育研究】

本授業では，心理学的アプローチによる教育研究でしばしば用いられる，心理尺度，実験的アプローチ，言語データ，混合研究法の4つを取り上げます。そして，各アプローチに関する基本的な考え方，各アプローチを用いた研究の実際，各アプローチを用いた研究のデザインを，受講生各自の研究テーマや関心に即しながら，理解したり考えたりしていきます。

## 4. 最近の主な研究業績

- 1) 小林敬一（2024）. 授業をベースにした心理教育的介入プログラムの効果判断 — 『教育心理学研究』実践研究論文の現状と課題— 教育心理学研究, 72(3), 197-208.
- 2) Kobayashi, K. (2024). Interactive learning effects of preparing to teach and teaching: A meta-analytic approach. *Educational Psychology Review*, 36(1), 26.
- 3) 小林敬一（2023）. 教授による学習の役割仮説 心理学評論, 66(2), 175-192.
- 4) Kobayashi, K. (2022). Learning by teaching face-to-face: The contributions of preparing-to-teach, initial-explanation, and interaction phases. *European Journal of Psychology of Education*, 37(2), 551-566.
- 5) Kobayashi, K. (2021). Effects of collaborative versus individual preparation on learning by teaching. *Instructional Science*, 49(6), 811-829.
- 6) 小林敬一（2020）. 他の学習者に教えることによる学習はなぜ効果的なのか？ — 5つの仮説とそれらの批判的検討— 教育心理学研究, 68(4), 401-414.

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) *Frontiers in Psychology* 誌: Associate Editor
- 2) 教育心理学研究: 編集委員

# 中村 美智太郎

所属 静岡大学大学院教育学領域  
職位・学位 准教授・博士（学術）  
博士課程分野 教育環境学  
博士課程担当科目 教育プログラム開発論，人間形成論研究  
研究テーマ 教育思想，情報倫理，道德教育，キャリア教育



## 1. これまでの教育・研究について

倫理的なものと美的なものとの接合領域への関心から研究しています。最近では、情報倫理・生命倫理・スポーツ倫理といったいわゆる応用倫理や、またマイノリティ・遊び（遊戯）・リスク・安全・市民性・討議方法等についても検討しています。このベースには、近代ドイツ教育思想についての関心があります。18世紀を中心とした特にドイツの教育思想の文脈での主な研究対象は、美的教育思想を展開した Fr・シラーです。彼の思想の起源を明らかにしつつ、現代までの展開を跡付けるべく、研究を進めています。

## 2. 博士課程における教育・研究について

情報倫理・道德教育・キャリア教育が抱える現代的な諸課題を射程に入れつつ、学校を中心とした教育機関での学びにおいて、私たちはどのように人間形成を行うのかをテーマに研究しています。「学校とはなにか」「学びとはなにか」「教育とはなにか」といった根本的な、かつ一義的な解のない問いに対して応答しようと試みています。

## 3. 担当講義について

【教育プログラム開発論】特にキャリア教育や道德教育の視点に立って理論・歴史と実践を往還しながら、教育プログラムの開発方法・検証等についての検討を行います。

【人間形成論研究】人間がいかにして人間となるのか、教育はそこにどのように関与する（してきた）のかという問いに、主に西洋近現代における教育思想や倫理学の知見を軸に応答していきます。

## 4. 最近の主な研究業績

- ・中村美智太郎（2024）「教育現場における倫理的諸問題に対する倫理学の貢献可能性」『日本健康相談活動学会誌』第19巻第1・2号，pp.6-11。
- ・中村美智太郎・鎌塚優子・稲葉英彦・竹内伸一（2023）「ケースメソッド教育は、学校教育におけるリーダーシップの探究にどう貢献するか」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）』第74号，pp.176-191。
- ・酒井郷平・田中奈津子・高瀬和也・中村美智太郎（2022）「学級の『1人1台端末』環境における教員のルールづくりの傾向と要因の分析」『コンピュータ&エデュケーション』vol.53，pp.52-57。
- ・中村美智太郎（2021）「情報圏における道徳的行為者と道徳的コミュニケーション—情報倫理のアプローチに基づいて」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）』第72号，pp.183-194。
- ・中村美智太郎（2020）「情報環境における道徳的行為者の『責任』と『答責性』」、『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第52号，pp.43-55。
- ・中村美智太郎（2019）『『遊戯』の領域と『忘我』—シラー『美的教育書簡』における美的差異の問題』、『唯物論』第93号，pp.84-98。
- ・中村美智太郎（2018）「連帯可能性としてのリスク・コミュニティへの視座—再帰的近代化と道徳のリスクの問題」、『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）』第69号，pp.149-161。
- ・鎌塚優子・竹内伸一・中村美智太郎共編著（2023）『討論して学ぶ探究的道德ケースブック』静岡学術出版。
- ・堂園俊彦・角田ますみ・北西史直・中村美智太郎共編著（2023）『在宅ケアの悩みごと解決マップ—ケースで現場の問題「見える化」します』医歯薬出版
- ・中村美智太郎・鎌塚優子・竹内伸一共編著（2022）『探究的な学び×ケースメソッド—教育イノベーターのための新しい授業チャレンジ』学事出版。
- ・藤井基貴・村越真・中村美智太郎・塩田真吾・満下健太・安永太地共編著（2021）『自律的思考を促すスポーツ・インテグリティ教育—理論と実践の構築を目指して』静岡学術出版。
- ・中村美智太郎・鎌塚優子・竹内伸一・岡田加奈子共編著（2018）『とことん考え話し合う道徳—ケースメソッド教育実践入門』学事出版。

## 5. 主要な社会活動業績

学校図書教科書編集委員（「小学校・中学校道徳」），御前崎市スクラム運営委員会委員，静岡大学教育学部附属島田中学校研究評議員，文部科学省中央教育審議会専門委員，日本シェリング協会理事 他

# 坂口京子

所属 静岡大学教育学部国語教育講座  
職位・学位 教授・博士（教育学）  
博士課程分野 人文社会系教科学  
担当科目 国語教育論研究、表現・鑑賞論  
研究テーマ 国語教育史、言語教育論、国語科授業研究、国語科教師教育



## 1. これまでの教育研究について

専門は国語教育史研究です。特に戦後新教育期における経験主義教育の摂取と実践的理解の過程に着目し、カリキュラムや授業構想について研究してきました。現在の国語・国語科教育に関する教材、指導法、カリキュラム開発に関する研究や、国語科教師教育研究にも取り組んでいます。ここ数年は、言語力や思考力（中でも選択力）の育成を視点として、国語教科書や先進的実践の調査・分析を行なっています。

## 2. 博士課程における教育研究について

以上に述べた教育研究を継続し、現在あるいは今後の国語教育実践を相対化し得る視点を歴史研究から学びつつ、それを常に再構築していくことに取り組んでいます。また、教育の現実を真摯に捉えようとする際、自ずと見えてくる新しい研究領域と研究方法を追究していきたいと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【国語教育論研究】

国語・国語科教育について、教育課程・教育内容・教育方法の3点とその関連をどう図っていくかを軸に考察していきます。わが国の戦後国語教育史を概観した上で、現在の実践例を取り上げてその価値を考察します。受講者の関心も鑑みながら、教育実践の複合性とそのデザインについて論じます。

### 【表現・鑑賞論】

国語・国語科教育、また担当者のこれまでの研究について表現・鑑賞の各視点から再考し、それをもとに具体的な議論を進めます。

## 4. 主要な研究業績（2022～）

- 1) 「中学校国語科における音読・朗読指導の課題と改善—単元「詩の誕生」（大村はま）を観点として—」『静岡大学教育実践総合センター紀要』35号、2025
- 2) 「国語科教師の「成長史」に位置づく卒業論文指導の検討—卒業後のインタビューの検討を通して—」『静岡大学教育実践総合センター紀要』34号、2024
- 3) 「中学校国語科授業の発言・記録に見る比喻表現の検討—言語力の汎用性と固有性を観点として—」『静岡大学教育学部研究報告、教科教育学篇』55号、2023
- 4) 「言語力育成の観点から見る中学校理科授業の考察—ファシリテーターによる対話と板書の分析を通して—」『静岡大学教育実践総合センター紀要』33号、2023
- 5) 「批判する力を育成する中学校国語科の授業づくり：教材「握手」の学習過程に注目して」『静岡大学教育実践総合センター紀要』32号、2022

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 駿東地区国語教育研究会講師（2024.11）
- 2) 富士市中学校国語科夏季研究会講師（2023.8）
- 3) 教科書の効果的な活用による授業力アップ講座 第1回国語オンラインセミナーin静岡（2022.11）
- 4) 静岡県教育研究会 国語教育研究部夏季研究大会講演「言葉と遊び・言葉を考える国語科の授業づくり」（2022.8）

# 大 瀧 綾 乃

所属 静岡大学大学院教育学領域  
職位・学位 講師・博士（教育学）  
博士課程分野 人文社会系教科学  
博士課程担当科目 外国語教育論研究，教科開発学実践論  
研究テーマ 第二言語習得，外国語教授法



## 1. これまでの教育・研究について

第二言語習得（SLA）の知見に基づき、外国語教授法の開発をテーマに研究を行ってきました。具体的には、日本語を母語とする英語学習者を対象に、主に動詞（他動詞・自動詞・自他両用動詞）の項構造の習得に関する調査を行っています。学習者が、目的語が欠如した非文法的な他動詞文（例：*\*I enjoyed very much.*）を正しいと判断したり、自他両用動詞を用いた文法的な文（例：*The window opened.*）を非文法的だと誤って判断したりする誤りについて、その要因の解明を目的としています。また、第二言語習得研究で得られた知見をもとに、教室内で明示的な文法指導を行うことの効果についても調査してきました。特に、どのような明示的な文法指導が効果的であるのか、また学習者に否定証拠（誤りの文）を提示することがどのような学習効果をもたらすかについても調査しました。学生や大学院生への研究指導や共同研究においては、文法指導にとどまらず、語彙習得やスピーキングなど、幅広い領域における習得および指導法を扱ってきました。

学部および大学院の授業では、主に英語科教育に関する科目（小学校・中学校）を担当しています。

## 2. 博士課程における教育・研究について

博士課程においても、これまでのテーマを継続し、第二言語習得研究、理論言語学、応用言語学などの理論に基づいた、教室環境における効果的な外国語教授法について研究を進めていきたいと考えています。

あわせて、第二言語習得や外国語指導法の効果を検証する際の適切な研究手法についても検討を深めていきたいと考えています。

## 3. 担当講義について

【外国語教育論研究】外国語教育研究を行ううえで必要とされる主要な理論を理解することを目的とします。Second Language Acquisition（SLA）や Instructed Second Language Acquisition（ISLA）などの研究分野における主要理論を学びます。外国語教育研究における代表的な論文を取り上げ、研究方法や分析手法を理解するとともに、批判的に検討する力を養います。学んだ理論を基に、外国語授業の実践を検討・分析できる力の育成も目指します。

## 4. 最近の主な研究業績

### 【著書・編書】

- 1) 大瀧綾乃(2023)「他動詞と自動詞の区別と明示的指導—非対格動詞の場合—」大瀧綾乃・須田孝司・横田秀樹・若林茂則(編)『第二言語習得研究の科学 2 言語の指導』(p.41-62) くろしお出版
- 2) 大瀧綾乃・中川右也・若林茂則(編)(2023)『第二言語習得研究の科学 1 言語の習得』くろしお出版
- 3) 大瀧綾乃・須田孝司・横田秀樹・若林茂則(編)(2023)『第二言語習得研究の科学 2 言語の指導』くろしお出版
- 4) 大瀧綾乃・横田秀樹・須田孝司・中川右也(編)(2023)『第二言語習得研究の科学 3 人間の能力』くろしお出版

### 【論文】

- 1) 鈴木雄太・大瀧綾乃(2025)「中学校英語科における「話すこと [やり取り]」の指導に対する教員の課題意識—アンケート調査を通して—」静岡大学教育実践総合センター紀要 35, pp.37-46
- 2) 木村千鶴子・大瀧綾乃・永倉由里・出口マクドナルド友加里(2025)「小学校外国語科におけるアルファベットの音声と文字を繋げるための授業実践—個別最適な学びを通して—」静岡大学教育実践総合センター紀要 35, pp.297-304
- 3) Ishikawa, Y., Otaki, A., Okamura, H., & Shirahata, T. (2024). Measuring the English Vocabulary Acquisition of Japanese Learners. *Studies in English Language and Education*, Volume11, number 1, pp.
- 4) 大瀧綾乃・中川右也, 箱崎雄子, 横田秀樹, 白畑知彦 (2023)「日本語を母語とする英語学習者による他動詞の目的語欠如の誤り—予備的調査—」静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇 55, pp.1-13.

## 5. 主要な社会活動業績

- ・大学英語教育学会 社員，中部支部幹事
- ・日本第二言語習得学会 運営委員，紀要編集委員
- ・日本児童英語教育学会 運営委員
- ・沼津教育振興会 英語部夏季研修会 講師（2024年8月）
- ・湖西市教育委員会 教科等研修会 英語科研修 講師（2024年7月）
- ・静岡県教職員組合 教育研究静岡県集会 分科会共同研究者（外国語科）（2024年～現在）

# 小 南 陽 亮

所属 静岡大学教育学部  
職位・学位 教授 理学博士  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 生物教育内容論研究、教育プレゼンテーション論、教科開発学セミナー  
研究テーマ 身近な自然を活用した生物教材と教育内容の発展



## 1. これまでの教育研究について

生物多様性の劣化は深刻な地球環境問題として国際的に認識され、日本においても生物多様性条約に基づいて生物多様性国家戦略を策定してその保全に取り組んでいます。その中で、生物多様性の意味、生物多様性を保全する理由についての教育が不可欠となり、理科などの各教科における環境教育を充実させ、児童生徒が生物多様性を含む環境を深く理解した上で環境を守る主体的な行動がとれるようになることが求められています。これらを背景として、森林生態や生物間相互作用に関する基礎科学的な研究を活かし、生物多様性について学ぶことができる新たな教材の開発と教育内容の発展に資することを目的とした研究を行っています。

## 2. 博士課程における教育研究について

生物多様性の内容を効果的に教育するための新たな教材や指導法を開発する研究のフィールドとして、生物多様性の学習に適した環境のひとつである里山を選びました。この研究では、学校教育において生物多様性を学習するための教材として里山の生物や環境がどのように利用可能であるかを解明し、里山を利用した生物多様性教育の教材を開発することを目指しています。これまでの研究では、次のようなことを明らかにしてきました。

- 1) 里山において簡易な樹木センサスが学校教育で実施可能なものであり、得られたデータを生徒自身が解析することで、生物多様性に関する探究が可能であることを示しました。
- 2) 学校教育で観察の対象となる生物のうち、鳥類を確実に観察する方法として、秋冬季に校庭の樹木につく果実を採食する鳥類を観察することを検証し、探究活動で観察できる可能性が高いことを示しました。

## 3. 担当講義について

生物教育内容論研究では、中等教育における生態学を対象とした探究で扱えるテーマ、内容、教材について議論し、実物を観察・実験することが困難なテーマについてシミュレーションの手法で探究する可能性を探ります。教育プレゼンテーション論では、理系のセンスによるプレゼンテーションの仕方について演習的に体験します。

## 4. 最近の主な研究業績

- 1) 南アルプス魅力発信・環境学習サイトを活用した探究モデル. 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学篇). 2024.12
- 2) 里山二次林における樹木分布データを活用した探究のモデル. 静岡大学教育実践総合センター紀要. 2022.3
- 3) 中等教育における緑地の樹木を対象とした探究活動のモデル -静岡大学教育学部附属浜松中学校の「天神森」における事例-. 静岡大学教育実践総合センター紀要. 2020.3
- 4) Do Coarser Gap Mosaics in Conifer Plantations Induce More Seed Dispersal by Birds? Temporal Changes during 12 Years after Gap Creation. *Forests*. 2019.10

# 郡 司 賀 透



所属 静岡大学大学院教育学領域  
職位・学位 准教授・博士（教育学）  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 理科教育論研究 教科開発学原論 教育フィールド調査論  
研究テーマ 理科カリキュラム基礎論 理科カリキュラム史研究  
理科カリキュラムにおける工業に関する教育内容・教材論

## 1. これまでの教育研究について

私がこれまで携わってきた研究の一つは、戦後日本の高等学校化学教科書における化学工業教材史です。関連して二つ目は、主として日本の経済成長と教育の関係を、理科教育内容・教材論の水準で研究を進めておりその特質を明らかにしようとしています。三つ目が科学的探究及びエンジニアリングデザインプロセスを活用した理科授業・教材研究になります。

## 2. 博士課程における教育研究について

教科開発学の視点から、専門領域である「理科」を基盤にしつつも、領域の枠に拘泥することなく、児童・生徒をとりまく環境を絶えず意識しながら、現代の学校教育に諸問題に対応する研究を進めています。理科の特定の教育内容・教材の歴史の変遷について、教育環境学的な背景に基づいて指導することが可能です。

## 3. 担当講義について

「理科教育論研究」では、教科開発学の核心をなす理科カリキュラム開発について、理科の目的論・目標論、理科の学習内容構造、子どもの自然理解の実態、理科教授論及び、科学と社会との関連について包括的な理解を図るとともに、理科における教科開発力の育成を目指します。

「教育フィールド調査論」では、量的及び質的分析の基礎を学んだ後、受講者の研究テーマに即した分析手法について、議論を通して検討します。

## 4. 主な研究業績（2018年4月～）

- ・郡司賀透 『理科教育における工業的教材の意義と変遷』 風間書房 2019年2月 全252ページ
- ・郡司賀透・鬼丸颯都・梶山涼矢・井出祐介・高橋政宏 「中学校理科授業における生徒の自己統制感に関する実践研究」 『静岡大学教育実践総合センター紀要』 2020年3月 30号 pp.254-261
- ・郡司賀透 「小学校理科のカリキュラム構成とその動向」 片平克弘・木下博義 『初等理科教育』 協同出版 2021年12月 pp.26-29
- ・郡司賀透 「日常生活と理科の関係」及び「地域性を活かした教材開発」 山本容子・松浦拓也 協同出版 2021年12月 pp.21-22 及び pp.254-257
- ・露木隆・郡司賀透・岩山勉 「電気抵抗に関する概念形成を促す授業の開発：導電性粘土を用いた指導プログラムによる素朴概念の修正」 『理科教育学研究』 第63巻 第1号 2022年7月 pp.127-138
- ・山内慎也・郡司賀透・飯田寛志・後藤顕一 「中学校理科の考察における科学的な表現の育成に関する一考察：相互評価活動下において考察記述の定型化指導を組み込む学習活動を通して」 『理科教育学研究』 第63巻 第2号 2022年11月 pp.1-16
- ・神谷昭吾・平澤傑・郡司賀透・延原尊美 「評価指標を用いた「主体的に学習に取り組む態度」の評価：中学校1年生光の性質の単元を通して」 『静岡大学教育実践総合センター紀要』 33号 2023年3月 pp.275-280
- ・郡司賀透 「理科カリキュラム史研究の現状と今後の可能性」 愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻 『教科開発学を創る』 愛知教育大学出版会 第5集 2024年3月 pp.176-190

## 5. 主な社会的活動（現在）

日本理科教育学会（理事・評議員）、日本教材学会理事、日本エネルギー環境教育学会（編集委員）

# 松 永 泰 弘

所属 静岡大学教育学部  
職位・学位 教授 博士（工学）  
博士課程分野 創造系教科学  
担当科目 技術教育内容論 教科開発学セミナー  
研究テーマ 動くおもちゃものづくり・あそび・探究，月面上であそぶおもちゃ，  
現実事象と数学的抽象化を往還する数学的活動，  
学校・園と家庭の学びが継続する探究の深化，  
*Unity in Diversity, Play/Inquiry-Based Learning*



## 1. これまでの教育研究について

科学技術ものづくり教材の中でも，機械領域の教材開発を行う。主な教材として，形状記憶合金・蒸気・ソレノイド・スターリングエンジンカー，受動歩行模型，機械式振子・天賦時計，*Automata・Marionette*を4つの柱とし，様々な動くおもちゃものづくり教材を開発する。動作原理を探究，新しい道具に挑戦し，ものづくりに熱中する子どもたちの姿，家族や友達に動作原理を説明し製作したものを自慢する姿，継続により，困難に立ち向かう姿が出現するような不思議や驚きを伴う教材開発。

## 2. 博士課程における教育研究について

学習集団における *Unity in Diversity, Play/Inquiry-Based Learning*，学校・園と家庭の学びが継続する探究の深化について取り組む。動くおもちゃものづくり・あそび・探究教材の開発を行う。現実事象と数学的抽象化を往還する数学的活動教材の開発を行う。授業実践を通して，教材の特徴，こどもの変容を明らかにする。

## 3. 担当講義について

【技術教育内容論】 動くおもちゃものづくり・あそび・探究教材の特徴，授業実践の評価を議論する。

## 4. 主要な研究業績

- ・機構の設計・製作を含むオートマタ教材の開発と実践による検証，日本産業技術教育学会誌，第66巻，第3号，pp.151-159（2024）
- ・ルーローの三角形を車輪に用いた偏心車輪模型の運動解析，静岡大学教育学部研究報告，教科教育学篇，56，pp.57-68（2024）
- ・現実事象と数学的抽象化を往還する数学的活動“塩山”の探究深化と高校数学の授業実践による検証，静岡大学教育学部研究報告，人文・社会・自然科学篇，75，pp.190-206（2024）
- ・数学的ものづくり活動における相貫体教材の開発，日本産業技術教育学会誌，第65巻，第4号，pp.269-277（2023）
- ・棒の曲げ振動の先端で回転しながら揺れるおもちゃものづくり教材の開発，日本産業技術教育学会誌，第65巻，第4号，pp.279-287（2023）
- ・ゼンマイ式オルゴールの動力で動くオートマタ教材の開発，日本産業技術教育学会誌，第65巻，第4号，pp.289-298（2023）
- ・中学校技術分野における機構製作による学習効果の検証，日本産業技術教育学会誌，第65巻，第3号，pp.215-223（2023）
- ・現実事象と数学的抽象化を往還する数学的探究活動“塩山”，静岡大学教育学部研究報告，人文・社会・自然科学篇，74，pp.46-60（2023）
- ・小学校低学年の遊びを中心とした偏心軸の車輪で動くおもちゃ探究教材を用いた授業実践，静岡大学教育学部研究報告，教科教育学篇，55，pp.88-101（2023）
- ・ *Play/Inquiry-Based Learning Using Pendulum Toys in Steam Classes, FINE ART, DESIGN, AND TECHNOLOGY EDUCATION 2023, Vol.3, pp.187-195（2023）*

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 浜松工業高校 SSH，こどもクリエイティブタウン「ま・あ・る」評価委員

# 紅 林 秀 治



所属 静岡大学大学院教育学領域 技術教育系列  
職位・学位 教授 博士 (学校教育学)  
博士課程分野 創造系教科学  
担当科目 技術教育教材論研究  
研究テーマ 技術教育 設計教育 教材開発論

## 1. これまでの教育研究について

静岡大学に着任して以来、技術科教育法等担当教員として、技術科教育に関する教材、指導法、カリキュラムの開発に関する研究を行っています。これまでに、技術を学ぶ意義を実感させる指導法、設計に関わる思考力やシステム概念の形成過程に関する研究を深めています。

## 2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの教育研究で行ってきたことを基盤としながら、さらに、普通教育としての技術教育の本質や歴史を踏まえた上で、技術リテラシーについて考察します。また、設計力を高めるための指導や教材の在り方についても追究していきたいと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【技術教育教材論研究】

本講義では、普通教育としての技術教育と専門教育としての技術教育の違いを整理してから、技術教育では欠かすことができない概念である設計について考察します。さらに、設計能力を高めるための教材や教育方法について検討します。検討にあたっては、実際に教材を設計したり製作したりします。

## 4. 主要な研究業績 (2022.4 ～)

- (1) Amount of energy consumption during physical activity is a key element in the analysis of neurogenesis in the adult mouse hippocampus, *Biwako Journal of Rehabilitation and Health Sciences*, Vol. 1 (2022), pp.41-49, Shuji Kurebayashi・Taro Koike・Tetsuji Mori・Hisao Yamada
- (2) 小学校プログラミング教育のための立体LEDキューブ制御教材の開発, *日本産業技術教育学会誌*, 第64巻第1号, pp. 19-29, 2022年, 杉山優貴・大村基将・青木麟太郎・紅林秀治
- (3) 中学生ロボットコンテストにおける問題解決過程と教育効果の検討, *教科開発学論集* 第11号 (2023. 3), pp. 101-1014, 室伏春樹・紅林秀治
- (4) 水中掃除ロボット教材の開発, *日本産業技術教育学会誌*, 第65巻, 第1号, 2023年, pp. 43-51, 池谷 慎吾・青木 麟太郎・大村 基将・紅林 秀治
- (5) 工業高校における表面筋電位を用いた計測・制御教材の開発, *日本産業技術教育学会誌*, 第65巻, 第1号, 2023年, pp. 63-72, 脇谷 至恩・大村 基将・青木 麟太郎・紅林 秀治
- (6) 教材用水中探査ロボットの開発, *日本産業技術教育学会実践事例集「テクノロジーとエンジニアリングの教室」* 第2巻 2023年, pp. 59-68, 柳田 修那・大村 基将・渡邊 啓介・宇都宮 洪志・青木 麟太郎・紅林 秀治
- (7) 問題解決の見通しを形成させるものづくり学習指導の検討, *日本産業技術教育学会誌*, 第65巻, 第4号, 2023年, pp. 341-351 室伏 春樹・紅林 秀治
- (8) : 中学校技術科における手指の認識装置を活用した5本指ロボット計測・制御教材の開発, *日本産業技術教育学会誌*, 第66巻, 第1号, 2024年, pp. 1-10, 青木 麟太郎・小山 真奈・大村 基将・紅林 秀治
- (9) STEM /STEAM 教育における振り返り学習, *教科開発学論集* 第13号 (2024年), pp. 115-121, 紅林秀治

## 5. 主要な社会活動業績 (2024. 4～)

- (1) 教育研究会 (藤枝市, 焼津市) 講師
- (2) 静岡県教職員組合 教育研究集会 技術科教育分科会 講師
- (3) 静岡大学 STEAM 教育研究所 所長

# 杉山 康 司

所属 静岡大学グローバル共創科学部（教育学部 副担当教員）  
職位・学位 教授 博士（スポーツ健康科学）  
博士課程分野 創造系教科学  
担当科目 教科開発学実践論、体育・課外活動教材論研究  
研究テーマ 運動生理学、体力科学、トレーニング科学



## 1. これまでの教育研究について

保健体育の教科専門である運動生理学をメインに体力科学的、スポーツ科学的な研究を行っています。特に人が行う各種運動およびスポーツについてエネルギー消費量の経済性や骨格筋活動について評価し、その結果を基に運動指導に向けたプログラムや指針について検討しています。対象者は乳幼児から高齢者まで幅広くテーマを持ちながら活動しております。R5 年度からグローバル共創科学部に配置替えとなりましたが大きなテーマは変わらず行っています。ただ、さらに広い視野を持って共創学的な研究に取り組もうとしております。

## 2. 博士課程における教育研究について

生涯にわたるスポーツ教育に目を向けて研究、特に取り組んできた運動生理学は客観的データの取得を主とした自然科学系の分野であり、学校教育における教科教育の授業研究そのものを支える研究の一つです。教科教育は基礎研究、つまり運動生理学等の教科専門の知見を土台に築かれているといっても過言ではない重要な位置づけであります。博士課程では保健体育において教科専門の知や手法を直接的に教科教育に活かす新たな教科開発学への挑戦が必要であると考えています。

## 3. 担当講義について

### 【教科開発学実践論】

さまざまな教科で教科専門と教科教育についてどのような連携があるのかなどを模索し、教科開発学専攻での学位の特色と人材育成に向けた討論をしたいと考えています。教科開発学実践論は受講生の皆様が取り組んでいる博論の進捗状況を拝見させていただくと同時に途中経過や克服課題について意見交換をする場です。他教科との共通点や相違点、他教科の教師も知るべき保健体育の知識から受講生の皆様の研究課題について意見や助言を述べたいと思います。

### 【体育・課外活動教材論研究】

教科開発学原論において一部紹介した内容を基に受講生の皆様が直面している研究課題と照らし合わせながら、さらに一步深めた内容にしたいと思います。運動生理学やスポーツ科学という分野で得られてきた研究成果をいくつかのトピックスとの研究手法についての共通点や相違点について意見を交わし、実際の研究データに触れながらの論文抄読から、常に学校教育に応用する立場で討論してみたいと思います。保健体育教科専門の一つである運動生理学分野からみた創造教科学を考えていきます。

## 4. 主要な研究業績（2013.4 ～）

「上肢の負荷、筋活動様相および呼吸循環パラメータからみるチューブウォーキングの特性」 2024 ウォーキング研究 27 : 73-82 土屋亮太、杉山康司、他、Sugiyama K and Michael J. Hamlin、保健体育教材としてのポスチュアウォーキングの可能性～エキスパートポスチュアウォーカーの筋活動およびビギナーが示す運動強度から～」ウォーキング研究, 2016, 20, 21-27, 杉山康司 他、「Blow Rifle: A Healthy New Sport」Sport Exerc Med Open J. 2017; 3(2): 46-52. Sugiyama K 他、「ノルディックウォーキング、ランニングにするとどうなる?～ノルディックランニングの生理学的応答～」ウォーキング研究 21, 2018, 17-25、杉山康司、他など

## 5. 主要な社会活動業績

日本体力医学会会員（評議員）、日本ウォーキング学会（諮問委員）、日本スポーツ少年団指導育成部会部会長、静岡県こどもの体力向上推進委員会、他

# 村上陽子

所属 静岡大学教育学部家政教育講座  
職位・学位 教授 博士(学術)  
博士課程分野 創造系教科学  
担当科目 教科開発学実践論, 家庭科教材論研究, 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ  
研究テーマ 食文化, 食品物性学, 食品色彩学, 食品科学, ものづくり, 教科連携



## 1. これまでの教育研究について

食品学・栄養学・食品衛生学・家庭科教育法等の担当教員として、食育や家庭科教育に関する教材開発、教科連携に関する研究を行っています。食品については、各種栄養素の成分組成や調理加工による変化、食品のもつ物理特性（硬さ、凝集性、付着性）とともに、これら物理特性が嗜好性に及ぼす影響について研究しています。また、和菓子を中心として食品の色彩が嗜好性に及ぼす影響について分析するとともに、経験的に行われてきた調製方法を理論的に分析するなど、我が国の食文化について科学的・文化的な視点から研究を行っています。最近では、小・中学校における給食指導や食に関する指導などについても研究を行っています。これら研究を通して得られた成果については教材化し、幼稚園をはじめ、小・中・高等学校において実践を行っています。教育分野においては、家庭科における食育、および、ものづくりの課題を明らかにしつつ、これからの家庭科における新しい教材を提案しています。

## 2. 博士課程における教育研究について

食品における物理的特性や化学的特性、官能特性などを科学的手法・文化的手法を用いて検討していきます。また、家庭科における食品学や栄養学、食品衛生学の意義について、多様な視点から考察できる資質・能力の育成を目指しています。教科連携について、食育など生活に関わる現代的課題やものづくりを核とした教科連携モデルの考案・授業実践を考えています。

## 3. 担当講義について

### 【家庭科教材論研究】

家庭科の指導内容について、①小・中・高等学校の家庭科の学習における課題、②家庭科教育に必要な視点、③家庭科の知識・技能の定着と多角的視点の育成を目指した教材・指導法について分析・考察し、新たな教材づくりを検討します。

## 4. 主要な研究業績 (2023-24)

### 【著書・論文・学会発表】

- (1) 村上陽子「第6章 日本の食文化 嗜好品の文化」、『食育の百科事典』（日本食育学会編集）、丸善出版（2023）
- (2) 村上陽子「第4編 飲料・菓子類のおいしさ、第2章 菓子類、第5節 干菓子」、『伝統食品のおいしさの科学』（山野善正監修）、エヌティーエス、pp. 461-472（2024）
- (3) 村上陽子「第4編 飲料・菓子類のおいしさ、第2章 菓子類、第6節 和三盆糖」、『伝統食品のおいしさの科学』（山野善正監修）、エヌティーエス、pp. 473-484（2024）
- (4) 村上陽子「第4編 飲料・菓子類のおいしさ、第2章 菓子類、第7節 飴（水飴）」、『伝統食品のおいしさの科学』（山野善正監修）、エヌティーエス pp. 485-495（2024）
- (5) 村上陽子、安本顕：蒸し羊羹の製法が物理特性および嗜好性に及ぼす影響、静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）、75、236-251（2024）
- (6) 村上陽子、信國瑞希：年中行事「五節句」に対する大学生の認知と行動：端午の節句のしきたり（装飾・室礼）と行事食に着目して、静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）、56、85-104（2024）
- (7) 村上陽子、石川茉優：糖の種類が錦玉（和菓子）の物理特性に及ぼす影響、日本調理科学会 2024 年度大会（2024）

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 日本教育大学協会全国家庭科部門運営委員
- 2) 静岡県中学生創造ものづくり教育フェア（お弁当部門）審査委員長
- 3) 全日本中学校技術・家庭科研究大会助言者

# 長谷川 慎

所属 静岡大学教育学部音楽教育講座  
職位・学位 准教授 修士（音楽）  
博士課程分野 創造系教科学  
担当科目 表現・鑑賞論  
研究テーマ 音楽教育学，日本音楽の指導法，和楽器（箏・三味線・胡弓）  
演奏法，地歌箏曲総論，地歌箏曲の楽器の変遷



## 1. これまでの教育研究について

地歌箏曲演奏家としての経験から音楽科教育の今日的課題の一つである「日本音楽の指導」に関して指導法，教材開発等を研究している。「体感する日本音楽」をモットーに学生指導を行い，伝統音楽の表現と鑑賞活動に取り組むことで，深奥な日本音楽の良さを体感し他者にその魅力を語れるような学生を育てることを目指している。

## 2. 博士課程における教育研究について

博士課程においては，「表現・鑑賞論」の授業を坂口京子教員と分担で担当する。これまでの音楽科教育における日本音楽指導について俯瞰し，問題点を浮き彫りにしながら今後の指導のあり方について，学生諸君と考えていきたいと考えている。先人が育み伝えてきた音楽でありながら，自らの言葉として語れる教員が少ない現状を改善し，子どもたちにどのように指導するかを考えるのは教科教育に携わる人間の使命の一つである。教員と学生双方が経験を生かして日本学の指導，教材開発について考えていきたい。

## 3. 担当講義について

### 【表現・鑑賞論】

芸術は存在そのものが教育であると言える。そして，芸術を表現することとそれを鑑賞することは表裏一体の関係であり，常に同時発生的に進行する創造性豊かな思考過程である。この授業では，そういった表現と鑑賞の思考過程を芸術学と認知科学を融合させた学際的な観点で整理し，芸術教育のありかたについて考察するものである。音楽学概論，音楽教育学概論，音楽鑑賞教育論の視点から教科開発学における音楽科教育を探究する。

### 【日本伝統音楽実践研究】

我が国の伝統音楽について概観し，第三者へ説明できるようになることを目標とし，学習指導要領で述べられている「伝統と文化の学習」について，特に音楽科における指導について講義と演習を通じて理解する。

## 4. 主要な研究業績（2019.1～）

1) 本多佐保美編著「第V章1 箏（箏曲）の学習」『日本音楽を学校でどう教えるか』，開成出版，P.44-47，2020

日本音楽の教育と研究をつなぐ会編「箏曲」『唱歌で学ぶ日本音楽』，音楽之友社，2019

2) 齊藤忠彦／菅裕編著「和楽器の指導」『新版 中学校・高等学校教員養成課程 音楽科教育法』，教育芸術社，P.190-191，2019

3) 有本真紀，阪井恵，津田正之編著「II 小学校音楽科の目標と内容 「A 表現」器楽分野 (2) 指導のポイント 「和楽器」」『教員養成課程小学校音楽科教育法新版教員養成課程小学校音楽科教育法』，教育芸術社，P. 34-37，2019

## 5. 主要な社会活動業績（2022.9～）

1) 文化庁主催令和元年度伝統音楽指導者等研修会講師（2022年9月）

2) 岡山県総合教育センター主催令和4年度「地域学」我が国や郷土の伝統音楽における実践的な指導 音楽研修講座講師音楽の授業づくり研修会講師「～口唱歌を用いた和楽器の指導～」（2022年11月）

3) 富士・富士宮地区教育研究会研修会講師（2024年11月）

4) 地歌箏曲研究会の開催「第4回古態の楽器による地歌の会」東京藝術大学第7ホール（2025年3月）



## VIII. 諸資料

※：必修科目、基：基礎科目、応：応用科目  
 環：教育環境学分野科目、人：人文社会系教科学分野科目  
 自：自然系教科学分野科目、創：創造系教科学分野科目

前期：愛知教育大学

3月31日	4月6日	4月7日	4月13日	4月14日	4月20日	4月21日	4月27日	4月28日	4月29日	5月3日	5月4日	5月6日	5月11日	5月12日	5月18日	5月19日	5月25日	5月26日	6月1日	6月2日	6月8日	6月9日	6月15日	6月16日	6月22日	6月23日	6月29日	6月30日	7月6日	7月7日	7月13日	7月14日	7月15日	7月20日	7月21日	7月27日	7月28日	8月3日	8月4日	8月10日	8月11日	8月12日	8月24日	8月25日	8月31日	9月1日
日	土	日	土	日	土	日	土	日	月祝	金祝	土祝	日祝	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	月祝	土	日	土	日	土	日	土	日	月休	土	日	土	日
A期間 基礎科目														B期間 分野科目														C期間 補講および集中講義、セミナー																		
合同ガイダンス														基・文化資源活用論①														博士論文最終試験（会場・静大）																		
※基・教科開発学原論②（愛教大）														※基・教科開発学原論①（愛教大）														教科開発学研究会（会場・静大）																		
※基・教科開発学原論③（静大）														※基・教科開発学原論④（静大）														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
土曜①														日曜①														教科開発学研究会（会場・静大）																		
土曜②														日曜②														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
土曜③														日曜③														教科開発学研究会（会場・静大）																		
土曜④														日曜④														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		

前期：静岡大学

3月31日	4月6日	4月7日	4月13日	4月14日	4月20日	4月21日	4月27日	4月28日	4月29日	5月3日	5月4日	5月6日	5月11日	5月12日	5月18日	5月19日	5月25日	5月26日	6月1日	6月2日	6月8日	6月9日	6月15日	6月16日	6月22日	6月23日	6月29日	6月30日	7月6日	7月7日	7月13日	7月14日	7月15日	7月20日	7月21日	7月27日	7月28日	8月3日	8月4日	8月10日	8月11日	8月12日	8月24日	8月25日	8月31日	9月1日
日	土	日	土	日	土	日	土	日	月祝	金祝	土祝	日祝	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	月祝	土	日	土	日	土	日	土	日	月祝	土	日	土	日
A期間 基礎科目														B期間 分野科目														C期間 補講および集中講義、セミナー																		
合同ガイダンス														基・教育フィールド調査論①（静大）														博士論文最終試験（会場・静大）																		
※基・教科開発学原論②（愛教大）														※基・教科開発学原論①（愛教大）														教科開発学研究会（会場・静大）																		
※基・教科開発学原論③（静大）														※基・教科開発学原論④（静大）														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司①														創・杉山①														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口①														創・松永①														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司②														創・杉山②														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口②														創・松永②														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司③														創・杉山③														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口③														創・松永③														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司④														創・杉山④														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口④														創・松永④														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑤														創・杉山⑤														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑤														創・松永⑤														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑥														創・杉山⑥														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑥														創・松永⑥														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑦														創・杉山⑦														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑦														創・松永⑦														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑧														創・杉山⑧														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑧														創・松永⑧														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑨														創・杉山⑨														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑨														創・松永⑨														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑩														創・杉山⑩														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑩														創・松永⑩														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑪														創・杉山⑪														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑪														創・松永⑪														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑫														創・杉山⑫														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑫														創・松永⑫														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑬														創・杉山⑬														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑬														創・松永⑬														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑭														創・杉山⑭														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑭														創・松永⑭														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑮														創・杉山⑮														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑮														創・松永⑮														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑯														創・杉山⑯														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑯														創・松永⑯														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑰														創・杉山⑰														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑰														創・松永⑰														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑱														創・杉山⑱														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑱														創・松永⑱														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑲														創・杉山⑲														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑲														創・松永⑲														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司⑳														創・杉山⑳														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口⑳														創・松永⑳														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉑														創・杉山㉑														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉑														創・松永㉑														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉒														創・杉山㉒														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉒														創・松永㉒														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉓														創・杉山㉓														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉓														創・松永㉓														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉔														創・杉山㉔														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉔														創・松永㉔														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉕														創・杉山㉕														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉕														創・松永㉕														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉖														創・杉山㉖														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉖														創・松永㉖														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉗														創・杉山㉗														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉗														創・松永㉗														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉘														創・杉山㉘														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉘														創・松永㉘														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉙														創・杉山㉙														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉙														創・松永㉙														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉚														創・杉山㉚														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉚														創・松永㉚														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉛														創・杉山㉛														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉛														創・松永㉛														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉜														創・杉山㉜														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉜														創・松永㉜														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉝														創・杉山㉝														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉝														創・松永㉝														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉞														創・杉山㉞														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉞														創・松永㉞														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㉟														創・杉山㉟														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㉟														創・松永㉟														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊱														創・杉山㊱														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊱														創・松永㊱														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊲														創・杉山㊲														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊲														創・松永㊲														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊳														創・杉山㊳														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊳														創・松永㊳														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊴														創・杉山㊴														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊴														創・松永㊴														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊵														創・杉山㊵														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊵														創・松永㊵														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊶														創・杉山㊶														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊶														創・松永㊶														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊷														創・杉山㊷														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊷														創・松永㊷														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊸														創・杉山㊸														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊸														創・松永㊸														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊹														創・杉山㊹														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊹														創・松永㊹														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊺														創・杉山㊺														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊺														創・松永㊺														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊻														創・杉山㊻														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊻														創・松永㊻														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊼														創・杉山㊼														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊼														創・松永㊼														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊽														創・杉山㊽														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊽														創・松永㊽														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊾														創・杉山㊾														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊾														創・松永㊾														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		
自・郡司㊿														創・杉山㊿														教科開発学研究会（会場・静大）																		
人・坂口㊿														創・松永㊿														応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）																		

注・開講の原則

- ① 授業は原則として1日4コマで開講する。そのため、1単位は2日、2単位は4日間の授業開講が必要である。
- ② 基礎科目はA期間又はD期間に集中授業として開講する。C期間、F期間に開講することも可能。
- ③ 分野科目は原則としてB期間とE期間に開講する。  
開講する曜日は、土・日曜日及び祝日のいずれかとし、第1週目開始か、第2週目開始を選択する
- ④ C期間とF期間は補講期間であるが、基礎科目、あるいは分野科目の集中授業を置くこともできる。
- ⑤ 教科開発学セミナーⅠ及びⅡはF期間に開講し、セミナーⅢはC期間に開講する。



令和4年度～令和6年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) 1/3

前期:A期間(4月～5月) B期間(6月～7月) C期間(7月～8月)

後期:D期間(10月) E期間(11月～1月) F期間(1月～2月)

愛知教育大学・静岡大学 合同開講科目				令和4年度 集計		令和5年度 集計		令和6年度 集計	
科目 区分	授業科目名	単位	担当教員	開講期間	受講者	開講期間	受講者	開講期間	受講者
基礎 科目	必修 科目	a 2	教科開発学原論 中野 真志(R4,R5) 野平 慎二 梅田 恭子 石川 恭(R4,R6) 田口 達也 坂口 京子(R4,R5) 村山 功(R4,R5) 香野 毅 丹沢 哲郎 中村 ともえ(R6) 小林 敬一(R6)	A期間 4/9(土) 4/16(土) 4/23(土) 4/30(土)	愛教大D1 4名 愛教大D2 1名 静岡大D1 3名	A期間 4/8(土) 4/15(土) 4/23(土) 4/30(土)	愛教大D1 5名 静岡大D1 3名 静岡大D2 1名	A期間 4/27(土) 4/28(土) 5/11(土) 5/18(土)	愛教大D1 2名 静岡大D1 5名
				a 1	寺本 圭輔 野崎 浩成 竹川 慎哉 縄田 亮太(R6) 杉山 康司 紅林 秀治 鎌塚 優子 中村 ともえ(R5) 渡江 かさね(R5) 黒川 みどり(R5) 村上 陽子(R5,R6) 松永 泰弘(R5,R6) 大瀧 綾乃(R6)	D期間 10/1(土) 10/2(日) ★遠隔	愛教大D1 4名 愛教大D3 1名 静岡大D1 4名 静岡大D3 1名	D期間 9/30(土) 10/1(日)	愛教大D1 4名 静岡大D1 3名
応用 科目	必修 科目	b 2	教科開発学 セミナーⅠ 全教員	F期間 2/19(日)	愛教大D1 4名 静岡大D1 4名	F期間 2/18(日)	愛教大D1 3名 静岡大D1 3名	F期間 2/16(日)	愛教大D1 4名 静岡大D1 5名
		b 2	教科開発学 セミナーⅡ 全教員	F期間 2/12(日)	愛教大D2 3名 静岡大D2 4名 静岡大D3 2名	F期間 2/17(土)	愛教大D2 2名 愛教大D3 1名 静岡大D2 3名	F期間 2/15(土)	愛教大D2 5名 静岡大D2 3名 静岡大D3 2名
	選択 科目	b 2	教科開発学 セミナーⅢ 全教員	C期間 8/21(日)	愛教大D3 1名 静岡大D2 1名 静岡大D3 1名	C期間 8/20(日)	静岡大D3 4名	C期間 8/25(日)	愛教大D3 1名 静岡大D3 3名

令和4年度～令和6年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) 2/3

前期:A期間(4月～5月) B期間(6月～7月) C期間(7月～8月)

後期:D期間(10月) E期間(11月～1月) F期間(1月～2月)

愛知教育大学開講科目				令和4年度 集計		令和5年度 集計		令和6年度 集計		
科目区分	授業科目名	単位	担当教員	開講期間	受講者	開講期間	受講者	開講期間	受講者	
基礎科目	選択科目	文化資源活用論	a 1	奥田 浩司(R4) 伊藤 貴啓(R4,R5) 宮村 悠介(R4,R5) 丹藤 博文(R6) 近藤 裕幸	A期間 4/10(日) 4/17(日)	愛教大D1 3名 愛教大D2 1名 愛教大D3 1名	A期間 4/9(日) 4/16(日)	愛教大D1 3名 愛教大D3 2名	A期間 4/20(土) 4/27(土)	愛教大D1 2名 愛教大D2 1名 愛教大D3 1名
		科学技術活用論	a 1	稲毛 正彦(R4) 飯島 康之 小谷 健司 大鹿 聖公 宮川 貴彦(R6)	D期間 10/15(土) 10/16(日)	愛教大D1 1名 愛教大D2 3名	D期間 9/30(土) 10/1(日)	愛教大D1 2名 愛教大D3 2名	D期間 10/5(土) 10/6(日)	愛教大D1 1名
		教育評価実証方法論	a 1	鈴木 英樹(R4,R5) 石田 靖彦 鈴木 裕子 山田 浩平	D期間 10/8(土) 10/9(日)	愛教大D1 4名 愛教大D2 1名 愛教大D3 1名 静岡大D1 3名 静岡大D3 3名	D期間 10/14(土) 10/15(日)	愛教大D1 3名 静岡大D1 1名	D期間 10/19(土) 10/20(日)	愛教大D1 1名 愛教大D2 2名 静岡大D1 3名
分野科目(選択科目)	教育環境学	遊び文化環境論研究	a 2	石川 恭	B期間 日曜日 第1週目	愛教大D2 2名	B期間 日曜日 第1週目	愛教大D1 1名 愛教大D2 2名 愛教大D3 1名 静岡大D1 1名 静岡大D3 1名	E期間 日曜日	愛教大D1 1名 愛教大D2 1名 静岡大D1 2名
		学校適応論研究	a 2	石田 靖彦	E期間 土曜日 第2週目	愛教大D1 1名 愛教大D2 2名 愛教大D3 1名 静岡大D3 1名	E期間 土曜日 第1週目	愛教大D3 1名 静岡大D2 1名	E期間 土曜日	愛教大D1 1名
		教育哲学・思想論研究	a 2	野平 慎二	B期間 日曜日 第2週目	愛教大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日 第2週目	愛教大D1 1名	E期間 土曜日	愛教大D1 2名 愛教大D3 1名 静岡大D1 1名
		教育方法・内容論研究	a 2	竹川 慎哉	E期間 日曜日 第1週目	愛教大D1 1名 愛教大D3 1名 静岡大D3 1名	E期間 日曜日 第1週目	愛教大D2 1名	E期間 土曜日	愛教大D3 1名 静岡大D1 1名
		教授学習論研究	a 2	野崎 浩成	B期間 土曜日 第1週目	愛教大D2 1名	B期間 土曜日 第1週目	愛教大D1 2名 愛教大D2 2名 静岡大D2 1名	B期間 日曜日	愛教大D1 1名
		幼児教育・保育内容論研究	a 2	鈴木 裕子	E期間 土曜日 第2週目	愛教大D1 1名	E期間 土曜日 第2週目	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名	B期間 土曜日	愛教大D1 1名
		ITC教育研究	a 2	梅田 恭子	E期間 日曜日 第2週目	愛教大D2 1名	E期間 日曜日 第2週目	愛教大D1 1名 愛教大D2 2名	E期間 土曜日	愛教大D1 1名
	人文社会系科学	第二言語教育論研究	a 2	田口 達也	E期間 日曜日	静岡大D1 1名	E期間 日曜日	愛教大D1 1名 愛教大D2 1名	E期間 日曜日	愛教大D1 2名
		社会科学教育論研究	a 2	近藤 裕幸	B期間 土曜日		B期間 土曜日		B期間 日曜日	愛教大D3 1名 静岡大D1 2名
		地理学教材論研究	a 2	伊藤 貴啓	B期間 日曜日 第2週目		B期間 日曜日 第2週目			
		国語科教育教材論研究	a 2	丹藤 博文	E期間 日曜日 第1週目	愛教大D1 1名 愛教大D2 2名	B期間 日曜日 第1週目	愛教大D1 1名	E期間 日曜日	
		生活科教育内容論研究	a 2	中野 真志	B期間 土曜日 第1週目	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名	E期間 土曜日 第1週目	愛教大D1 2名 静岡大D2 1名	B期間 土曜日	愛教大D1 1名 静岡大D1 1名 静岡大D2 1名 静岡大D3 1名
	自然系科学	数学教材論研究	a 2	飯島 康之	B期間 土曜日 第1週目	愛教大D1 2名 静岡大D1 1名	B期間 土曜日 第1週目	愛教大D1 1名	B期間 日曜日	静岡大D1 1名
		物理教材論研究	a 2	岩山 勉	E期間 日曜日	愛教大D1 1名 愛教大D2 1名	E期間 日曜日	愛教大D1 1名	E期間 土曜日	
		数学教育内容論研究	a 2	小谷 健司	E期間 日曜日 第2週目		E期間 日曜日 第2週目		B期間 土曜日	愛教大D1 1名 愛教大D2 1名
理科教材開発論研究		a 2	大鹿 聖公	B期間 日曜日 第1週目	愛教大D1 1名	B期間 日曜日 第1週目	愛教大D1 1名	B期間 日曜日	静岡大D2 1名	
物理教育内容論研究		a 2	宮川 貴彦					E期間 日曜日		
創造系科学	保健科教育論研究	a 2	山田 浩平	B期間 土曜日 第2週目		E期間 土曜日 第2週目	愛教大D1 2名	B期間 土曜日	静岡大D2 1名	
	保健体育内容論研究	a 2	寺本 圭輔	E期間 土曜日 第3週目		E期間 土曜日 第3週目	愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	E期間 日曜日	愛教大D2 1名	
	体育教材開発論研究	a 2	鈴木 英樹	B期間 土曜日 第4週目	愛教大D1 1名	B期間 土曜日 第4週目	愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日	愛教大D1 1名 愛教大D2 1名	
	球技教材開発論研究	a 2	縄田 亮太					E期間 日曜日	愛教大D1 1名	

令和4年度～令和6年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) 3/3

前期:A期間(4月～5月) B期間(6月～7月) C期間(7月～8月)  
後期:D期間(10月) E期間(11月～1月) F期間(1月～2月)

静岡大学開講科目				令和4年度 集計		令和5年度 集計		令和6年度 集計		
科目区分	授業科目名	単位	担当教員	開講期間	受講者	開講期間	受講者	開講期間	受講者	
基礎科目	選択科目	教育プログラム開発論	a 1	塩田 真吾 中村 美智太郎	A期間 5/14(土) 5/15(日)	愛教大D1 1名 愛教大D2 2名 静岡大D1 2名 静岡大D3 1名	A期間 5/13(土) 5/14(日)	静岡大D1 1名 静岡大D2 1名	A期間 5/25(土) 5/26(日)	愛教大D1 2名 静岡大D1 3名
		表現・鑑賞論	a 1	伊藤 文彦(R4,R5) 長谷川 慎 坂口 京子(R6)	D期間 10/15(土) 10/22(土)		D期間 10/14(土) 10/21(土)	静岡大D1 1名	D期間 10/12(土) 10/13(日)	
		教育フィールド調査論	a 1	村越 真 郡司 賀透	A期間 4/17(日) 5/24(日)	愛教大D1 1名 静岡大D1 3名 静岡大D3 1名	A期間 4/29(日) 5/13(日)	愛教大D1 2名 愛教大D2 1名 愛教大D3 1名 静岡大D1 3名	A期間 4/20(土) 5/19(日)	愛教大D1 1名 愛教大D2 1名 愛教大D3 1名 静岡大D1 2名
		教育プレゼンテーション論	a 1	白畑 知彦 小南 陽亮 渋江 かさね(R6)	E期間 変形 11/12(土) 1/7(土)	愛教大D2 1名 静岡大D1 3名	E期間 変形 11/11(土) 1/6(土)	愛教大D2 1名 静岡大D1 4名	E期間 変形 11/9(土) 2/2(日)	愛教大D1 1名 愛教大D2 1名 愛教大D3 1名 静岡大D1 2名 静岡大D2 1名
分野科目(選択科目)	教育環境学	学校危機管理論研究	a 2	村越 真	E期間 土曜日 第2週目	静岡大D1 1名 静岡大D2 1名	B期間 土曜日 第2週目	静岡大D1 1名 静岡大D3 1名	E期間 土曜日 第1週目	静岡大D1 2名 静岡大D2 1名
		教育工学論研究	a 2	村山 功	E期間 日曜日 第2週目	静岡大D1 2名 静岡大D2 1名 静岡大D3 1名	E期間 日曜日 第2週目	静岡大D2 1名	E期間 日曜日 第1週目	愛教大D3 1名 静岡大D1 1名 静岡大D2 2名
		養護実践教育学論研究	a 2	鎌塚 優子	B期間 土曜日	静岡大D2 1名 静岡大D3 1名	B期間 土曜日 隔週		8/22(木) 8/26(月) 8/27(火) 9/9(月)	愛教大D1 1名 愛教大D2 1名 静岡大D1 1名
		特別支援教育学研究	a 2	香野 毅	E期間 日曜日	愛教大D2 1名 静岡大D2 1名	E期間 日曜日 隔週		E期間	愛教大D2 1名 静岡大D3 1名
		情報教育学研究	a 2	塩田 真吾		静岡大D1 1名 静岡大D2 1名		静岡大D1 1名 静岡大D2 1名	E期間 11/3(日) 11/4(月・祝) オンデマンド	愛教大D3 1名
		人間形成論研究	a 2	中村 美智太郎					E期間	静岡大D1 1名
		生涯教育学研究	a 2	渋江 かさね					E期間 土曜日	静岡大D1 1名
	創造系教育学	国語教育論研究	a 2	坂口 京子	B期間 土曜日 第2週目	愛教大D1 1名 愛教大D3 1名	E期間 土曜日 第1週目		B期間 土曜日 第2週目	静岡大D1 1名
		文学教材論研究	a 2	中村 ともえ					E期間	
		生物教育内容論研究	a 2	小南 陽亮	E期間 土曜日 第1週目		E期間 土曜日 第1週目	静岡大D1 1名	E期間 土曜日 第1週目	
		理科教育論研究	a 2	郡司 賀透	B期間 土曜日 第1週目		B期間 土曜日 第1週目	静岡大D1 1名	B期間 日曜日 第1週目	
		技術教育内容論研究	a 2	松永 泰弘	B期間 土曜日 第3週目	静岡大D2 1名	B期間 土曜日 第3週目	愛教大D2 1名	B期間 日曜日 第1週目	
		技術教育教材論研究	a 2	紅林 秀治	B期間 日曜日 第2週目	静岡大D1 1名	B期間 日曜日 第2週目		B期間 土曜日	静岡大D1 1名
		体育・課外活動教材論研究	a 2	杉山 康司	B期間 日曜日 第1週目	愛教大D2 1名	B期間 日曜日 第1週目		B期間 日曜日 第1週目	愛教大D2 1名 静岡大D2 1名 静岡大D3 2名
創造系教育学	家庭科教材論研究	a 2	村上 陽子	B期間 土曜日 第1週目		B期間 土曜日 第1週目		B期間 6/15(土) 6/23(日) 6/29(土) 7/13(土)		
	日本伝統音楽実践研究	a 2	長谷川 慎					9/28(土) 9/29(日) 10/5(土) 10/6(日)	愛教大D1 1名	

## 教科開発学論集 第13号(2024) 掲載論文一覧

### 【 論 文 】

- 環境構成としての保育者の支援……………小林 みどり……………1  
－3歳児の遊び場面における保育者の「モノを動かす」行為に着目して－
- 保育の場における保育者と保護者の子ども理解の違い……………木田 千晶……………13  
－幼児が集団で遊ぶ場面に対する解釈に着目して－
- 保育室内環境において1歳児の適応過程にものが及ぼす影響……………後藤 由美……………27
- 英語学習における機械翻訳(MT)の使用……………稲葉 みどり……………39  
－有用性と危惧に関する大学生の意識を探る－
- 幼児期の運動習慣が通常歩行と視覚誘導歩行間の神経駆動の強さの違いに及ぼす影響……………大矢 知佳……………49  
－筋電図間コヒーレンス法を用いて－  
石原 勇次郎  
村松 愛梨奈  
寺本 圭輔
- 技術科の試作品製作における最適化に向けた修正・改善点の分類……………河村 敏文……………59  
－自己決定群と他者参考群の違いに着目して－  
紅林 秀治
- 技能学習における生徒の技能を言語化することの教育効果……………樋口 大輔……………71  
－木材加工実習での鋸引き作業に関する記述に着目して－  
紅林 秀治

### 【 研究ノート・資料 】

- 小学校体育科におけるハンドボールの「教材化」の現状と課題……………山下 純平……………81  
－メツラーの学習指導論における戦術学習モデルに焦点を当てて－
- 歴史的ナラティブの構成を促す協調学習……………美那川 雄一……………91  
－単形質なナラティブを産出するピアの要因に関する検証－
- 地震時の移動物体の危険性評価と避難行動の適切性に対する児童の認識……………村越 真……………99  
鈴木 理沙子
- 「語り」の持つ主観的な側面について学習するための教材開発……………諏訪園 純……………107  
－『源氏物語』浮舟巻の長大な心内語を取り上げて－
- STEM /STEAM 教育における振り返り学習……………紅林 秀治……………115

### 【 付 録 】

- 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科 共同教科開発学専攻紀要発行要項……………122
- 『教科開発学論集』投稿要領……………124



---

愛知教育大学・静岡大学教育学研究科  
(後期3年博士課程)  
共同教科開発学専攻 2024年度報告書  
ROAD第13号

印刷：令和7年3月31日  
発行：国立大学法人愛知教育大学  
国立大学法人静岡大学  
編集：愛知教育大学・静岡大学教育学研究科  
ISSN 2187-7319

---





愛知教育大学・静岡大学教育学研究科（後期3年博士課程）共同教科開発学専攻 2024年度報告書

[ROAD]

# ROAD

第13号 令和7年3月発行